高松市埋蔵文化財調査報告第36集

太田第２土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

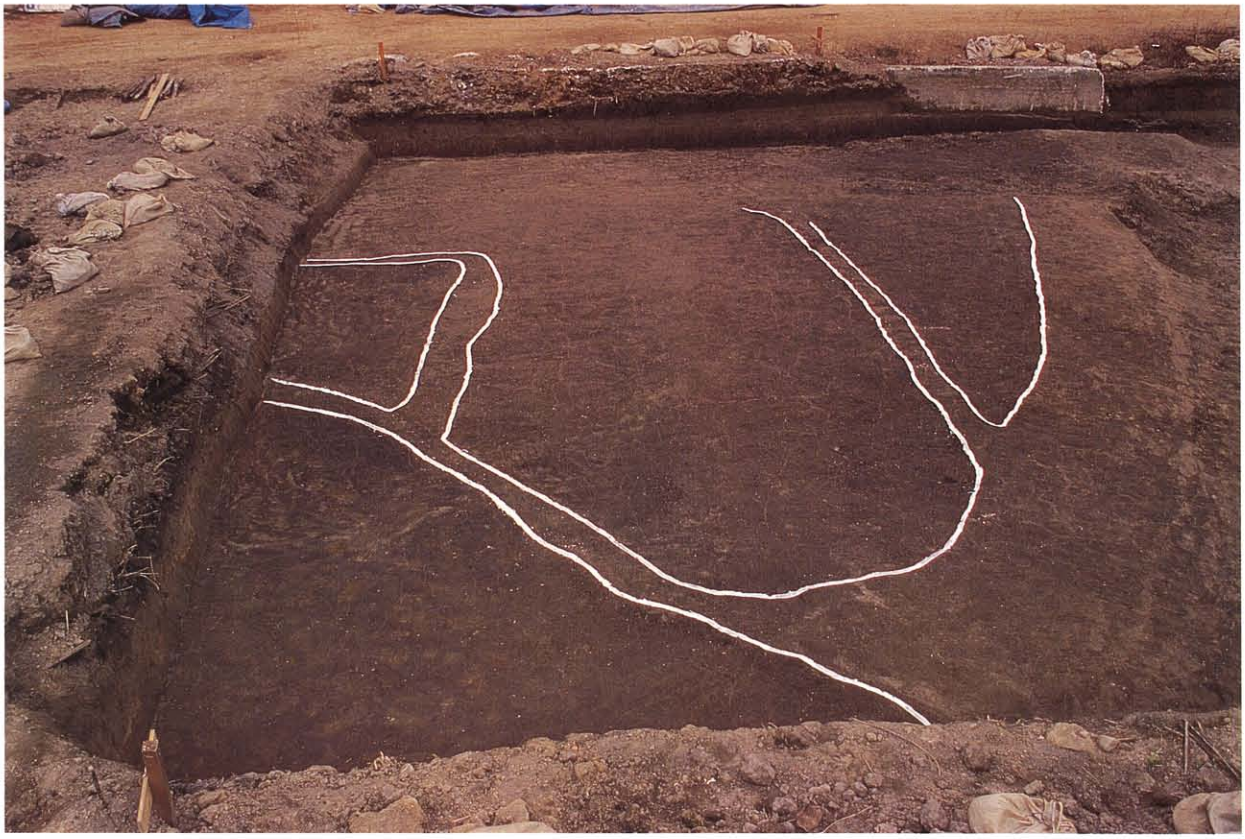
境目・下西原遺跡

１９９８年３月

高　松　市　教　育　委　員　会

1．1～3工区

2．2～4工区



1．1工区水田

2．Ⅲ期水田

高松市埋蔵文化財調査報告第36集

太田第２土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

境目・下西原遺跡

１９９８年３月

高　松　市　教　育　委　員　会

はじめに

私たちが普段何気なく暮らしている場所の地下には、過去からのメッセージがたくさん眠っています。それは、今から１万年前からのものであったり、数百年前のものであったりします。物言わない幾多のメッセージに現代の光を当て、私たちの目に見えるようにし、解読するのが「考古学」であります。

今回報告いたします『境目・下西原遺跡』は、太田第２土地区画整理事業の都市計画道路木太鬼無線建設に伴って発掘調査を実施したもので、松縄町と木太町にあります。遺跡の南東側には高松市立木太中学校が隣接しており、遺跡の３工区を南北に分断する道路には、朝夕たくさんの中学生の通学する姿が見られます。発掘調査を行っているときに、毎日興味を持って見つめながら通学する中学生は、調査している調査員や作業員の励みとなりました。

調査は、平成７年１月から４月までの約３ヶ月をかけて行われました。その結果、弥生時代から近世に至る多数の遺構が検出されました。主な遺構としては、掘立柱建物・溝・土坑・水田・自然旧河道が挙げられます。特に、注目すべきことは条里地割りに基づいた中世の水田が見つかったことであります。今回の調査では残念なことに住居跡などの集落域は検出することはできませんでしたが、これらの水田をはじめとする生産域としての性格を明らかにすることができました。

本報告書が、高松市の歴史の解明に学問的な貢献を果たすとともに、文化財に対する関心と理解のための一助となるように念じるとともに、広く活用されることを願っています。

最後になりましたが，発掘調査から本報告書刊行にあたり格別のご理解とご尽力を賜りました関係者・関係機関に厚くお礼申しあげる次第であります。

平成10年３月

高松市教育委員会
教育長　山口　寮弋

例　　言

1．本書は，太田第２土地区画整理事業の都市計画道路木太鬼無線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査地ならびに調査期間は，次のとおりである。
　高松市松縄町　　平成７年１月12日～４月13日

3．発掘調査および出土遺物について下記の関係諸機関ならびに方々から貴重なご教示，ご指導を得た。記して厚く謝意を表するものである。　　（敬称略，順不同）
　香川県教育委員会
　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
　石上英一　（東京大学）　金田章裕　（京都大学）　木原溥幸・丹羽佑一　（香川大学）
　高橋　学　（立命館大学）　外山秀一　（皇學館大學）

4．現地調査から遺物整理，本報告書作成に至るまで，下記の方々のご協力を得た。記して謝意を表する。　　（敬称略，順不同）
　末光甲正　（讃岐文化遺産研究会）
　小佐野薫　（香川大学学生）　坂東祐介　（徳島文理大学学生）

5．発掘調査および本報告書の作成にあたっては，高松市教育委員会が主体となり，文化部文化振興課文化財専門員　山本英之が担当し，中西克也（讃岐文化遺産研究会）が補佐した。

6．本報告書の執筆は，目次に示したように第１章第１節・第２章，第６章を山本，第１章第２・３節，第３章，第５章を中西が行った。

7．本報告書に関わる自然遺物のうち，花粉・プラントオパール分析を㈱パレオ・ラボに依頼し、報告をいただいた。（第４章）

8．本報告書の編集は，山本・中西が行った。

9．出土遺物ならび図面・写真類は，当教育委員会において保管している。

10．本調査に関して、以下の業務を業者委託発注により実施した。
　発掘調査掘削工事　㈱大涌土建
　航空写真測量　㈱国際航業
　花粉等分析　㈱パレオ・ラボ
　遺物写真撮影　写房　楠華堂

11. 本報告書における表記および記述に関する凡例は，以下のとおりである。

(1) 図の縮尺は原則として次のとおりである。

遺構－調査区：１／1000　　調査区設定図：１／1600　　遺構配置図：１／400
掘立柱建物：１／80　　土坑：１／40　　溝：１／100，１／40
水田：１／100，１／80　　旧河道：１／100　　附図：１／200
遺物－土器：１／８，１／４　　石器：１／２　　木製品：１／６

例外のものも含め，各々についてその縮尺値を明記する。

(2) 本報告書で使用する遺構略号は次のとおりである

ＳＢ　掘立柱建物　　ＳＤ　溝　　ＳＫ　土坑
ＳＰ　柱穴　　ＳＲ　旧河道　　ＳＸ　性格不明

(3) 遺構番号は調査時に設定した番号を廃棄し，整理段階で工区ごとに番号を付けた。

(4) 遺物観察表は本文中に実測図とセットで掲載する。

(5) 遺物観察表中の表記方法は次のとおりである。

1　土器の法量の中で（　）を付けているのは残存値である。
2　色調が内外面とも同じ場合には外面のみ表記する。
3　土器胎土の粒土表記の基準
微砂：非常に細かい　　細砂：0.5㎜以下　　粗砂：0.5～１㎜　　細礫：１㎜以上

(6) 遺物番号は遺構毎に付け，図版の遺物の数字は挿図番号と遺物番号を示している。

(7) 本報告書で用いる高度値は海抜であり，方位は磁北を示す。

(8) 本報告書の第２図「周辺遺跡分布図」の作成にあたり，国土地理院発行１／25,000地形図「高松南部」を使用した。

目　　次

第１章　調査の経緯と経過 ---------- 1
　第１節　調査の経緯 ---------- （山本　英之）1
　第２節　調査の経過 ---------- （中西　克也）2
　第３節　調査組織 ---------- （中西　克也）6

第２章　地理的・歴史的環境 ---------- （山本 英之）7
　第１節　地理的環境 ---------- 7
　第２節　歴史的環境 ---------- 7

第３章　調査の概要 ---------- （中西　克也）11
　第１節　調査区の位置 ---------- 11
　第２節　基本土層 ---------- 11
　第３節　遺構・遺物 ---------- 12
　　１　１工区 ---------- 12
　　１）　古代 ---------- 12
　　1.　水田 ---------- 12
　　2.　旧河道 ---------- 14
　　２）　包含層出土遺物 ---------- 20
　　２　２工区 ---------- 21
　　１）　弥生時代 ---------- 22
　　1.　旧河道 ---------- 22
　　２）　近世 ---------- 22
　　1.　掘立柱建物 ---------- 22
　　2.　土坑 ---------- 26
　　3.　溝 ---------- 28
　　３）　包含層出土遺物 ---------- 29
　　３　３工区 ---------- 30
　　１）　弥生時代 ---------- 30
　　1.　溝 ---------- 30
　　２）　近世 ---------- 48
　　1.　土坑 ---------- 48
　　2.　性格不明遺構 ---------- 53
　　３）　包含層出土遺物 ---------- 55
　　４　４工区 ---------- 56
　　１）　古代～中世 ---------- 56
　　1.　溝 ---------- 56
　　2.　水田 ---------- 67
　　２）　近世 ---------- 70

1. 掘立柱建物 ---- 70
2. 溝 ---- 70
3. 土坑 ---- 72
4. 柱穴 ---- 78
5. 性格不明遺構 ---- 78
3） 包含層出土遺物 ---- 79

第４章 自然科学的分析 ---- （鈴木 茂） 80
第１節 プラント・オパール分析 ---- 80
第２節 花粉化石 ---- 85

第５章 調査の成果と問題点 ---- （中西 克也）89

第６章 おわりに ---- （山本 英之）94

挿　図　目　次

第１図　調査区設定図　３～４
第２図　周辺遺跡分布図　９
第３図　調査区　11
第４図　１工区遺構配置図　12
第５図　１工区水田平面図　13
第６図　水田足跡平面図　13
第７図　１工区水田出土遺物　14
第８図　ＳＲ101平・断面図　15～16
第９図　ＳＲ101動物遺体平面図　17
第10図　ＳＲ101加工木平・断面図　17
第11図　ＳＲ101出土遺物（１）　18
第12図　ＳＲ101出土遺物（２）　19
第13図　ＳＲ101出土遺物（３）　20
第14図　１工区包含層出土遺物　21
第15図　近世水田出土遺物　21
第16図　２工区遺構配置図　21
第17図　ＳＲ201平面図　23～24
第18図　ＳＲ201出土遺物（１）　25
第19図　ＳＲ201出土遺物（２）　25
第20図　ＳＢ201平・断面図　26
第21図　ＳＫ201平・断面図　26
第22図　ＳＫ202平・断面図　26
第23図　ＳＫ203平・断面図　27
第24図　ＳＫ204平・断面図　27
第25図　ＳＫ205平・断面図　27
第26図　ＳＤ201出土遺物　28
第27図　２工区包含層出土遺物　29
第28図　ＳＤ302出土遺物　30
第29図　３工区遺構配置図　31～32
第30図　ＳＤ303～306平・断面図　33
第31図　ＳＤ304出土遺物　34
第32図　ＳＤ305出土遺物　35
第33図　ＳＤ306出土遺物　36
第34図　ＳＤ307断面図　37
第35図　ＳＤ307出土遺物　37
第36図　ＳＤ308出土遺物平面図　38
第37図　ＳＤ308断面図　39～40
第38図　ＳＤ308出土遺物（１）　41
第39図　ＳＤ308出土遺物（２）　42
第40図　ＳＤ308出土遺物（３）　43
第41図　ＳＤ309断面図　43
第42図　ＳＤ309出土遺物　43
第43図　ＳＤ310断面図　44
第44図　ＳＤ311出土遺物平面図　44
第45図　ＳＤ311断面図　45
第46図　ＳＤ311出土遺物　45
第47図　ＳＤ312断面図　46
第48図　ＳＤ313断面図　46
第49図　ＳＤ314断面図　46
第50図　ＳＤ314出土遺物　47
第51図　ＳＤ315.316平面図　48
第52図　ＳＫ301平・断面図　48
第53図　ＳＫ302平・断面図　48
第54図　ＳＫ303平・断面図　49
第55図　ＳＫ304平・断面図　49
第56図　ＳＫ305平・断面図　49
第57図　ＳＫ306～308平・断面図　50
第58図　ＳＫ309平・断面図　51
第59図　ＳＫ310平・断面図　52
第60図　ＳＫ311平・断面図　52
第61図　ＳＫ311出土遺物　52
第62図　ＳＫ312出土遺物　53
第63図　ＳＫ313平・断面図　54
第64図　ＳＫ313出土遺物　54
第65図　ＳＸ301出土遺物　55
第66図　３工区包含層出土遺物　55
第67図　ＳＤ401断面図　56
第68図　ＳＤ401出土遺物　56
第69図　４工区遺構配置図　57～58
第70図　Ⅰ～Ⅲ期水田断面図　59～60
第71図　Ⅰ期水田平面図　61～62
第72図　Ⅱ期水田平面図　63～64
第73図　Ⅲ期水田平面図　65～66
第74図　Ⅰ期水田出土遺物（１）　67
第75図　Ⅰ期水田出土遺物（２）　68
第76図　Ⅱ期水田出土遺物（１）　69

第77図　Ⅱ期水田出土遺物（２）　70
第78図　ＳＡ401平・断面図　71
第79図　ＳＤ402断面図　71
第80図　ＳＤ402出土遺物　71
第81図　ＳＤ403出土遺物　71
第82図　ＳＫ401平・断面図　72
第83図　ＳＫ402～406平・断面図　73
第84図　ＳＫ407平・断面図　74
第85図　ＳＫ408平・断面図　74
第86図　ＳＫ409.410平・断面図　75
第87図　ＳＫ411～413平・断面図　75
第88図　ＳＫ414平・断面図　75
第89図　ＳＫ415～417平・断面図　76
第90図　ＳＫ418平・断面図　77
第91図　ＳＫ419断面図　77
第92図　ＳＰ411出土遺物　78
第93図　ＳＰ412出土遺物　78
第94図　ＳＰ419出土遺物　78
第95図　４工区包含層出土遺物　79
第96図　試料採取層準　80
第97図　地点１のプラント・オパール分布図　81
第98図　地点２のプラント・オパール分布図　81
第99図　地点３のプラント・オパール分布図　81
第100図　地点３の主要花粉化石分布図　87

図　版　目　次

巻頭図版１－１　１～３工区完掘
－２　２～４工区完掘
巻頭図版２－１　１工区水田
－２　Ⅲ期水田
図版１－１　１工区完掘（西より）
－２　１工区完掘（東より）
－３　１工区水田
図版２－１　１工区土層断面
－２　ＳＲ101
－３　ＳＲ101加工木出土状況
－４　ＳＲ101動物遺体出土状況
図版３－１　２工区（北側）完掘
－２　ＳＢ201
－３　ＳＫ201
－４　ＳＫ203
－５　ＳＫ204
図版４－１　３工区（南側）完掘（東より）
－２　３工区（北側）完掘（西より）
－３　ＳＤ302
－４　ＳＤ306
－５　ＳＤ303.304.306
－６　ＳＤ303.304.305
図版５－１　ＳＤ307.308（南側）
－２　ＳＤ308断面
－３　ＳＤ308（北側）
－４　ＳＤ308遺物
－５　ＳＤ308遺物
－６　ＳＤ308遺物
－７　ＳＤ311（南側）
－８　ＳＤ311遺物
－９　ＳＤ311（北側）
－10　ＳＤ311遺物
図版６－１　ＳＤ310
－２　ＳＤ312
－３　ＳＤ313.314（南側）
－４　ＳＤ313.314（北側）
－５　ＳＤ315
－６　ＳＤ316
－７　ＳＫ301
－８　ＳＫ302
図版７－１　ＳＫ303
－２　ＳＫ304
－３　ＳＫ305
－４　ＳＫ306
－５　ＳＫ307
－６　ＳＫ308
図版８－１　ＳＫ310
－２　ＳＫ312
－３　ＳＫ313
－４　ＳＸ301
－５　調査以前（４工区）
図版９－１　Ⅰ期水田（東より）
－２　Ⅰ期水田（西より）
図版10－１　Ⅱ期水田（西より）
－２　Ⅱ期水田
－３　Ⅱ期水田遺物
－４　Ⅱ期水田
図版11－１　Ⅲ期水田（西より）
－２　Ⅲ期水田（東より）
図版12－１　ＳＢ401
－２　ＳＤ401
－３　ＳＤ402
－４　ＳＫ401
－５　ＳＫ404
－６　ＳＫ405
－７　ＳＫ406
図版13－１　ＳＫ407
－２　ＳＫ409
－３　ＳＫ410
－４　ＳＫ411～413
－５　ＳＫ414
－６　ＳＫ418
図版14　出土遺物
図版15　出土遺物
図版16　出土遺物

表　目　次

第１表　試料１ｇあたりのプラント・オパール個数
81
第２表　境目・下西原遺跡の産出花粉石一覧表　86

挿　写　真　目　次

図版１　発掘風景　1
図版２　境目・下西原遺跡のプラント・オパール　84

附　図　目　次

附図１　境目・下西原遺跡１工区遺構図
附図２　境目・下西原遺跡２・３工区遺構図
附図３　境目・下西原遺跡３工区遺構図
附図４　境目・下西原遺跡４工区遺構図

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

境目・下西原遺跡は高松市松縄町から木太町にまたがり、太田第２土地区画整理事業の中で整備が進められている都市計画道路木太鬼無線の予定地にあたる。

太田第２土地区画整理事業は、昭和62年２月２日の香川県都市計画審議会による都市計画決定を受けて、昭和63年度から実施されている。事業区域は高松市街の南郊約６kmの田園地帯で、林、木太、太田、多肥の４地区に及ぶ360.3haは全国有数の事業規模である。この地域には、一般国道11号高松東道路ならびに四国横断自動車道の建設が予定され、これによる急速な市街化が予想されるため、路線沿線の市街化ならびに都市基盤整備を計画的に進める目的で事業計画がなされたものである。

この地域によらず、それまで高松市域の平野部は周辺の丘陵部に比べて周知の埋蔵文化財が極端に希薄な遺跡の空白地帯であった。そこで、高松市教育委員会では昭和61年度に国庫及び県補助事業として区画整理事業地を対象として『高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査事業』を実施し、広範な遺物散布地と二十数基の塚跡等を確認した。

この間に、太田第２土地区画整理事業地に含まれる高松東道路予定地77,000㎡については、市施工の区画整理事業と密接な関わりを有するという理由で、高松市教育委員会が発掘調査を担当することが建設省、高松市、高松市教育委員会の三者間で確認され、調査の準備が進められていったが、区画整理事業に関わる埋蔵文化財の取り扱いについては公式な協議はなされなかった。しかし、昭和63年８月に松縄町の都市計画道路工事中に天満・宮西遺跡の不時発見を見たため、改めて土地区画整理事務所と協議の結果、道路工事に先立って発掘調査を実施した。そして平成２年度からは、「太田第２土地区画整理区域内試掘調査事業」として埋蔵文化財調査補助金の交付をうけ、都市計画道路予定地を中心に工事前に試掘調査を行い、埋蔵文化財が確認された場合は事業者の負担によって事前調査を実施するように取り扱いを定めた。

区画整理事業関係の埋蔵文化財調査は平成８年３月までに６遺跡の調査を終了し、都市計画道路に関わる調査をほぼ終了した。整理作業は平成５年度から開始し、区画整理事業の完了が予定されている平成12年度を調査報告書完了の目途として順次実施の予定である。

図版　１発掘風景

第２節　調査の経過

１．発掘調査の経過

境目・下西原遺跡の発掘調査に先立って、1993年２月10日～15日にかけて高松市教育委員会によって試掘調査が実施された。試掘調査はトレンチ方式を採用し、道路予定地のほぼ境界付近に路線に沿った東西方向の10本のトレンチを試削し、平面ならびに土層観察によって遺構の有無を判断した。その結果、西端のトレンチを除いたトレンチにおいて溝・土坑・ピット等の遺構が検出され、西端のトレンチでは土器片を多量に含む自然旧河道が確認された。

以上の試掘調査の成果を検討した結果、調査した全域にわたって遺構が確認されたことにより、全域に細かな調査対応が必要であると考えられ、工事請負方式で調査を実施することとなった。

発掘調査は、1995年１月から４月までの約３ヶ月かけて実施された。調査対象面積は3580㎡である。遺跡全体を現有道路・水路・住宅などによって１工区～４工区という大きな調査区に分けて調査を実施した（第１、３図参照）。

調査は西端の１工区から開始され、１月12日～２月２日の期間に１工区を終了し、水田・旧河道を検出した。２・３工区は排土作業の工程と中央部を東西方向に現有道路と水路が存在するため、調査区を南側と北側に分け、北側から調査を行った。２工区北側は２月３日～10日、南側は３月29日～４月４日の期間を要した。３工区北側は２月９日～２月28日、南側は３月７日～４月５日の間に調査され、堀立柱建物・多数の溝・土坑等が検出された。４工区は２月24日～３月29日まで調査が行われ、３面の水田や多数の土坑が検出された。発掘調査の工程や排土作業により、工区が重なって調査されている期間がある。

以下に調査日誌を揚げて、調査の詳細について報告する。

調　査　日　誌　（抄）

１月

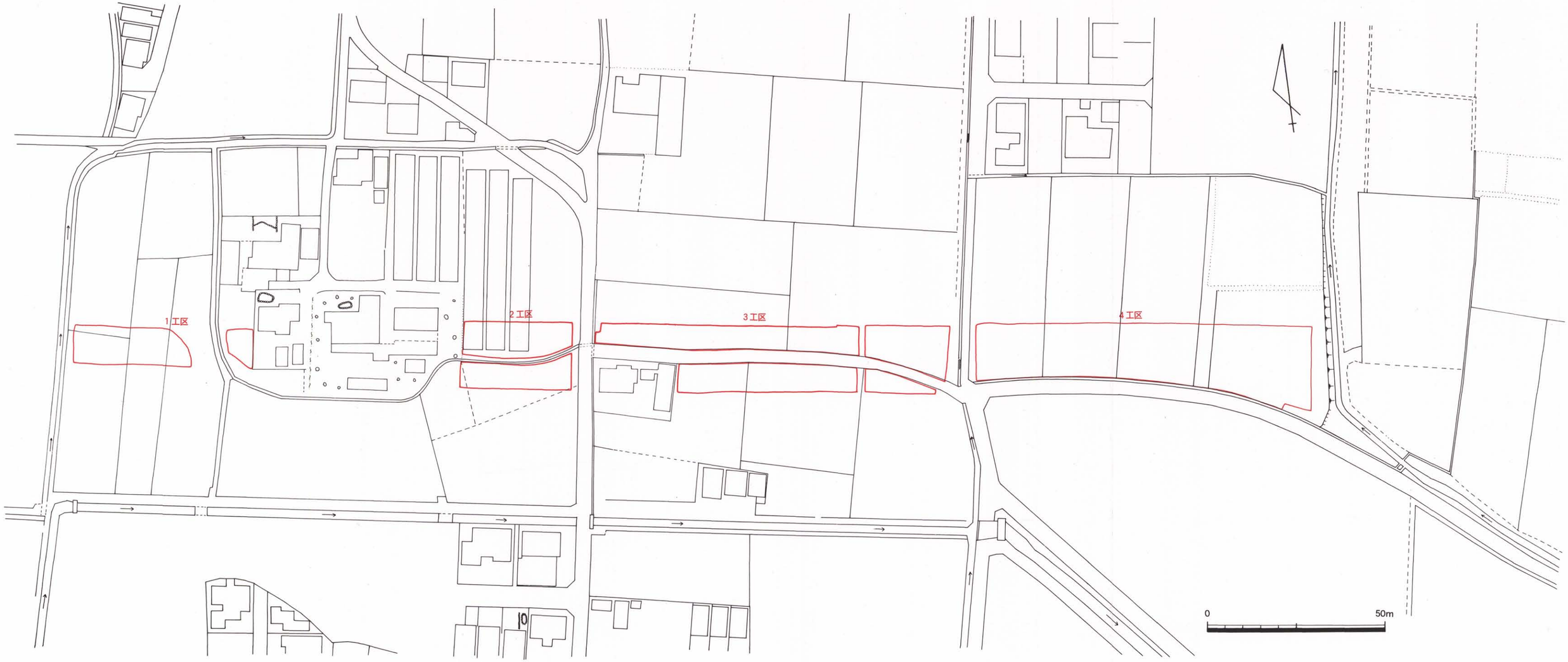
現況測量を行い、安全棚等を設置し、調査準備を整える。同時に調査区３工区の南接する場所に現場事務所を設置する。

12日より１工区の重機による表土掘削を開始し、17日に２工区、18日～20日に３工区の表土掘削を行う。23日１工区にベルトコンベヤーを設置し、24日より人力による調査を始める。旧河道と水田を確認し、月末までにＳＲ101を完掘する。ＳＲ101は黄白色シルトを検出面とするが、川床は砂礫層となっており、地山との区別がほとんどなく調査が困難をきたした。川床より加工木と動物遺体が出土した。川床は凹凸が著しく、埋土は砂層である。

２月

１日に１工区のＳＲ101出土の加工木・動物遺体の平面図を作成し、写真撮影を行う。水田を掘り下げる。２日１工区の完掘写真を撮影する。３日より２工区の調査を始める。６日までにＳＲ201を完掘し、ＳＢ201・ＳＫ201を掘る。

８日から３工区の調査を始める。まず、東端にあるＳＸ301より調査を行う。14日より溝・土坑の調査を始める。17日までにＳＤ311～314、ＳＫ301～305を終える。17日～28日にＳＤ301～308を完掘する。ＳＤ308は、幅・深さともに規模が大きく、時間を要する。底面より完形の土器（長頸壺）が出土し、平面図を作成し、写真撮影を行う。15日～20日まで４工区の表土掘削を行う。27日より４工区の調査を開始する。



第1図　調査区設定図（S：1/1000）

3月

3日に1工区・2工区北側・3工区北側の第1回航空測量を行う。8日までにSD401～403・SK401～404・SB401を完掘し、写真を撮る。SD401は弥生時代後期に比定されるが、その他は近世のものである。9日SK404～408を完掘。同時に2工区南側と3工区南側において重機による表土掘削を行う。13日4工区のⅠ期水田を完掘し、平面図と写真撮影を終える。Ⅱ期水田では6mと4m間隔を測る南北方向の畦畔を検出する。27日までにⅢ期水田を完掘する。その畦畔はⅡ期水田と同様に南北方向であるが、その位置・間隔は若干異なる。27日にはⅠ～Ⅲ期水田の断面図を南北・東西方向に作成する。3月下旬に4工区と平行して3工区南側の調査を行い、SD308を除いた遺構を完掘する。

4月

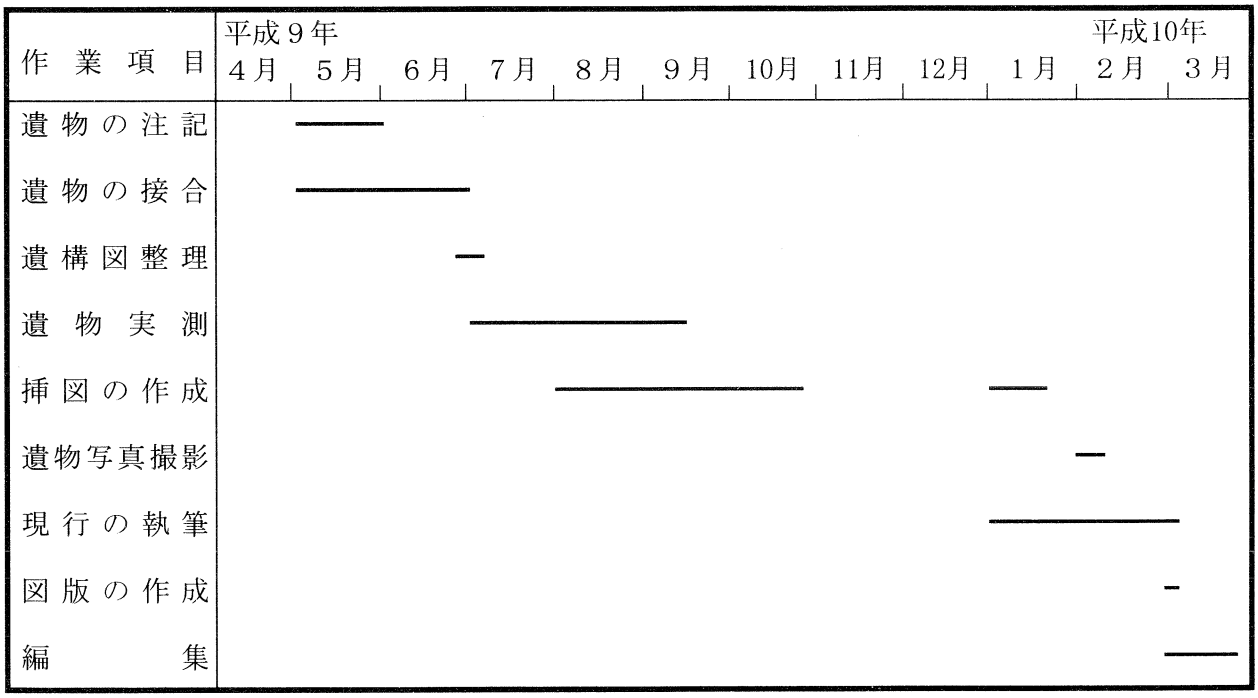
3工区南側のSD308と2工区南側の調査を同時に行い、5日までに全ての遺構の調査を終える。SD308において完形の弥生土器が出土したが、同時に須恵器の蓋も出土し、長期間にわたって溝が機能していたと考えられる。

12日、2工区南側・3工区南側・4工区の第2回航空測量を行う。

13日、Ⅰ～Ⅲ期水田の土壌サンプルを採取する。

2、 整理作業の経過

整理作業は、発掘調査の期間中に現場事務所で行った作業と調査終了した後に円座整理事務所で行った作業がある。前者の作業内容は出土遺物の水洗いのみであり、大半の作業は後者である。その整理作業は1997年度において以下の工程のように実施した。



第３節　調査組織

発掘調査の調査体制は以下のとおりである。

教育長	山口　寮弋
文化部長	宮内　秀起
文化部次長	中村　榮治
文化振興課課長	中村　榮治（事務取扱）
文化振興課長補佐	藤田　容三
文化財係長	藤井　雄三
文化振興課主査	納田　敏雄
文化財専門員	山本　英之
	山元　敏裕

整理作業の調査体制は以下のとおりである。

教育長	山口　寮弋
文化部長	宮内　秀起
文化部次長	中村　榮治
文化振興課課長	中村　榮治（事務取扱）
文化振興課主幹	藤田　容三
文化振興課長補佐	立岩伊左子
文化財係長	岡田　眞介
文化振興課主査	納田　敏雄
文化財専門員	山本　英之
	山元　敏裕
	大島　和則
非常勤嘱託	林　　公子
	吉本みどり
	岡田　信子
	池下　和子
	龍満　房子
	松野　裕子

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

高松平野は，香川県のほぼ中央部にあり瀬戸内海沿岸に位置する沖積平野で，西を五色台山塊，南を日山，上佐山，東を立石山，雲附山等に遮られており，南北約20ｋｍ，東西約16ｋｍを測る。

平野の境界を画する低位山塊及び屋島，紫雲山等の独立山塊は，侵食の容易な花崗岩層（三豊層群）が風化侵食に抵抗の強い安山岩層に覆われたことによって侵食解析から取り残されて形成されたメサまたはビュートと呼ばれるもので讃岐ののどかな田園風景の象徴の一つである。

高松平野には，西から本津川，香東川，春日川，新川といった河川が北流しているが，中でも香東川が平野の形成にもっとも大きな影響を及ぼしており，現在の春日川以西の大部分は香東川によって形成された沖積平野といわれている。

現在石清尾山塊の西を直線に北流する香東川は，17世紀はじめの河川改修によって人工的に開削されたもので，それ以前には現在の香川町大野付近から東へ分岐した後，石清尾山塊の南側を回り込んで平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は，現在では水田及び市街地の地下に埋没してしまっているが，空中写真等から，林町から木太町へかけての分ヶ池，下池，長池，大池，ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており，発掘調査によってもその痕跡が確認されている。なお，17世紀の廃川直前の流路は御坊川としてその名残をとどめている。

これらのため池は，年間1000㎜前後と降水量に乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠のものであるが，林，多肥地区周辺では扇状地末端部に当たることから，ため池に加えて出水と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで，両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。しかし，昭和50年の香川用水の通水によって，この一帯は三郎池の受益範囲に取り込まれ，農業用水確保の不安が払拭された反面，大池，長池等のため池が三郎池の子池となり，地元水源を核とした水利慣行が急激に消滅するとともに，ため池や出水の水源自体もその役割を失いつつある。

第２節　歴史的環境

高松平野では，石清尾山古墳群，高松市茶臼山古墳などを初めとする丘陵部の古墳の状況については比較的早くから知られていたが，平地部では天満遺跡など二，三が知られるのみで長く遺跡の空白地帯となっていた。しかし，昭和60年代に入って高松東道路建設，太田第２土地区画整理事業，空港跡地再開発などの大規模プロジェクトに伴い埋蔵文化財の確認調査ならびに事前発掘の件数が増大したことによって遺跡数は飛躍的に増大しつつある。また新たな遺跡の発見とあわせて，香東川の旧河道が平野の形成に大きな影響を及ぼしていた事実も次第に明らかになってきた。今後，未確認遺跡の把握と保護に加えてこれまでの調査成果を時間的，空間的に結びつけて高松平野の歴史環境の変遷を復原する作業が新たに必要になってきている。

高松平野で最古の遺跡は旧石器時代に遡る。平野縁辺の低丘陵部で久米池南遺跡（東山崎町），雨山南遺跡（三谷町）等の遺跡が知られるが，いずれも表採や混入によると見られる状況を示す。中間西井坪遺跡（中間町）では高松自動車道の事前調査によってＡＴ火山灰層上層からナイフ形石器が出土している。

縄文時代では，大池遺跡（木太町）で草創期と見られる有舌尖頭器２点の表採が報告されている。また，近年平野部の発掘調査によって縄文晩期を中心とした遺跡出土例の増加が特筆され，林・坊城遺跡，浴・松ノ木遺跡，浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，井手東Ⅰ遺跡，井手東Ⅱ遺跡，居石遺跡，上天神遺跡等を数えることができる。これらの多くは旧河道等の堆積から遺物の出土が確認されたものであるが，井手東Ⅰ遺跡では遺物の確認はなかったものの，地表下約７０cmからアカホヤの堆積層が確認されており縄文中期の高松平野の形成過程をうかがうことができる。

弥生時代前期に移ると，天満・宮西遺跡，松縄下所遺跡，大池遺跡，空港跡地遺跡，宮西・一角遺跡，浴・松ノ木遺跡，浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，弘福寺領田図北地区比定地内遺跡等が挙げられる。浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，弘福寺領田図北地区比定地内遺跡ではこの時期に10㎡前後の方形に整然と区画された水田面を検出しているが，それ以外では遺物廃棄（埋納）土坑や河川堆積の包含遺物など遺物を中心とした確認例が多く，集落などが明確に把握できている事例は見られない。

中期になると，平野部では浴・長池遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，井手東Ⅰ遺跡，多肥松林遺跡で住居跡，周溝墓等を伴う集落の一部が調査されているが，規模・密度は総じて希薄である。また，中期後半になると久米池南遺跡など平野縁辺部や丘陵上に高地性集落が営まれるようになる。

弥生時代後期になると遺跡は数，規模共に爆発的に増加し，平野部では上天神遺跡，天満・宮西遺跡，凹原遺跡，空港跡地遺跡のように十数棟の住居跡と大量の廃棄土器を伴う集落の他に太田下須川遺跡，蛙股遺跡，キモンドー遺跡，日暮・松林遺跡，井手東Ⅰ遺跡がある。丘陵部では，香川県の弥生後期の標識遺跡として著名な大空遺跡が平野東部に存在する。

古墳時代では，これら弥生後期の遺跡のうち上天神遺跡，凹原遺跡，空港跡地遺跡が古墳時代初頭に至るまで集落が存続することが知られており，太田下須川遺跡では古墳時代中期の集落を検出している。さらに生産関連の遺跡としては浴・松ノ木遺跡の水田跡，三谷三郎池の須恵器窯跡，中間・西井坪遺跡の土師質陶棺焼成土坑が知られ，古墳時代全般を通じて集落・生産遺跡の遺跡数は希薄である。このことは古墳の造営が全市域的に盛んであるのと対照をなしており今後古墳の造営母体となるべき集落域の解明が重要な課題となるものと思われる。

古墳の分布状況を概観すると，発生期と考えられる諏訪神社墳丘墓，鶴尾神社４号墳を皮切りに，石清尾山塊では猫塚，石船塚等の積石塚から成る石清尾山古墳群，三谷地区では小日山１・２号墳，前田地区では高松市茶臼山古墳，下笠居地区では横立山経塚古墳等が築造され，その後ほぼ古墳時代全期間を通じて地域単位で断続的に展開している。

石清尾山古墳群では頂上部の尾根筋を中心とした前期の積石塚の築造が途絶えて100年以上の断絶を経た後，南山浦古墳群，浄願寺山古墳群等の盛り土の群集墳が爆発的な盛行を見るし，三谷地区では小日山１・２号墳に続いて割竹形石棺をもつ全長88mの前方後円墳である三谷石船古墳，直径42mを測り周濠を巡らせる円墳の高野丸山古墳が中期に，そして後期には平石上２号墳，矢野面古墳，犬の馬場古墳，石船池古墳群といった古墳につながって行く。前田地区でも同様に高松市茶臼山古墳に続いて，前期から中期にかけての茶臼山古墳群，諏訪神社古墳，後期の久本古墳，小山古墳，山下古墳，瀧本神社古墳，岡山小古墳群，平尾古墳群といった古墳が引き続いて築かれている。

また，鬼無地区では前期末から中期初頭と見られるかしが谷２号墳をはじめとして組合式の土師質陶棺を出土した中期前方後円墳の今岡古墳，巨石積みの横穴式石室を主体部にもつ古宮古墳，平木１号墳等からなる神高池古墳群へと続いている。なお，先述の土師質陶棺の焼成坑を検出した中間・西井坪遺跡は本津川沿いに鬼無地区の上流にあたり，西山崎町の本尭寺北古墳でも埴輪円筒棺の出土が伝えられていることから本津川を介した物資や情報の流通が想像できる。

1	境目・下西原遺跡	20	浴・松ノ木遺跡	39	平石上２号墳
2	北大塚古墳	21	林・坊城遺跡	40	矢野面古墳
3	鏡塚古墳	22	凹原遺跡	41	三谷三郎池西岸窯跡
4	石船塚古墳	23	多肥松林遺跡	42	三谷石船古墳
5	猫塚古墳	24	松林遺跡	43	石船池古墳群
6	鶴尾神社４号墳	25	多肥廃寺	44	川南西遺跡
7	天満・宮西遺跡	26	宮尻上遺跡	45	川南東遺跡
8	松縄下所遺跡	27	弘福寺領関係遺跡	46	新田・本村遺跡
9	キモンドー遺跡	28	一角遺跡	47	小山・南谷遺跡
10	大池遺跡	29	宮西・一角遺跡	48	小山古墳
11	弘福寺領関係遺跡	30	空港跡地遺跡（亀の町Ⅰ地区）	49	山下廃寺
12	上天神遺跡	31	空港跡地遺跡（亀の町Ⅱ地区）	50	山下古墳
13	太田下・須川遺跡	32	空港跡地遺跡	51	久本古墳
14	蛙股遺跡	33	拝師廃寺	52	諏訪神社墳丘墓
15	居石遺跡	34	三谷町南海道推定地	53	久米山遺跡群
16	井手東Ⅱ遺跡	35	高野丸山古墳	54	久米池南遺跡
17	井手東Ⅰ遺跡	36	高野廃寺跡	55	高松市茶臼山古墳
18	浴・長池Ⅱ遺跡	37	雨山南遺跡	56	東山崎・水田遺跡
19	浴・長池遺跡	38	小日山１号墳	57	日暮・松林遺跡

第２図　周辺遺跡分布図（Ｓ：１/1000）

屋島地区でも，瀬戸内海を見渡す丘陵上に位置する長崎鼻古墳をはじめ浜北古墳群，中筋古墳群、金比羅神社古墳群、東山地古墳群などが知られている。未調査で時期の確定を見ないものも含まれるが，平野周辺部の地域単位よりもなお閉鎖性の強いであろう島嶼部の古墳群という点で，また生産基盤としての耕作地をもたないという点においても注目される地域である。

古代では条里遺構と古代寺院跡が注目される。浴・長池遺跡，浴・松ノ木遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，井手東Ⅰ遺跡，蛙股遺跡，上天神遺跡，凹原遺跡，松縄下所遺跡，空港跡地遺跡，宮西・一角遺跡等で条里界線にあたるとおもわれる遺構を検出している。遺構の多くは古いものでも平安時代から鎌倉時代，多くは近世以降の遺物を含み一般に条里の施行期とされる奈良時代とは時期的に隔たっているが，溝の存続期間と遺構としての埋没時期の関係など，検討すべき多くの問題をはらんでいる。

中でも，松縄下所遺跡は現地表面の条里とは10数メートルずれた位置にありながら地表条里と同方向の道路側溝状の遺構を検出し，時期も７世紀代にまで遡り得るなど高松平野の条里施行に関わる可能性がある重要な遺跡である。また，浴・長池Ⅱ遺跡の条里界線も旧郡界線にあたる部分に幅６ｍの間隔で道路側溝状の溝が並行し，空港跡地遺跡亀の町地区においても現在の畦道の延長として幅３～４ｍの道路側溝状の並行溝が検出されており，12世紀代の遺物が出土している。その他道路に関しては三谷町の南海道推定線上で河岸段丘の崖をおよそ６ｍ幅で開削して切通し状に斜面を形成したと思われる痕跡が確認されており，南海道に関連する遺構の可能性が考えられる。

古代寺院跡では宝寿寺跡，山下廃寺，下司廃寺，高野廃寺，拝師廃寺，坂田廃寺，多肥廃寺，勝賀廃寺などが知られている。正式の発掘調査を経たものがなく，伽藍配置などの具体的な様子の判るものはないが一様に瓦の散布が見られる。宝寿寺跡，下司廃寺では塔礎石が現存し，坂田廃寺，高野廃寺では建物礎石が転用材として散布している。また，坂田廃寺では過去に金銅釈迦誕生仏の出土を見たほか最近の調査で背後谷斜面から坂田廃寺に瓦を供給したと見られる片山池１号窯跡が確認された。

これら寺院跡の中のいくつかは地域単位の後期古墳群の分布と一致する傾向が強いことから，古墳時代後期から古代への転換期に地域単位の造墓集団が寺院建築への転向を図ったものと考えられる。坂田廃寺が所在する香川郡坂田郷には，日本霊異記にも在地の綾氏の話としての説話が伝えられており早くから仏教の受容が進んでいたことを示している。

中近世以降では，東道路関連の浴・長池遺跡，浴・松ノ木遺跡，弘福寺領讃岐国山田郡田図北地区比定地等で，旧河道が埋没していく過程の凹地に小規模な区画の水田面が出土しており，その後現在に至るまで連続して水田層の堆積が見られることから，この時期までに現在の地形環境がほぼ形作られていたことが推測される。また，東山崎・水田遺跡，川南遺跡では春日川の氾濫による洪水砂層上に営まれた近世集落跡や耕土層が発掘され，豊富な木製品が発見されているほか，現高松市美術館の紺屋町遺跡でも近世の陶磁器や木簡が出土し，玉藻町の高松城東ノ丸跡でも寛永年間の東の丸造営以降の石垣や建物礎石の遺構が出土し，往時の城下町の一端を窺うことができる。

第３章　調　査　の　概　要

第１節　調査区の位置

調査区は、道路建設に伴う発掘調査であるため東西方向に細長く設定され、全長は約179m、幅20mを測る。調査対象地の総面積は約3580㎡であるが、東西方向と南北方向現有道路と水路、さらに住宅等があるため未調査部分がある。

調査区は西側から東側にむかって１～４工区に区画されている。１工区は西端に位置し、仮設道路があるため２分割される。１工区と２工区の間には住宅があるため、調査することはできなかった。２工区は調査区の中央に東西の水路が存在し、調査工程の都合により北側の調査を先行して行い、その後に南側を調査する。

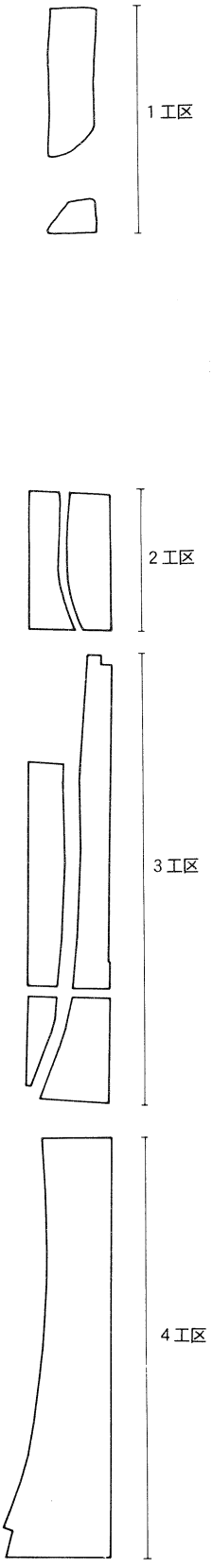
３工区は２工区の東側に位置し、南北の現有道路にはさまれている。調査区中央を東西に走る道路があるため、北側を先に調査した後に南側を調査した。その道路部分は未調査である。南側西端部は住宅があるため未調査であり、さらに東端近くにはコンクリート水路が南北に設けられている。

４工区は、本調査区の東端に位置し、西側は道路、東側は水路によって区切られている。４工区の南側は現有道路がある。

本調査区の現況は水田地帯であり、現地表の標高は西側から東側にゆるやかに低くなっている。１工区は7.00m前後、２工区は6.60m、３工区は6.50m、４工区は5.70～5.50mを測り、東西間の比高差は1.50m前後である。周辺部の微地形環境分析によれば、本遺跡の西端部には野田池の南側で分流した旧河道の１本がほぼ南北方向に走っており、また、４工区の東方にも大池・ガラ池を通る旧河道の存在が認められている。この２本の旧河道にはさまれた２～４工区は埋没旧中洲と後背湿地であると考えられる。このデータを発掘調査の成果と比較すると、西端の旧河道は１工区のＳＲ101に該当するが、微地形分析で後背湿地と埋没旧中洲である３工区は全域が埋没旧中洲である。４工区は西側に後背湿地、東側が埋没旧中洲であり、後背湿地には水田が検出された。

第２節　基本土層

調査区の基本的な土層は、上から現水田耕作土、床土、灰白色シルト質極細砂（近世の条里型水田が２、３層堆積）・淡黄色シルトの地山である。場所によっては地山直上に近世以前の水田層である灰色シルト質極細砂の堆積が見られる。



第３図　調査区
（Ｓ：１/1600）

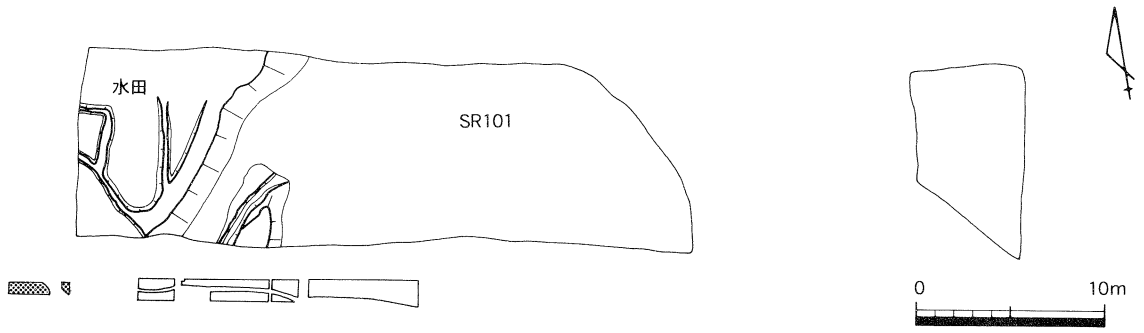
第３節　遺構と遺物

１．１工区

１工区は本遺跡の西端に位置し、現有水路と農道によって東西に分断されている。西方は松縄下所遺跡であり，1992年に高松市教育委員会によって調査が実施された。

西側の調査区は全長32.4m、幅10mを測り、北東隅は仮設道保護のために不整形となっている。本調査区は本来20m幅であるが、北側に一般車両の通行する仮設道が設置され、その保護する必要から調査面積を狭めることとなった。土層の堆積状態はほぼ水平堆積をなしており、上層より現水田耕作土、床土、灰黄色シルト質極細砂（15～20cm）－近世の条里型水田２層が全域に堆積している。西側では、その直下ににぶい黄橙色シルト質極細砂（10cm）－中・近世の条里型水田、灰黄橙色シルト質極細砂（10cm）－中世の水田、灰褐色シルト質極細砂（10cm）－中世の水田、褐灰色シルト質極細砂－古代の不定形小区画水田が見られる。東側は旧河道が灰黄褐色シルト質極細砂下より掘り込まれている。その埋土は後述する。

東側の調査区は台形を呈し、東西幅5.80m、東辺10.00m、西辺6.00mを測る。土層の堆積状態は西側調査区の東端と同じであり、上部は水田層の水平堆積をなし、下部は旧河道となっている。



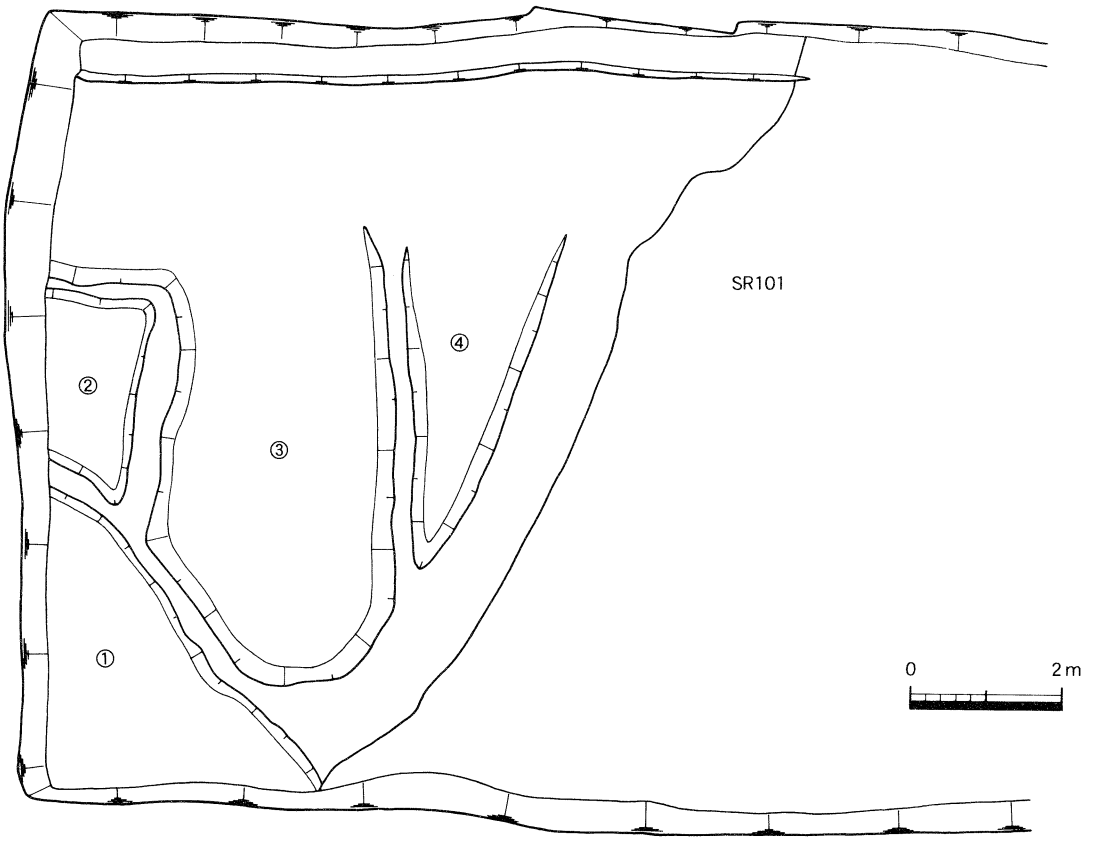
第４図　１工区遺構配置図（S：1/400）

1）　古代

1　水田　（第５～７図）

調査区の西端において検出された不定形小区画水田である。土層観察によれば東側にあるＳＲ101によって水田面が削られているように見えるが、ＳＲ101の西岸上面に沿うように畦畔が設けられており、水田が営まれていた時期にＳＲ101も存在していたと考えられる。

検出された水田の総数は４面のみであり、一筆を完全に検出することのできた水田は無い。畦畔は盛土畦畔であり、ＳＲ101の西岸に沿った規模のやや大きな畦畔とそれから枝分かれした小規模な畦畔の２種類の畦畔がある。調査区の北側では畦畔の高まりが消滅している。しかし、水田の耕作土は観察され、土層観察によれば水田③と④を区画する畦畔と同一位置に畦畔状の高まりが見られる。大畦畔の規模は、幅約1.00m、水田からの高さ３～５cmを測る。小畦畔は幅0.20～0.50m，高さ３～５cmを測る。畦畔区画は不規則である。水田①はやや規模の大きな水田であり、検出された全面に足跡が多数検出された。水田②・③は方形であろうと推定される。水田④は残存部分では鋭角な三角形を呈

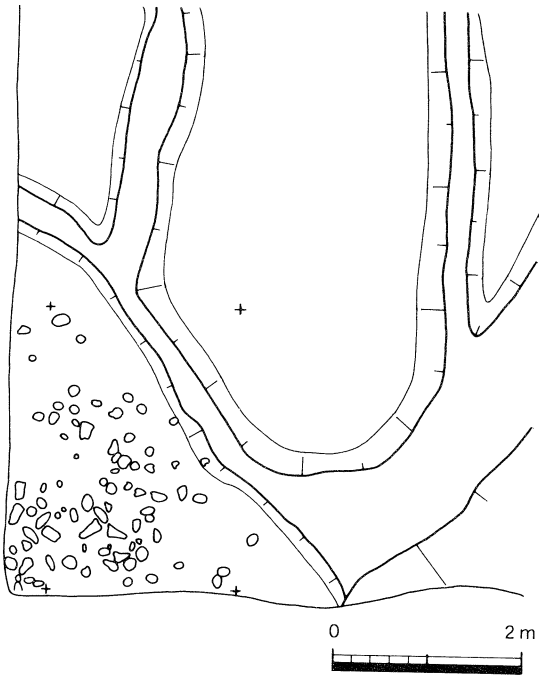


第５図　１工区水田平面図（Ｓ：１/100）

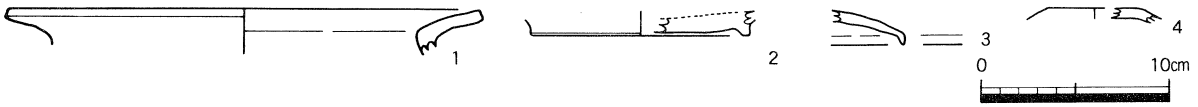
している。水田のレベルはほぼ平坦であり、標高はほぼ6.63ｍを測る。検出された範囲内では水口は全く検出されておらず、畦畔越しの掛け流し方式であったと考えられる。

水田の耕作土は褐灰色シルト質極細砂であり、褐鉄鉱の集積は認められなかった。本遺跡の西側に位置する松縄下所遺跡では、本遺跡に隣接する所は水田を検出していないが、約100ｍ西側の微高地上には中世の水田が検出された。以上のことにより、この水田は広範囲に広がっていたものでなく、限られた狭い面積に営まれたものと考えられる。すなわち、局地的な小規模な水田である。その成立要因としては、ＳＲ101と近接することから起こる不安定な地形と洪水の危険性が挙げられる。

水田①のほぼ全面で検出された足跡は、不規則な向きを示しているが、その大きさから大人のものであると考えられる。さらに多数の稲株痕も検出された。他の水田では足跡は検出されなかったが、若干の稲株痕は見られた。



第６図　水田足跡平面図（Ｓ：１/80）



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
1	土師器 甕	25.0		(2.5)	口縁部は大きく外反する。全面摩滅	鈍黄橙 10YR7/2	橙 7.5YR6/6	細～粗砂
2	〃 杯		11.6	(0.8)	底部は切り離し後に回転ヘラ削り。高台	黒褐 2.5Y3/1	黄灰 2.5Y6/1	細砂多量
3	須恵器 蓋			(1.8)	回転ナデ。口縁部は短く直立する。	灰 N5/0	灰白 N7/0	密
4	〃			(0.7)	回転ナデ	灰白 N8/		微砂若干含む

第７図　１工区水田出土遺物（Ｓ：１/４）

出土遺物　遺物の出土は水田という性格から言って当然少量である。遺物は、土師器甕(1)、同坏(2)、須恵器坏蓋(3.4)であり、土器の小片である。

１は口縁部のみ残存する。口縁部は頚部から強く外反し、口唇部は面をなす。内外面とも摩滅しているため調整は不明である。

２は底部のみであるが、内面は剥離しており原形を保っていない。高台部は回転ナデ、底面は切り離し後に回転ヘラケズリが施される。

３は低い器高で口縁部がわずかに直立しており、外面の稜は明瞭である。口縁部と天井部の境部分の器厚は若干薄くなっている。４は天井部のみ残存する。

２　自然旧河道

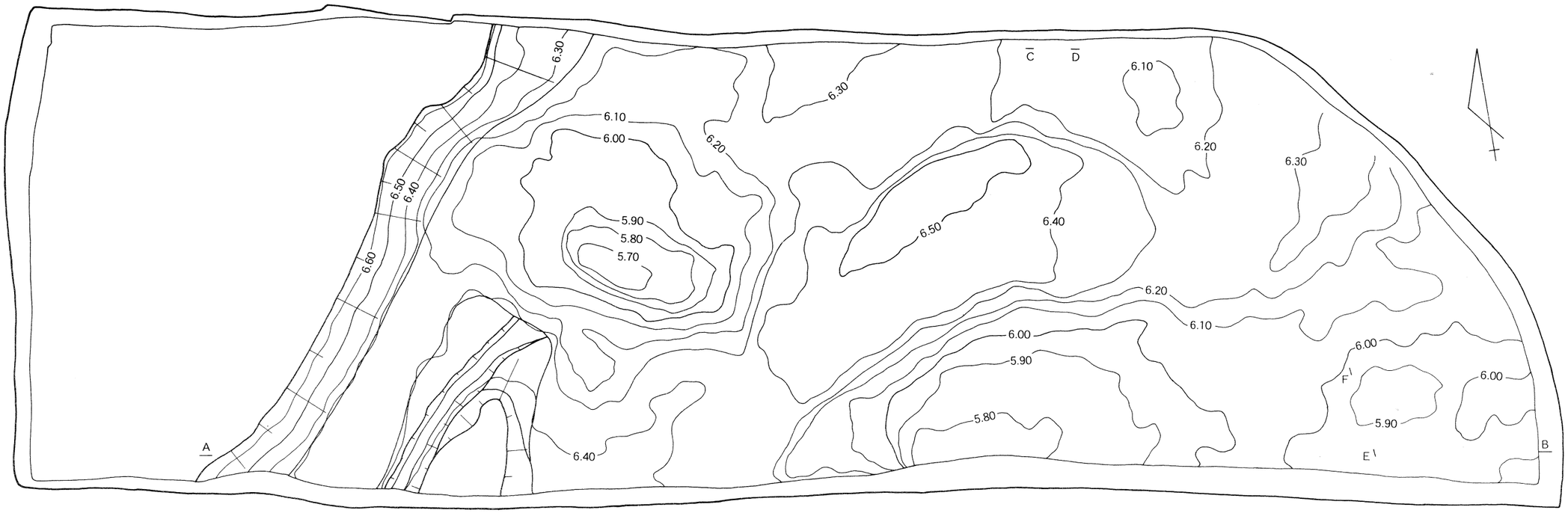
ＳＲ101　（第８～12図）

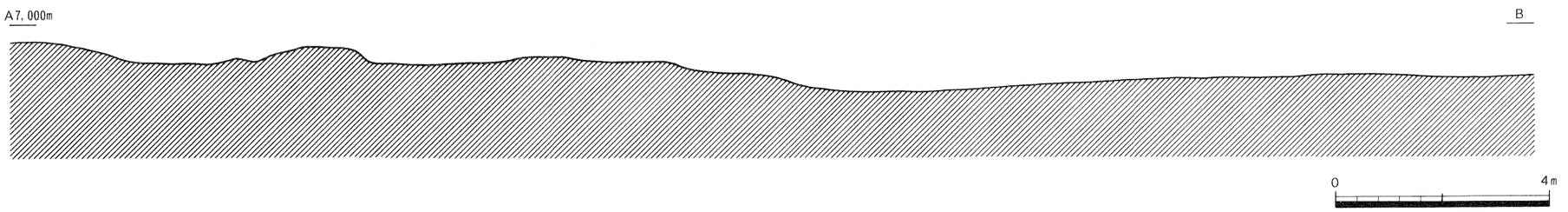
１工区の水田東側において検出された自然旧河道である。第１節で前述したように、この旧河道は微地形環境分析に基づき野田池の南側から北東方向に流れる旧河道であると考えられる。１工区の東側は旧河道の範囲となっている。

ＳＲ101の規模は東岸付近が未調査部分となっているため正確な幅の数値を明らかにすることができなかったが、１工区の東側が河床となっていることから幅40m以上を測る旧河道であると考えられる。調査面積が狭いため流れる方向は不明瞭な点が多いが、検出された範囲内での西岸の方向は南西－北東方向を示しており、旧河道の方向も同様であろう。確認面の標高は6.70m前後である。西岸は比較的緩やかな傾斜で落ち込んでいる。河床は非常に凹凸が著しく、基盤は砂礫層となっている。最深部は調査区南壁の中央やや東寄りの位置と調査区ほぼ中央付近の２点にあり、確認面からの深さは約0.90～1.00mを測る。西岸よりの南西部には河床がやや高くなっている部分がある。この高まりの基盤は白黄色シルトであり、平面形は三角形を呈す。周囲との比高差は約0.30mを測る。高まりの西側には、幅約0.60m、深さ約0.10mの溝状の落ち込みが検出された。

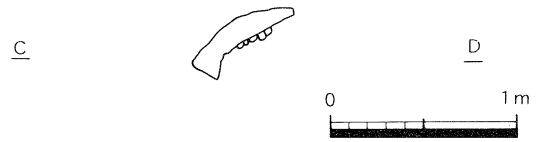
旧河道内の土層の堆積状態は自然なレンズ状堆積を示している。土層の堆積は西岸付近の河床から始まっており、つぎに中央部から周辺部へとしだいに堆積が広がっている。第１段階の土層は褐灰色シルト質細砂＋灰白色細砂、白灰色細砂を含む灰褐色シルト質細砂、灰白色中～細砂＋小石＋灰褐色シルト質細砂の３層である。第２段階は上層から灰白色細砂を含む鈍い黄橙色シルト質極細砂、灰白色中～細砂＋小石、白色細砂を多量に含む褐灰色シルト質細砂である。全体的に堆積土層中には多量の中～細砂が含まれており、河川特有の堆積層である。

遺物は、ほぼ全ての堆積層から出土するが、特に河床直上において遺物の出土数が多い。出土した土器が示す年代は弥生時代後期から中世までの非常に長い期間となっている。

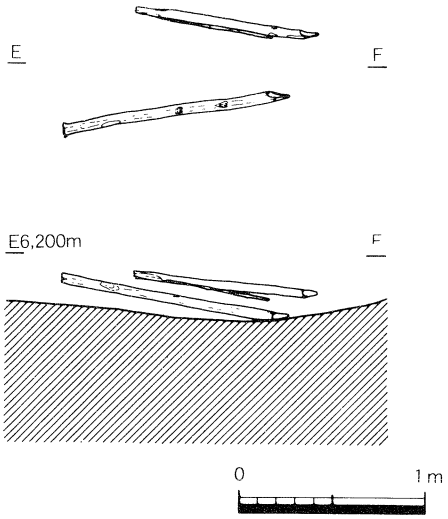




第８図　SR101平・断面図（Ｓ：１/100）



第９図　SR101動物遺体平面図
（S：1/40）



第10図　SR101加工木平・断面図
（S：1/40）

出土遺物　前述したように出土土器は弥生土器から中世の土器まで含まれており、長期間にわたって河川であったと考えられる。河床直上において、土器ともに動物遺体（顎骨と歯）、加工木が出土した。動物遺体は調査区中央やや東寄りの位置（第８図C－D）から出土した。専門家の鑑定を行っていないが、馬あるいは牛であると思われる。

遺物は、弥生土器壷(1,2)、同甕(3～11)、同高坏(12)、同鉢(13,14)、土師質土器坏(15,16)、須恵質土器椀(17)、須恵器壷(18,19)、同甕(20～23)、同蓋(24)、同坏(25)、同高坏(26,27)、同瑞(28)、青磁碗(29,30)、土師質土器土鍋(31)、同鉢(32)、さらに石製品(33)と加工木(34,35)がある。

１は口径17.6cmを測る大型の壷で、口縁端部に凹線文を１条巡らす。内外面とも摩滅が著しく調整は不明である。２は頸部と胴部上位のみ残存する。頸部は直立し、胴部との境は明瞭である。頸部の調整は外面ヨコナデが施され、内面には絞り目がある。胴部は内外面とも摩滅している。

３，４は、く字状口縁であり、口縁端部はわずかながら上方に拡張され、面をなす。口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部内面はナデが施される。５，６はやや緩やかに外反する口縁部と張りの少ない胴部の甕であり、口縁端部は丸く収まる。口縁部は内外面ともヨコナデである。７はほぼ球形の胴部であり、器壁は薄い。外面の調整はハケメの後にナデ、下位にはヘラミガキが施される。内面上半は指頭圧痕、下半はヘラケズリが施される。外面に黒斑が見られる。若干肩部の張る８はほぼ一定の器壁であり、外面の調整は縦方向のヘラミガキが施される。内面は剥離が著しいが、部分的にナデとヘラケズリが残存する。最大径以下の外面には煤、黒斑が付いている。９～11は底部片であり、９の胴部と底部の外面にはハケメが施される。

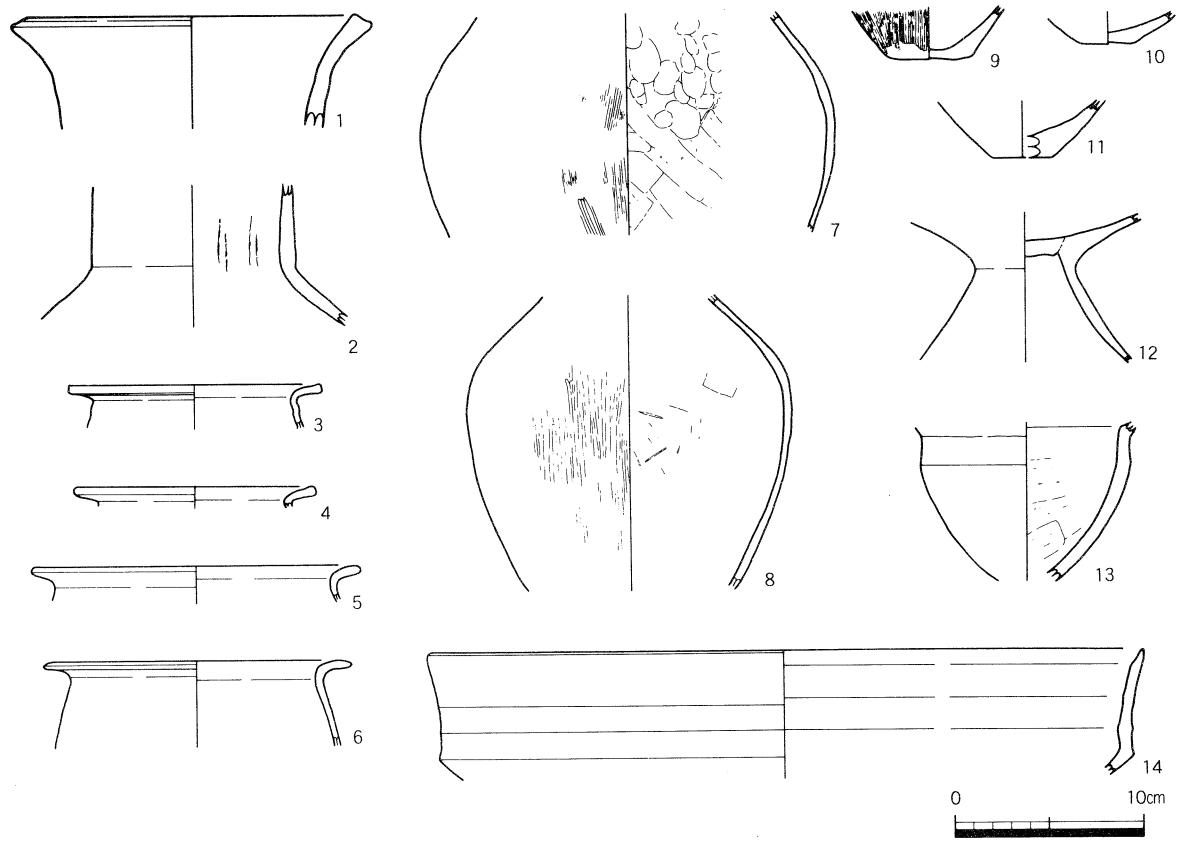
12は円盤充塡の高坏で、脚部は大きく広がる。

13は半球形の胴部の鉢で、胴部と頸部の境にわずかな稜を持つ。大型の鉢である14は外面に明瞭な稜を持ち、口縁部は直立する。口唇部内面には段がある。

15は口径と底径の比率が大きく、底部から緩やかな角度で立ち上がる。体部は直線的である。16は底部片のみであり、底面は回転ヘラ切り後に手持ちヘラケズリが施される。

非常に低い高台を持つ17は内面に細かいハケメを施し、底面は回転ヘラ切り後に回転ナデが施される。

18は底部から急傾斜で胴部が立ち上がり、高台の断面は方形を呈する。19はほぼ垂直に近い角度で



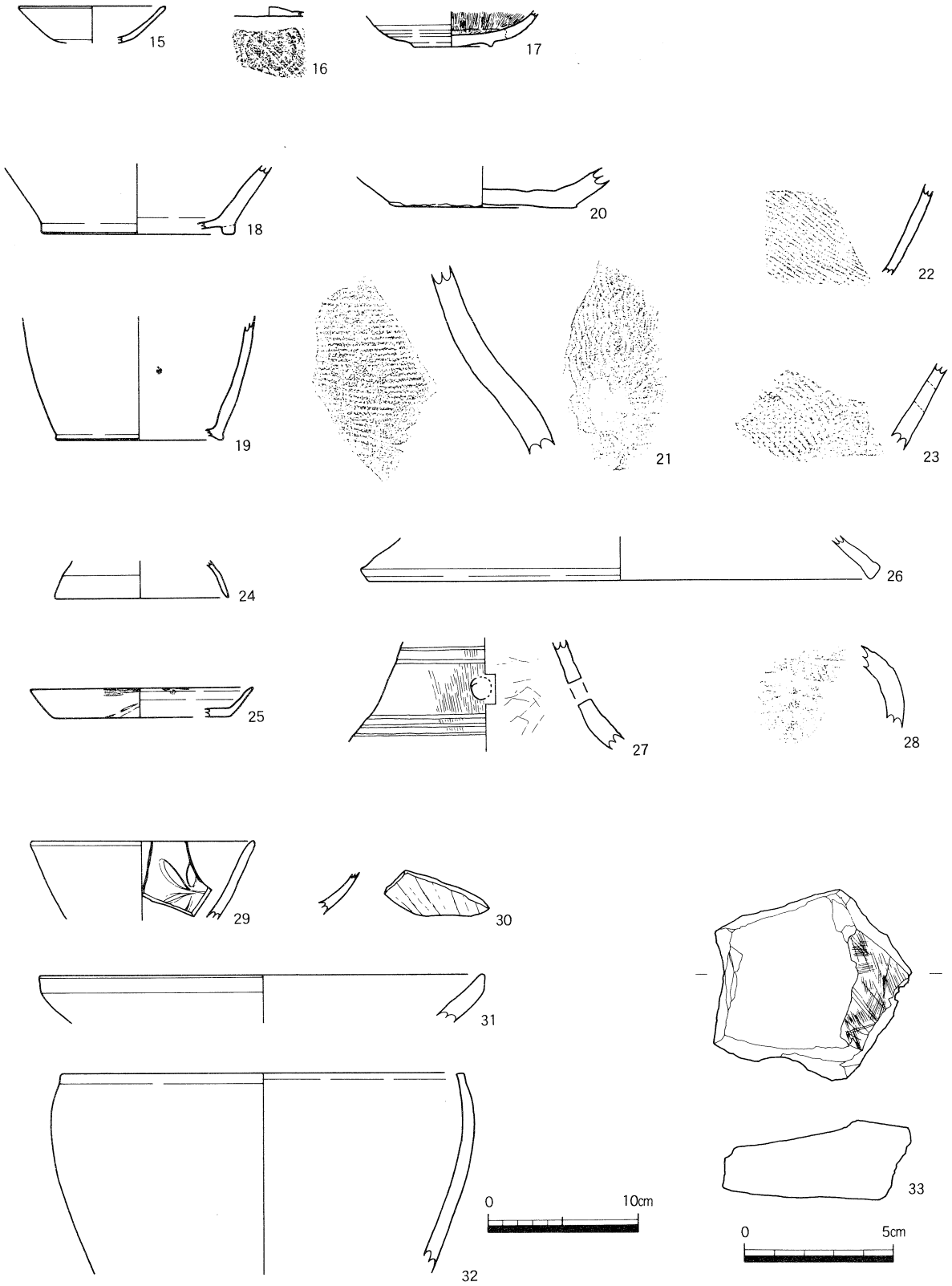
番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
1	弥生土器 壷	17.6		(5.9)		鈍黄橙 10YR6/3	灰黄褐 10YR6/2	石英、長石、角閃石
2	〃			(7.5)	頸部は直立。外面はヨコナデ、内面はしぼり目	鈍黄橙 10YR7/3	鈍黄橙 10YR6/3	〃
3	弥生土器 甕	13.2		(2.3)	口縁部ヨコナデ。胴部内面ナデ	鈍黄褐 10YR5/3	鈍黄褐 10YR5/4	〃
4	〃	12.6		(1.1)	口縁部はヨコナデ	鈍褐 7.5YR5/4		〃
5	〃	17.0		(2.0)	内外面とも摩滅するが、一部にヨコナデが残る	〃		〃
6	〃	16.4		(1.6)	内外面とも摩滅するが、口縁部外面にヨコナデが残る	褐灰 7.5YR6/1	褐灰 7.5YR5/1	長石、角閃石
7	〃			(11.6)	外面はハケ目後にナデ。内面上半は指頭圧痕、下半ヘラケズリ	鈍黄褐 10YR5/4		石英、長石、角閃石
8	〃			(15.8)	外面下半はヘラミガキ。内面はナデ、ヘラケズリ。外面に煤付着	鈍褐 7.5YR5/4		〃
9	〃		2.9	(2.8)	外面全面にハケ目	鈍黄褐 10YR5/3		〃
10	〃		2.8	(1.7)	若干上げ底	鈍黄橙 10YR6/3	鈍黄橙 10YR6/4	長石、角閃石
11	〃		3.4	(3.0)	平底。内外面とも摩滅	灰 5Y4/1	浅黄 2.5Y7/3	石英、長石
12	弥生土器 高杯			(7.9)	円盤充填。ない外面とも摩滅	鈍橙 7.5YR6/4	灰黄褐 10YR6/2	石英、長石、角閃石
13	弥生土器 鉢			(8.3)	頸部ヨコナデ。胴部内面はヘラケズリ、外面摩滅	鈍黄橙 10YR7/2		〃
14	〃	38.0		(6.7)	口縁部はほぼ直立し、内外面とも摩滅	鈍橙 7.5YR6/4	鈍褐 7.5YR5/4	〃

第11図　SR101出土遺物(1)（S：1/4）

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
15	土師質土器 杯	9.2		(2.4)	回転ナデ	灰白 10YR8/2	淡黄 2.5Y8/3	微～細砂
16	〃			(0.6)	底面は回転ヘラ切り後に手持ちヘラケズリ	淡黄 2.5Y8/3	灰白 2.5Y8/2	〃
17	須恵質土器 椀	5.4	5.4	(2.3)	回転ナデ。内面は細かいハケメ	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y8/1	〃
18	須恵器 壷		12.8	(4.1)	回転ナデ。貼付高台	灰白 N7/		密
19	〃		11.2	(8.2)	回転ナデ。底部から急傾斜で立ち上がる	灰 N6/		〃
20	須恵器 甕		12.2	(2.7)	底面中央はヘラナデ、周辺は未調整。回転ナデ。	灰 N7/		〃
21	〃			(12.8)	外面格子状タタキメ。内面青海波状タタキメ	灰白 N8/		〃
22	〃			(6.1)	外面平行タタキメ	灰 N5/		〃
23	〃			(5.4)	外面格子状タタキメ	灰 N6/		
24	須恵器 蓋	11.6		(2.5)	回転ナデ。外面に若干の稜を有す	〃		微～細砂
25	須恵器 杯	15.0	11.8	2.0	底面は切り離し後にナデ。内外面に棒状黒斑有り	〃		〃
26	須恵器 高杯		33.8	(2.9)	回転ナデ	灰 N5/	灰 N6/	密
27	〃			(7.2)	外面に5条の沈線。孔1個。外面はハケメ	灰黄褐 10YR6/2	灰黄 2.5Y6/2	微～細砂
28	須恵器 甕			(5.3)	甕の体部上位破片。押圧文	灰 7.5Y6/1	灰白 7.5Y7/1	微砂多量
29	青磁 碗	11.8		(5.2)	全面釉。内面に草文の片刃彫り (釉)	灰オリーブ 5Y6/2		密
30	〃			(2.7)	全面釉。外面は鎬蓮弁文 (釉)	明緑灰 7.5GY7/1		〃
31	土師質土器 土鍋	29.8		(3.2)	口縁部がやや尖がる。摩滅	鈍黄橙 10YR6/3	鈍黄橙 10YR7/2	粗砂多量、微礫
32	土師質土器 鉢	27.0		(13.1)	胴部外面に黒斑有り。	黄褐 10YR6/2		細礫、微砂

番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
33	不明	6.1	6.3	2.0	135	サヌカイト	一部に研磨部分が残存。擦痕

（第12図）



第12図　SR101出土遺物(2)（S：1/4、1/2）

胴部が立ち上がる。高台の断面は逆台形を呈す。

20は大甕の底部片で、底部中央がやや窪む。胴部の立ち上がりは緩やかである。底面中央の調整はヘラナデ、周辺部は未調整である。

21，23は外面に格子状タタキが施され、21の内面には青海波状タタキがある。22の外面は平行タタキが施されている。

24は外面に天井部と口縁部の境の稜を持ち、器厚は薄い。

25は口径15cm、底径11.8cm、器高２cmを測り、非常に浅い器形である。底面は切り離し後にナデが施される。口縁の内外面と体部外面に棒状黒斑がある。

26，27は高坏の脚部で、26は大型である。27は５状の沈線が巡り、外面にはハケメが見られる。

28は甕の胴部上位であり、外面には２条の沈線と櫛原体の押圧文がある。

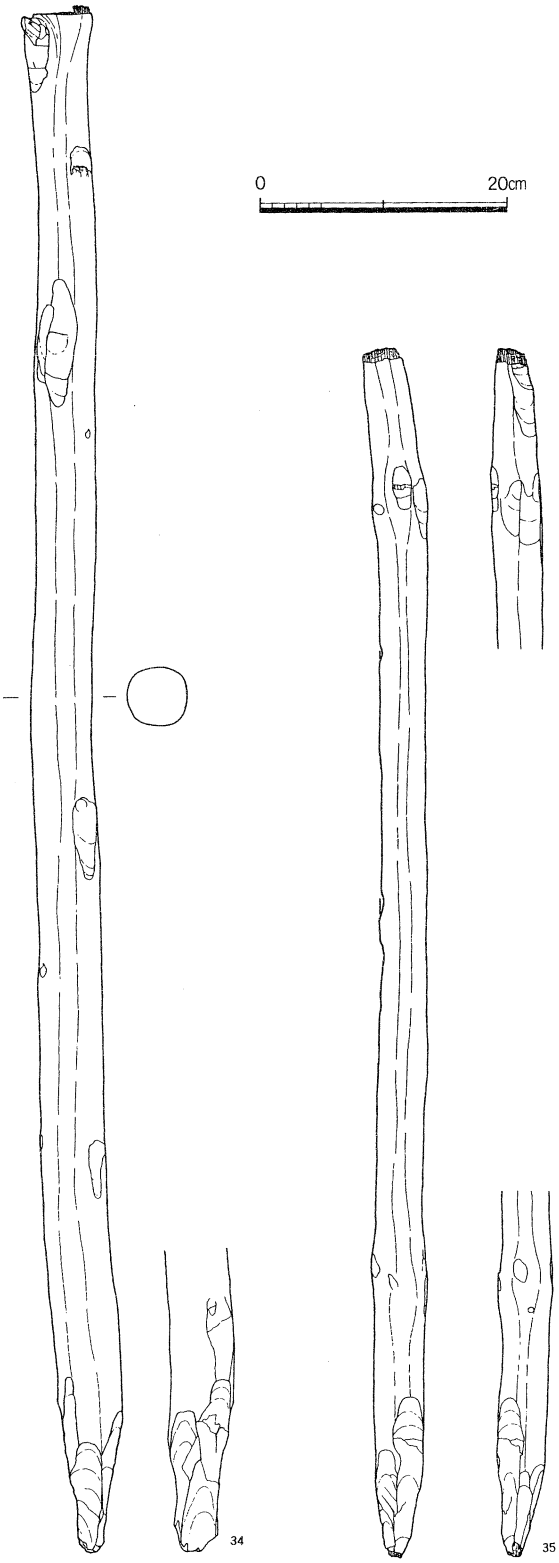
29は若干内湾する体部と外反気味の口縁部を持ち、内面に草文の片刃彫りが施され、30の外面は鎬連弁文が見られる。

31は土鍋の口縁部、32は口径27cmを測る鉢。

34，35は河床直上に並んだ状態で出土した杭である。34は全長126cmを測り、先端部は４方向からの鋭利な加工が行われる。先端はつぶれている。基部は鋸によって主軸直交方向に切断されている。35は全長98.1cmを測り、先端部は５方向からの鋭利な加工が行われている。先端は34と同様につぶれている。基部は１方向からの加工の後で折られており、ささくれ立っている。34，35共に数カ所の明瞭な枝払いが見られる。

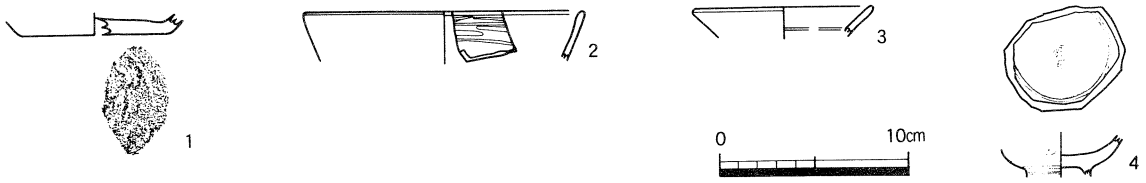
２）　包含層出土遺物　（第14，15図）

包含層から出土した遺物には、須恵器坏(1)、瓦器椀(2)、磁器皿(3)、染付碗(4)があり、近世水田からは土師質土器土鍋(1)、同こね鉢(2)、須恵器鉢(3)、陶器碗(4)が出土した。



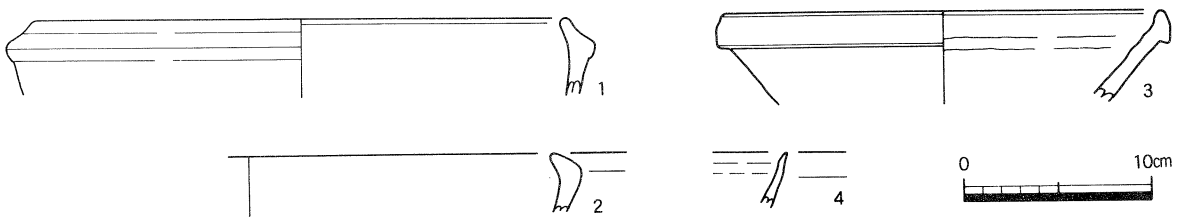
番号	器種	現在長(cm)	直径(cm)	特徴
34	加工木	126.0	5.0	基部は主軸直交の切断、先端部は４方向から明瞭な加工、明瞭な枝払い
35	〃	98.1	3.8	基部は１方向から加工、先端部は５方向から明瞭な加工、枝払い

第13図　SR101出土遺物(3)（S：1/6）



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
1	須恵器 杯		8.0	(1.1)	回転ナデ。底面は回転ヘラ切り後にナデ	灰白 7.5Y7/1	灰白 5Y7/1	微～細砂
2	瓦器 椀	15.0		(2.7)	全面ヘラミガキ。内面に圏線ヘラミガキ	灰 N5/	灰 N4/	〃
3	磁器 皿	9.4		(1.6)	全面釉（釉）	明オリーブ灰 2.5GY 7/1		密
4	染付 椀		3.4	(2.2)	見込みに「寿」	灰白 5Y8/1		〃

第14図　１工区包含層出土遺物（Ｓ：１/４）



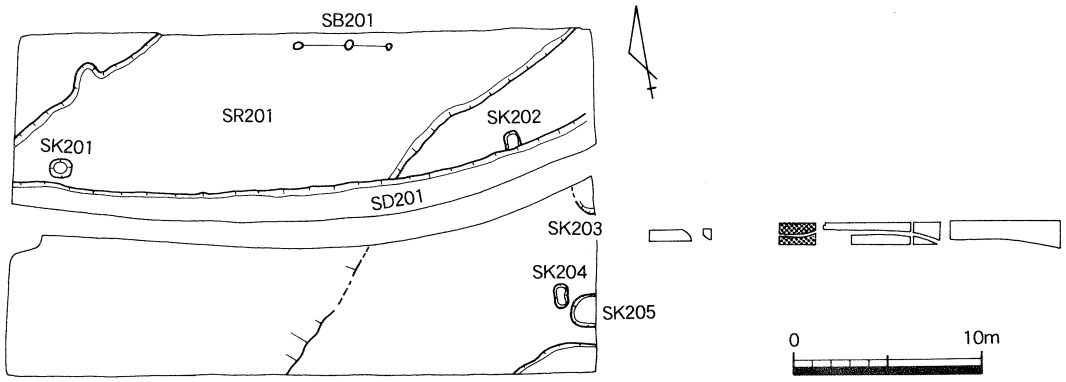
番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
1	土師質土器土鍋	28.4		(4.1)	口縁部ヨコナデ。体部内外面ともナデ	鈍褐 7.5YR5/4	鈍黄褐 10YR5/4	微～細砂
2	土師質土器こね鉢	32.4		(3.2)	外面摩滅。口縁部内面ヨコナデ	浅黄 2.5Y7/3	橙 2.5YR6/6	細砂若干
3	須恵器 鉢	23.4		(4.9)	口縁端部は拡張。口縁部ヨコナデ。内面一部に指ナデ	灰 N6/		密
4	陶器 椀			(3.0)	全面釉（釉）	灰黄 2.5Y7/2		〃

第15図　近世水田出土遺物（Ｓ：１/４）

２．２工区

２工区は１工区の東側に位置し、その間に住宅があるため未調査区となっている。調査区の全長は約30ｍであり、東西方向の現有水路によって分断されている。調査は工程の都合で北側を先行して行い、南側は後で行った。基本的な土層の堆積は、上位より現水田耕作土・近世条里型水田の灰白色シルト質細砂であり、部分的に灰褐色シルト質細砂・褐灰色シルト質細砂が見られる。

検出された遺構は弥生時代の旧河道と近世の掘立柱建物、土坑、溝のみで非常に希薄である。



第16図　２工区遺構配置図（Ｓ：１/400）

1）　弥生時代

1　自然旧河道

ＳＲ201　（第17～19図）

２工区の南西から北東にかけて検出された自然旧河道である。確認面は黄灰色シルトの地山でありそのレベルは標高6.60～6.70ｍである。ＳＲ201の検出された方向は南西－北東であり、ほぼ直線的に延びている。検出された幅は約15ｍを測り、深さは最も深い所で20cmであるが平均すると10～15cmである。非常に浅い旧河道である。河床はほぼ平坦であり、南端と北端のレベルも殆ど同一である。２工区の南側においてはＳＲ201の掘り込みは非常に浅くなり、不明瞭となっている。

埋土は上位から黒褐色シルト質細砂と黒褐色シルト質細砂＋褐灰色細砂の２層であるが、下層の土は東西の両岸付近のみに見られ、大局的には単一層である。遺物の出土は調査区北側に集中しており南側はほとんどない。

出土遺物　出土した遺物の大部分は土器であり、完形はなく小片のみである。遺物としては、弥生土器壺(1～10)、同底部(11～18)、同高坏(19～24)、同製塩土器（25，26）、さらに土錘(27)が挙げられる

１は直立する頸部から強く外反する口縁部を持ち、口縁端部は面をなす。内外面とも摩滅する。２は「く」字状口縁で、ほぼ水平に広がる。口縁部が外反する３の端部は上下に拡張し、６は外面に１条の凹線を巡らす。４は受口状の口縁である。５は水平な口縁部で、端部は上下に拡張し２条の凹線を巡らす。７の口縁端部は下方に若干拡張し、非常に浅い凹線の痕跡が残る。８は口径27cmを測る広口壺であり、口縁端部は上下に大きく拡張する。外面に２条の凹線の痕跡が一部見られる。９は外反する口縁部から急激に内傾する複合口縁の壺である。

11～18は底部片である。15は上げ底気味、16はやや丸みのある底部であり、その他は平底である。一部にヘラケズリのある11とナデの14を除き摩滅している。

19は外面に稜を持ち、口縁部は外反気味に立ち上がる。20は直線的な口縁部で外面に浅い凹線が巡る。口縁端部内面に段を持つ。21は大型の高坏であり、外面の稜を境にほぼ直線的に立ち上がる。22～24は高坏の脚部であり、23の裾部は上下に拡張し凹線１条が巡る。

25，26は製塩土器の底部であり、低い脚台を有する。26は左右不対称であり、外面はヘラケズリが施される。

27は土錘の破片である。上端は平坦な原形を残しているが、それ以外は破損が著しい。

2）　近世

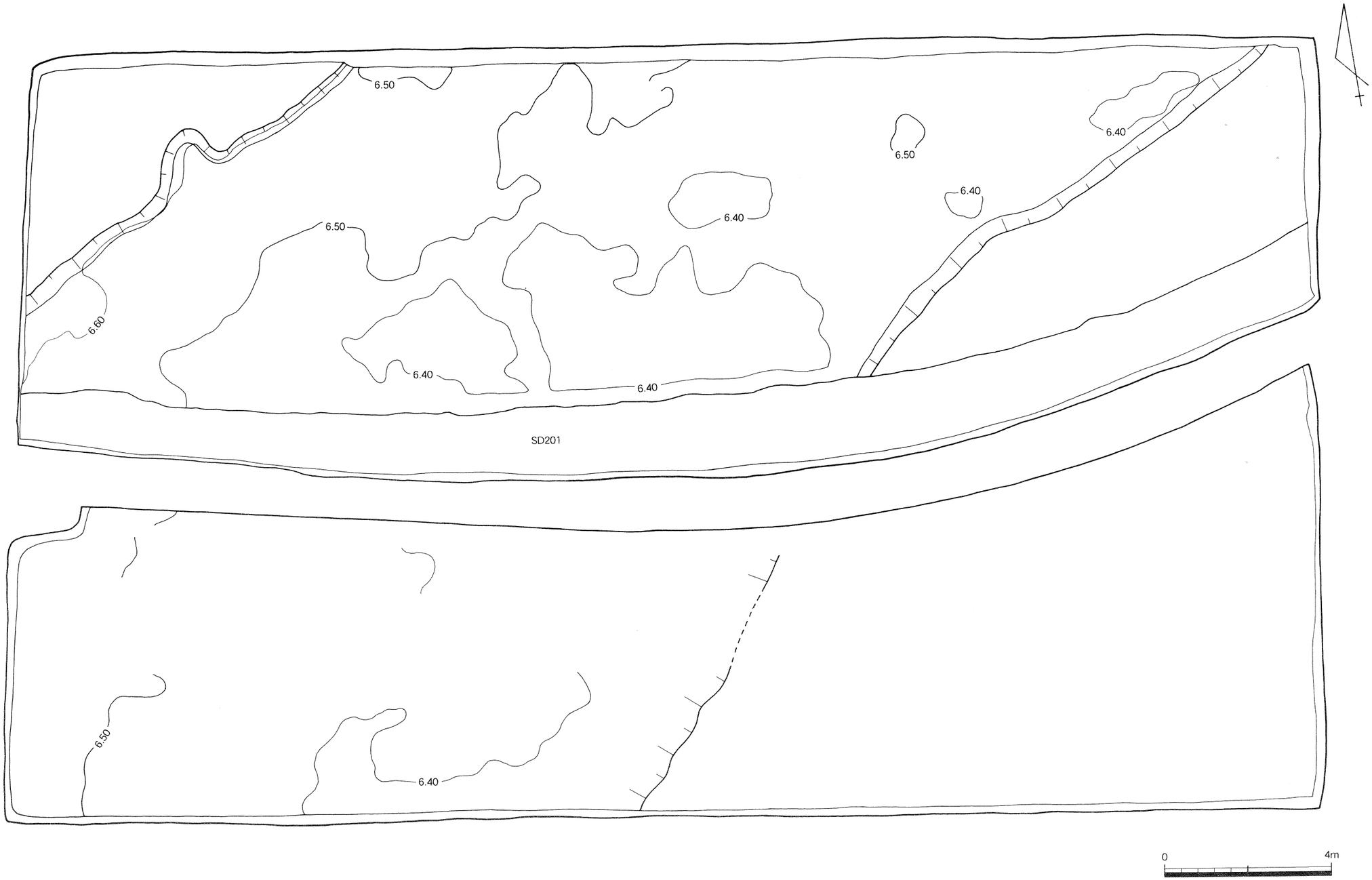
1　掘立柱建物

ＳＢ201　（第20図）

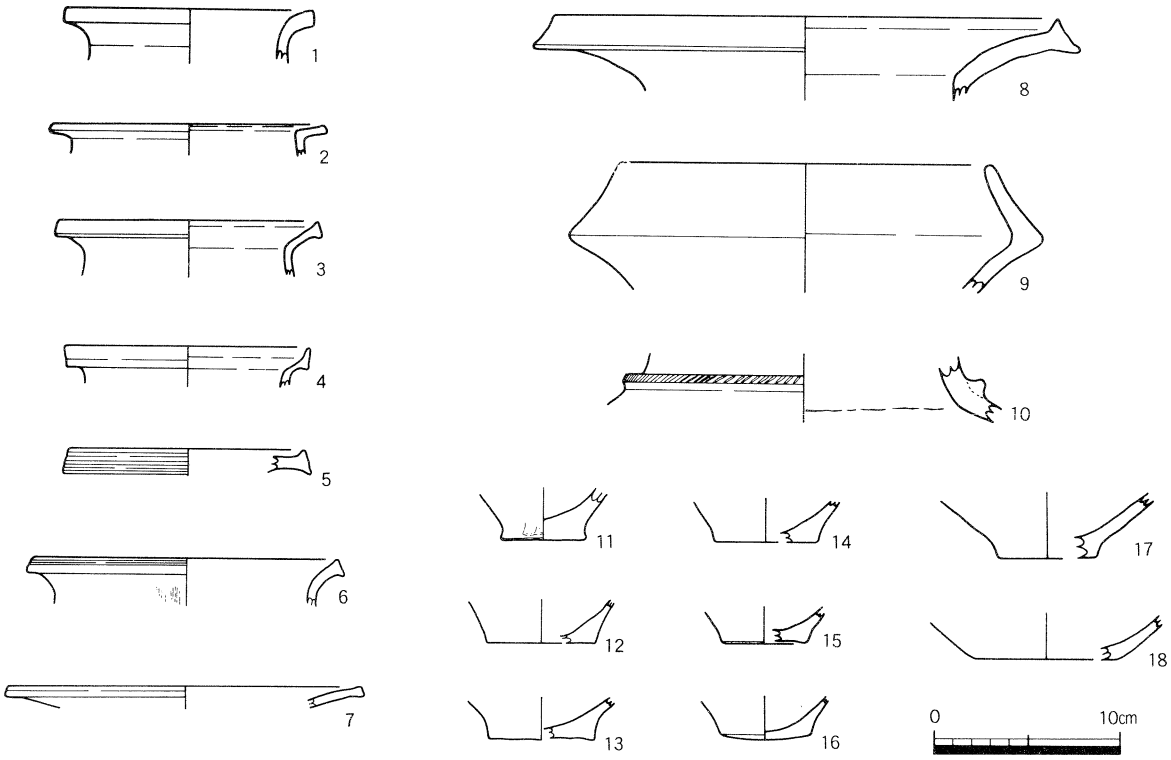
２工区中央の北端において検出された掘立柱建物である。検出されたのは３個の柱穴のみであり、その他は調査区外に広がっていると思われる。このため建物の平面形、規模は不明であるばかりでなく、掘立柱建物である明確な根拠もないが、一応ここでは掘立柱建物として報告する。

確認面のレベルは標高6.50ｍである。３個の柱穴は東西方向にほぼ直線的に並んでいる。柱穴の平面形は円形ないし楕円形を呈する。Ｐ－１は直径40cm、深さ15cmであり、Ｐ－２は直径40×55cmの楕円形をなし深さは38cmを測り、掘り方に段を持つ。Ｐ－３の直径は30cmを測り、深さは14cmであり、段を持つ。柱穴の埋土は２層である。

出土遺物　遺物は数点の弥生土器片と陶磁器片のみであり、図化できるものはなかった。

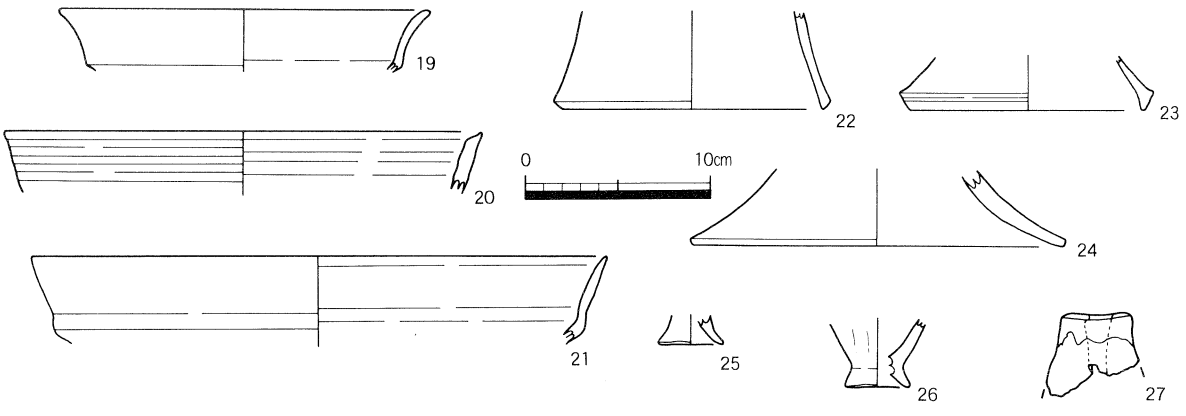


第17図　SR201平面図（S：1/100）



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
1	弥生土器　壺	13.4		(2.8)	直立する頸部から強く外反。摩滅	鈍黄橙 10YR6/4		石英、長石、角閃石
2	〃	14.6		(1.7)	頸部は直立、口縁部はほぼ水平に広がる。摩滅	鈍褐 7.5YR5/4		長石、角閃石
3	〃	14.0		(2.9)	口縁端部は上下に拡張。摩滅	鈍黄褐 10YR5/4		微～細砂
4	〃	13.2		(2.2)	複合口縁気味。摩滅	明赤褐 5YR5/6	鈍褐 7.5YR5/4	石英、長石、角閃石
5	〃	12.6		(1.3)	口縁端部は上下に拡張し、２条の凹線有り。	鈍橙 7.5YR6/4		〃
6	〃	16.4		(2.5)	口縁端部は下方に拡張し、凹線有り。頸部外面にハケメ	〃	鈍褐 7.5YR5/4	〃
7	〃	19.0		(1.1)	口縁部は大きく広がる。摩滅	橙 7.5YR6/6	鈍黄橙 10YR6/4	〃
8	〃	27.0		(4.4)	口縁部は大きく広がり、端部は上下に拡張。摩滅	明赤褐 5YR5/6	鈍橙 7.5YR6/4	細～粗砂
9	〃	19.8		(6.8)	複合口縁。摩滅	鈍黄橙 10YR7/2	〃	〃
10	〃			(3.4)	外面に刻目突帯文。内面に輪積み痕がある	黄灰 2.5Y4/1	鈍橙 7.5YR7/4	石英、長石
11	弥生土器		4.2	(2.8)	全面摩滅するが、外面にヘラケズリが一部残る	明褐灰 7.5YR7/2	黒 N1.5/	〃
12	〃		5.6	(2.3)	平底。摩滅	褐 7.5YR4/3	鈍褐 7.5YRYR5/4	石英、長石、角閃石
13	〃		5.6	(2.3)	若干上げ底気味。摩滅	鈍褐 7.5YR5/4	灰黄褐 10YR6/2	〃
14	〃		5.4	(2.2)	平底。ナデ	褐灰 10YR4/1	鈍黄橙 10YR6/4	〃
15	〃		4.6	(2.0)	若干上げ底。摩滅	鈍黄褐 10YR5/3	灰黄褐 10YR5/2	長石
16	〃		5.0	(2.3)	外面に黒斑。摩滅	鈍黄橙 10YR6/3		石英、長石、角閃石
17	〃		5.2	(3.5)	平底。底部の器壁は厚い。摩滅	〃	鈍黄褐 10YR5/3	石英、長石
18	〃		7.6	(2.4)	平底。摩滅	褐灰 10YR4/1	灰黄褐 10YR6/2	長石、角閃石

第18図　SR201出土遺物(1)（S：1/4）



第19図　SR201出土遺物(2)（S：1/4）

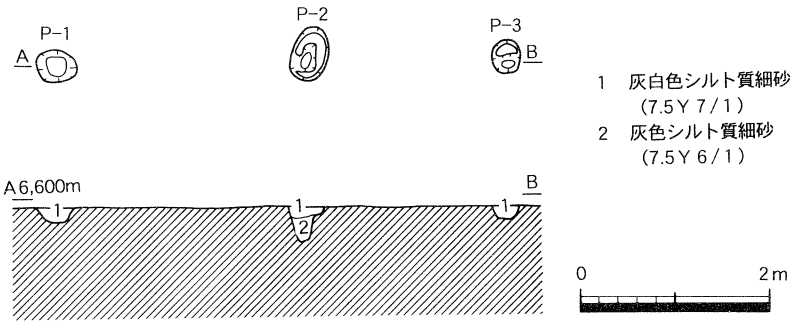
(第19図)

番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
19	弥生土器　高杯	20.0		(3.3)	外面に稜を持ち、口縁部は外反。前面摩滅	灰黄 2.5Y6/2	鈍黄橙 10YR7/2	石英、長石、角閃石
20	〃	25.6		(3.3)	口唇部が急激に細くなる。内外面に凹線	鈍黄橙 10YR6/4		長石、角閃石
21	〃	31.0		(4.6)	外面に稜を持ち、口縁部は細くなる。摩滅	〃	鈍橙 7.5YR6/4	石英、長石、角閃石
22	〃		17.4	(4.8)	ほぼ直線的な脚部。内外面ともナデ	〃		微～細砂
23	〃		12.4	(2.9)	脚裾部は肥厚し、外面に凹1条	鈍褐 7.5YR5/4		〃
24	〃		20.0	(4.1)	大きく広がる脚部。摩滅	鈍黄橙 10YR6/3	鈍黄橙 10YR6/4	石英、長石、角閃石
25	弥生土器 製塩土器		3.6	(1.5)	脚台のみ残存。裾部は不整形。摩滅	明赤褐 2.5YR5/6		〃
26	〃		3.4	(3.7)	不整形な形態。外面ヘラケズリ、内面ナデ	褐灰 10YR4/1	黒褐 2.5Y3/1	長石
27	土錘				中央に直径1cmの孔。破損が著しい	鈍黄橙 10YR6/4		微砂

2　土坑

ＳＫ201　（第21図）

２工区西端部の中央においてＳＲ201と重複して検出された。確認面のレベルは標高6.50ｍである。平面形は隅丸方形を呈し、一辺1.15ｍを測る。深さは25cmで、掘り込みは緩やかである。底面は平坦である。埋土は３層に分けられるが、明オリーブ灰色シルト質細砂と灰白色シルト質細砂が大部分を占める。



第20図　SB201平・断面図（S：1/80）

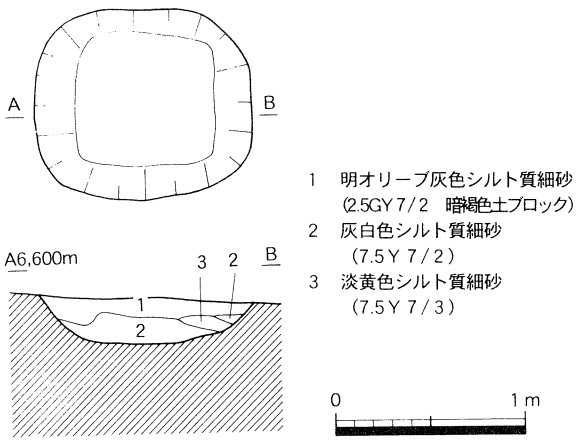
出土遺物　数点の弥生土器片と土師質土器片・陶磁器片が出土したが、図化できなかった。

ＳＫ202　（第22図）

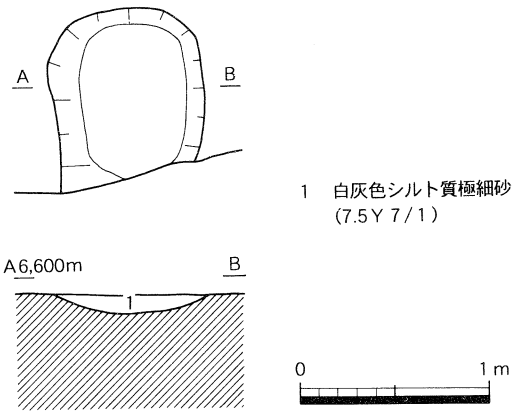
２工区中央の東寄りにおいてＳＤ201と重複して検出された土坑であり、ＳＤ201に切られる。

平面形は楕円形を呈し、南北方向の長軸は現状で98cmを測り、短軸は80cmである。確認面のレベルは標高6.50ｍであり、確認面からの深さは10cmである。掘り込みは非常に緩やかである。埋土は白灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　遺物は数点の土師質土器片・陶磁器片のみであり、図化できるものはなかった。



第21図　SK201平・断面図（S：1/40）



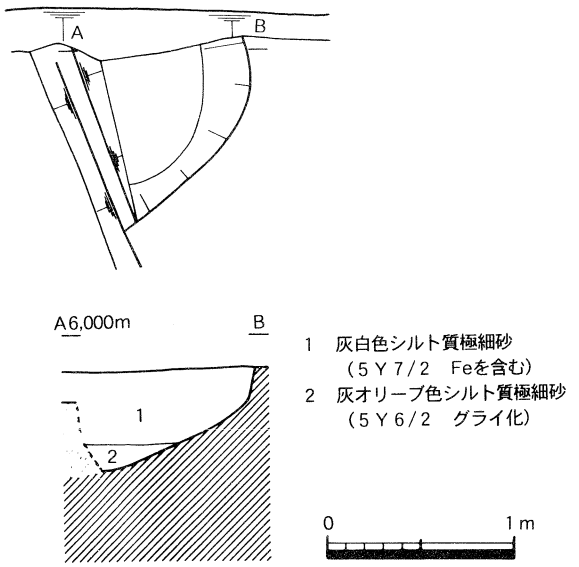
第22図　SK202平・断面図（S：1/40）

ＳＫ203　（第23図）

２工区中央の東端において単独で検出された土坑であり、検出できたのは全体の1/4である。

平面形・規模は不明であるが、不整円形と考えられる。確認面のレベルは標高5.80ｍであり、検出された部分内の深さは52cmである。埋土は灰白色シルト質極細砂が大半を占め、底面直上に灰オリーブ色シルト質極細砂が薄く見られる。

出土遺物　数点の陶磁器片のみである。



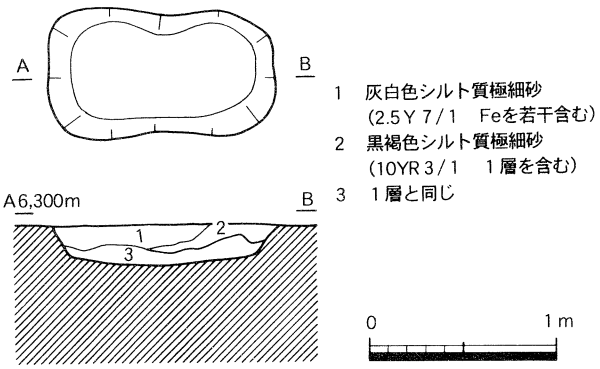
第23図　SK203平・断面図（S：1/40）

ＳＫ204　（第24図）

２工区南東隅において単独で検出された土坑である。ＳＫ205の西側に位置する。

平面形は隅丸長方形を呈し、長辺の中央部が若干くびれる。規模は南北方向の長辺が1.21m、東西の短辺0.70ｍを測る。確認面のレベルは標高6.20mである。底面はほぼ平坦である。埋土は人為的に埋められたと考えられる。

出土遺物　数点の陶磁器片のみである。



第24図　SK204平・断面図（S：1/40）

ＳＫ205　（第25図）

２工区南東隅において検出された土坑であり、ＳＫ204の東に位置する。土坑の東半分は調査区外となっている。

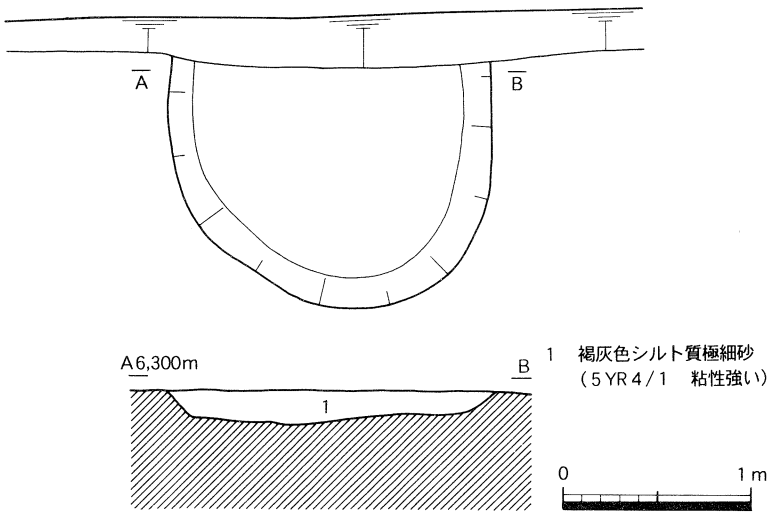
平面形は直径1.76ｍを測る不整円形である。確認面のレベルは標高6.20ｍであり、深さは15cm前後である。底面はほぼ平坦である。埋土は単一層である。

出土遺物　数点の陶磁器片のみであり図化できなかった。

ＳＫ206

２工区南東隅に検出された落ち込みであり、平面形・規模は不明である。確認面のレベルは標高6.20ｍであり、深さは５cmである。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　数点の土器片である。



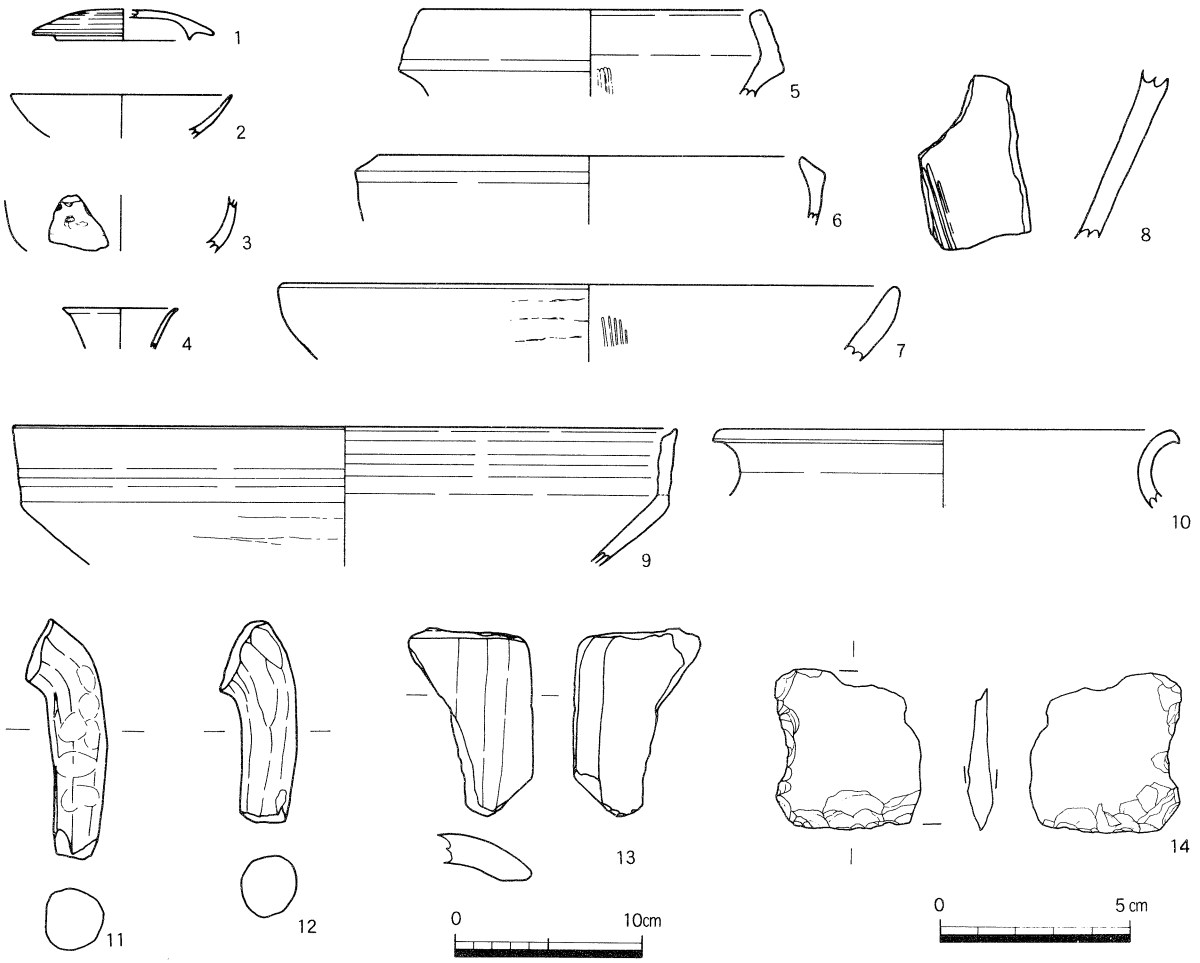
第25図　SK205平・断面図（S：1/40）

3　溝

ＳＤ201　（第26図）

２工区中央を東西方向に延びる現有コンクリート水路の北側に検出された溝で、現有水路の改修以前の溝であると思われる。北岸のみの検出であり、幅は不明である。断面はU字状を呈し、深さは15cmを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　遺物には弥生時代の遺物(9,14)が含まれるが、大半は近世～近代のものである。１～４は陶磁器、５，７，８は土師質土器擂り鉢、６は同羽釜、11，12は同土鍋、10は須恵器甕、13は道具瓦である。



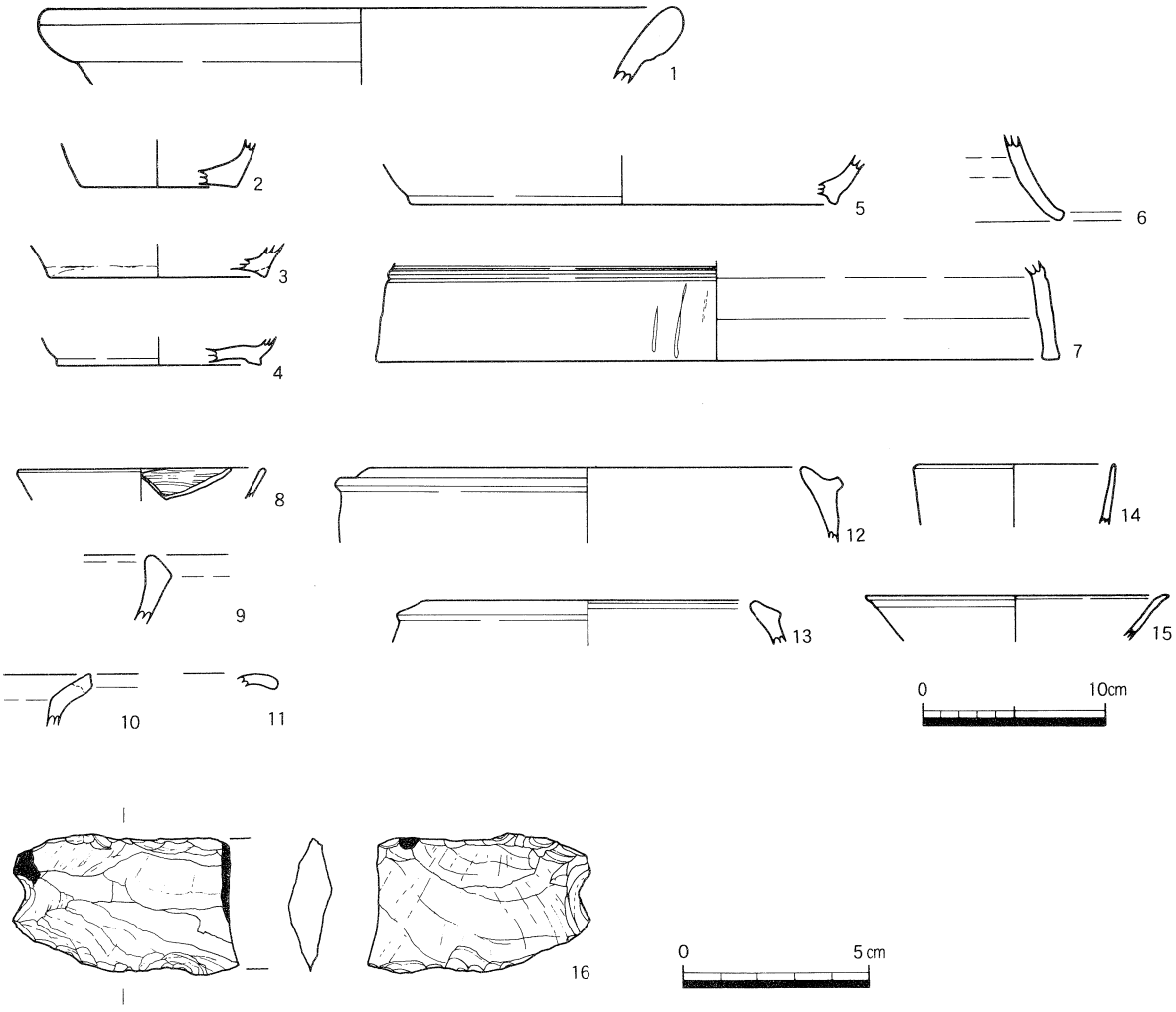
番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
1	陶器　蓋	9.8		1.6	口唇部ヨコナデ。天井部外面ヘラケズリ、内面ナデ	赤褐 10R4/4	赤褐 10R5/4	密
2	陶器　碗	11.8		(2.3)	器高が浅い。前面釉　(釉)	明緑灰 7.5GY8/1		〃
3	染付　碗			(3.0)	外面に草文の染付　(釉)	紺 5GY8/1		〃
4	磁器　猪口	6.2		(2.2)	体部は直線的、口縁部は若干外反	灰白 N8/		〃
5	土師質土器擂鉢	18.2		(4.6)	口縁部は直線的に内傾し、わずかな凹線を有する	灰白 N7/		微～細砂
6	土師質土器羽釜	22.8		(3.6)	口唇部はヨコナデ、体部はナデ	灰白 10YR8/2		微砂
7	土師質土器擂鉢	35.0		(3.9)	外面に３ヵ所の輪積み痕。条溝５本残存	鈍黄橙 10YR7/2	鈍黄橙 10YR6/3	〃
8	〃			(9.0)	内面に条溝	鈍黄橙 10YR7/3	橙 7.5YR6/6	微～細砂
9	弥生土器　鉢	35.8		(7.3)	口縁部は直立し、口唇部内面に稜を持つ。体部外面ヘラケズリ	鈍橙 7.5YR6/4		〃
10	須恵器　甕	24.0		(4.2)	口唇部は下方に若干肥厚する。内外面ともヨコナデ	灰 N6/	灰白 N7/	〃
11	土師質土器土鍋				脚主軸方向にナデ、指押え	灰黄褐 10YR6/2		細～粗砂、礫
12	〃				脚主軸方向にナデ、ヘラケズリ	明褐灰 5YR7/2		〃
13	道具瓦				凸面はヘラナデ	灰 7.5Y6/1		

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
14	石包丁	4.2	3.6	0.5	14.6	サヌカイト	剥離が著しく、刃部と抉りに細かい調整を施す

第26図　SD201出土遺物（S：1/4、1/2）

3）　包含層出土遺物　（第27図）

1は玉縁状口縁の須恵器甕、2はやや上げ底気味の底部である。3，4は高台を持つ須恵器椀で、3の高台は逆三角形、4はシャープな高台である。7は底径37cmを測る須恵器硯である。8の瓦器椀は内面にヘラミガキの後に暗文を施す。9～13は土師質土器、14，15は磁器碗である。16は石包丁。



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
1	須恵器　甕	34.0		(4.0)	口縁部は玉縁状。内外面ともヨコナデ	オリーブ灰 2.5GY5/1	黄灰 2.5Y4/1	粗砂
2	須恵器		8.4	(2.3)	回転ナデ	灰 N5/	灰 N6/	微～細砂
3	須恵器　椀		11.8	(2.0)	貼付高台の断面は逆三角形。回転ナデ	灰白 N8/		〃
4	〃		11.0	(1.5)	回転ナデ。底面は回転ヘラ切り後にナデ。高台の断面は台形	灰白 10Y7/1		微砂若干
5	須恵器　甕		23.0	(2.6)	回転ナデ	青灰 10BG5/1	青灰 10BG6/1	〃
6	須恵器　高杯			(4.6)	〃	灰 N6/		微～細砂
7	須恵器　硯		37.0	(5.2)	回転ナデ。沈線。ヘラによる押圧文	灰白 N7/	灰 N6/	微砂
8	瓦器　椀	13.2		(1.6)	外面ナデ。内面ヘラミガキ後に暗文	灰 N6/		〃
9	土師質土器こね鉢			(3.7)	ナデ	鈍黄橙 10YR7/4	鈍黄橙 10YR7/3	微～細砂
10	土師質土器土鍋			(2.8)	ナデ。輪積み痕	鈍褐 7.5YR5/4	鈍黄橙 10YR6/4	〃
11	土師質土器焙烙	43.0		(0.9)	ナデ	暗褐 10YR3/3	鈍黄橙 10YR6/3	微砂若干
12	土師質土器羽釜	23.2		(3.9)	口唇部は内傾。摩滅	鈍黄橙 10YR6/4	鈍褐 7.5YR5/4	微～細砂
13	〃	18.0		(2.4)		橙 7.5YR6/6		〃
14	磁器　碗	11.0		(3.3)	直立気味の体部	灰白 7.5Y7/2		密
15	〃	16.6		(2.4)	見込みに沈線１条。	灰白 5Y7/1		〃

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
16	石包丁	5.5	3.6	1.0	29.5	サヌカイト	刃部、背部に細かい調整

第27図　２工区包含層出土遺物（S：1/4、1/2）

３．３工区

３工区は遺跡の中央から東に位置し、東西両端は現有水路と道路が南北に走っている。調査区中央をほぼ東西方向に道路が通っているため、３工区は南北に分断され、さらに、東寄りの位置には南北方向のコンクリート水路があり東西に分けられる。すなわち、３工区は４分割されたような状況である。南西隅には住宅があり未調査である。

３工区の全長は102ｍを測る。調査以前の水田の標高は6.40～6.50ｍであり、西側から緩やかに東側に低くなっている。２工区東端との比高差は約25cm低く、４工区西端より約80cm高い水田である。

遺構は調査区のほぼ全域において検出され、本遺跡内では遺構・遺物の検出頻度が最も多い工区である。検出された主な遺構は、弥生時代の溝と近世の土坑である。溝は調査区中央に集中している。中央部やや東寄りにおいて、礫が長さ約２ｍ、幅40cmの帯状に露出するところが２ヶ所検出されたが遺構でないと断定し調査を行わなかった。しかし、平成７年に調査された高松市の「松林遺跡」において、粘土層の下から噴き出している数cm～拳大の礫が長さ３ｍ、幅40cmの帯状に検出され、これが噴礫であると確認された。本遺跡の礫は噴礫の可能性も考えられる。

基本的な土層は、最上位には現水田耕作土があり、その下には２ないし３層の近世条里型水田の灰白色シルト質細砂、中世以前と推定される条里型水田の灰褐色シルト質極細砂、褐灰色シルト質極細砂が堆積する。これらの水田層は土壌層と褐鉄鉱の沈澱する非土壌層に分けられ、それらの薄い層が交互に堆積する。遺構確認面である地山は中央付近を境に異なっている。東側は淡黄色シルトの高松平野で一般的な地山であるのに対して、西側は砂礫層と褐灰色シルト質細砂であり、遺構検出が非常に困難であった。

１）　弥生時代

１　溝

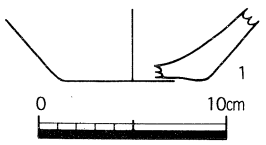
ＳＤ301

３工区西端において検出された溝である。確認面のレベルは標高6.20ｍである。検出された全長は1.30ｍのみであり、幅は50cm、深さ５cmを測る。溝の方向は南北であり、南側は削平されている。埋土は灰褐色シルト質極細砂の単一層である。遺物の出土はなかった。

ＳＤ302　（第28図）

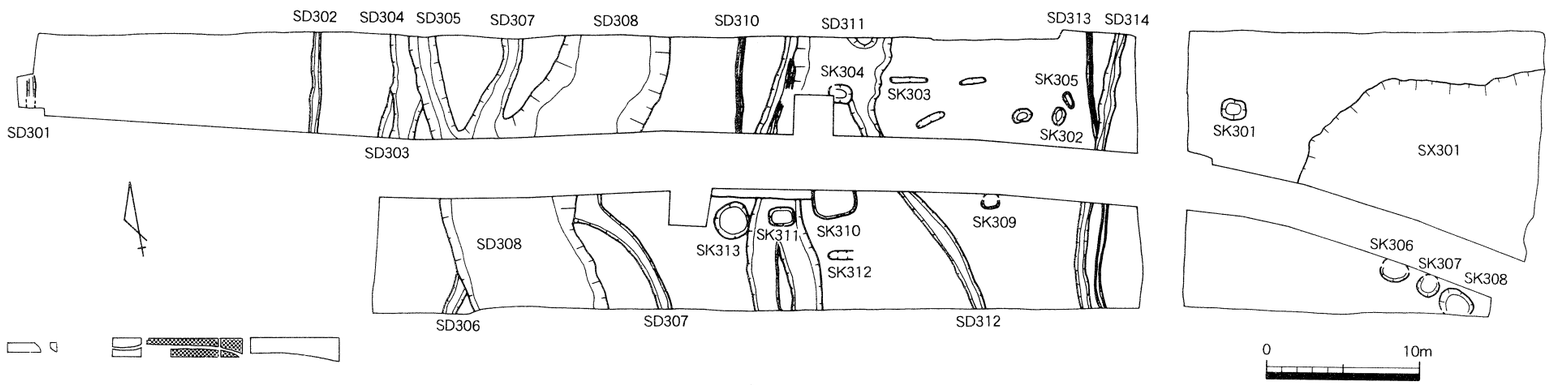
３工区西端において単独で検出された南北方向に延びる溝である。確認面のレベルは標高6.30ｍである。溝の幅は50～80cm、深さは５cmを測り、断面はＵ字形を呈し、底面は平坦である。埋土は黒褐色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　数点の弥生土器が出土したが、図化できたのは甕底部(1)のみである。

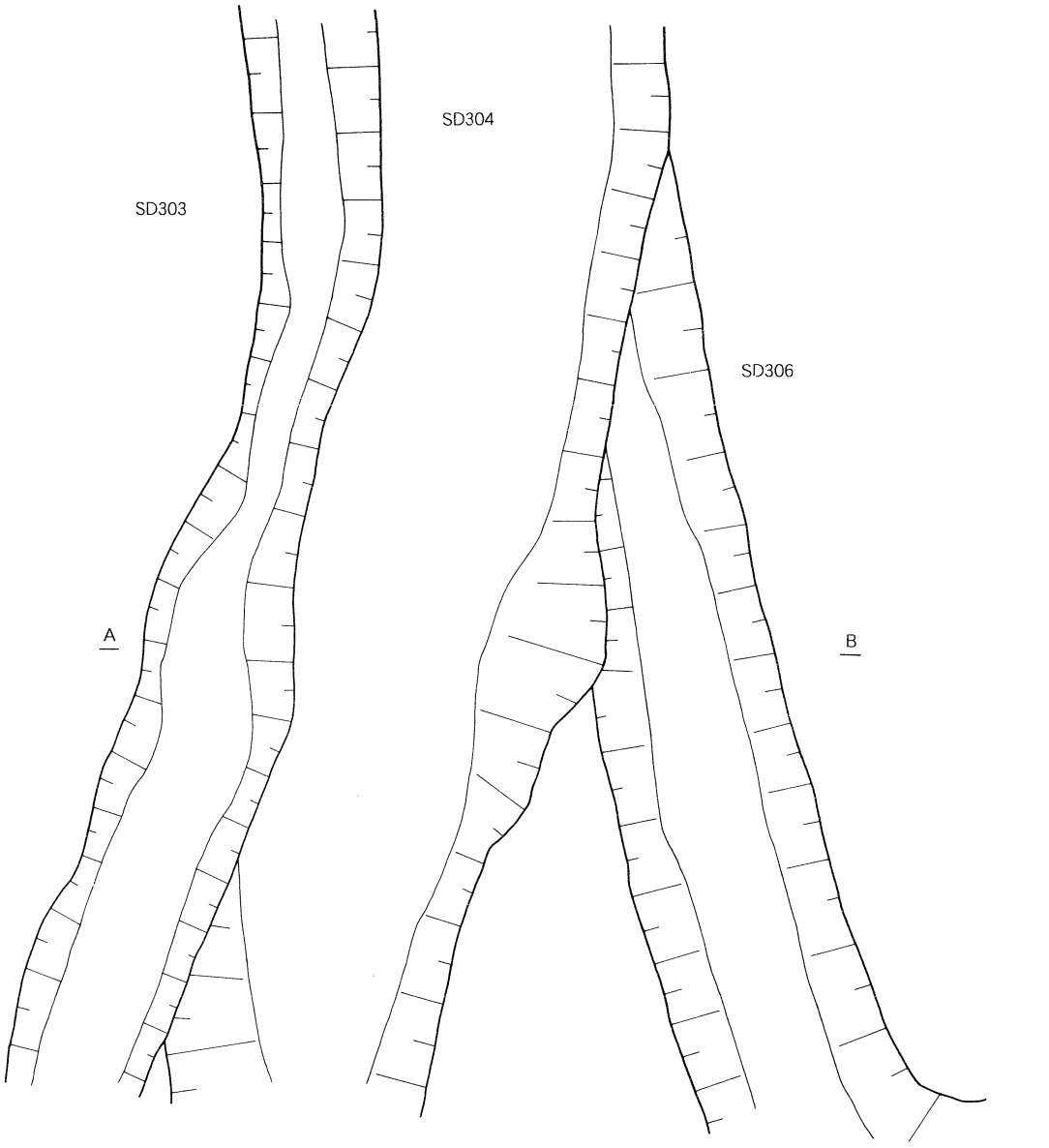


番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　甕		7.6	(3.8)	若干上げ底気味。摩滅	鈍橙 5YR6/4	灰白 2.5Y8/2	石英、長石

第28図　SD302出土遺物（Ｓ：１/４）



第29図　３工区遺構配置図（Ｓ：１/400）



SD303
1 黒褐色シルト質極細砂 (7.5YR 3/1)

SD304
2 黒褐色シルト質極細砂＋にぶい褐色細砂 (7.5YR 3/1＋5/3)
3 灰褐色シルト質細砂 (5YR 5/2)
4 白灰色細～中砂 (7.5YR 8/1)

SD306
5 黒褐色シルト質細砂 (5YR 3/1　小石を若干含む)
6 灰白色中砂 (7.5Y 8/2)
7 灰白色細砂 (2.5Y 8/1)

SD305
8 にぶい褐色シルト質極細砂 (7.5YR 5/3)
9 褐灰色シルト質極細砂＋灰白色細砂 (7.5YR 6/1＋10YR 8/1)
10 褐灰色シルト質細砂 (5YR 5/1　砂，小石を含む)
11 黒褐色シルト質極細砂 (5YR 2/1)

第30図　SD303～306平・断面図（S：1/40）

ＳＤ303　（第30図）

３工区中央やや西寄りにおいて検出された溝である。ＳＤ304の西肩を切っており、さらに重複する溝の中で最も新しい時期の溝である。

確認面のレベルは標高6.30ｍである。検出できた溝の全長は３工区北側のみの約6.00ｍであり、南側は未調査である。溝の幅は50～90cmを測り、一部細くなっている部分がある。深さは15cmで、断面は浅いＵ字形を呈する。溝の方向は南南西－北北東である。底面のレベルは南から北へ下がり、比高差は６cmである。埋土は黒褐色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　遺物は数点の弥生土器片のみであり、図化できるものはなかった。

ＳＤ304　（第30，31図）

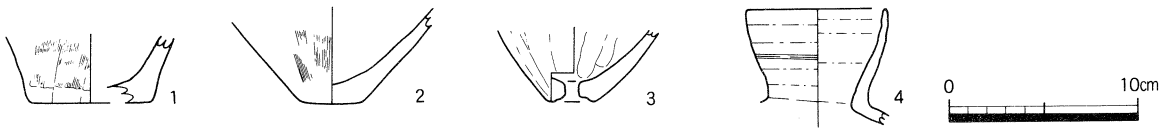
３工区中央やや西寄りにおいて検出された溝であり、ＳＤ303には切られるがＳＤ305，306を切っている。

確認面のレベルは標高6.30ｍである。検出することができた溝の全長は３工区北側のみの約6.00ｍである。溝は若干湾曲気味で南北方向に延びる。幅は南端で1.40ｍで細くなっているが、北側になると次第に広くなり北端では2.40ｍを測る。深さは30cm前後であり、底面は南から北へ緩やかに低くなっている。その比高差は約10cmである。断面はＵ字形を呈する。埋土は３層の自然堆積である。

出土遺物　埋土中より弥生土器甕(1)、同鉢(2,3)、須恵器平瓶(4)、他に弥生土器片が出土した。

１は平底の底部で、胴部は急傾斜で立ち上がる。外面の調整はナデとハケメが施され、内面は摩滅して調整は不明である。２は小さな底部の鉢で、外面の調整はハケメが施される。底部外面と胴部下位にはナデが見られる。内面は摩滅する。３は底部中央に孔を有する鉢で、内外面とも摩滅しているが一部にヘラケズリの痕跡が残っている。

４は平瓶であり、口縁部は内湾する。外面に１条の沈線が巡る。



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
1	弥生土器　甕		6.4	(3.6)	平底。外面はナデ、ハケメ	橙 5YR6/6	暗灰 N3/	石英、長石、角閃石
2	弥生土器　鉢		3.4	(5.1)	胴部外面はハケメ。底部はナデ	橙 2.5YR7/6	褐灰 10YR5/1	石英
3	〃		2.6	(3.8)	底部中央に孔。内外面ヘラケズリ	鈍黄橙 10YR7/4		石英、長石、角閃石
4	須恵器　平瓶	7.4		(6.2)	回転ナデ。外面に沈線１条。内面に輪積み痕	灰白 N7/		密

第31図　SD304出土遺物（Ｓ：1/4）

ＳＤ305　（第30，32図）

３工区中央やや西寄りにおいて検出された溝である。ＳＤ304，306に切られており、重複する４本の溝の中で最も古い溝である。３工区南側ではＳＤ308の上面に検出される。

確認面のレベルは標高6.30ｍである。溝の方向は南－北を示し、調査区北側ではＳＤ306とほぼ同一の位置にあるが、溝の南端では南東方向に曲がっている。検出することができた溝の全長は北側で約6.00ｍ、南側で約7.60ｍを測る。北側での幅は1.70ｍでほぼ均一であるが、南側では0.90～1.15ｍを測り、南端になるにしたがい細くなっている。深さは26～66cmを測り、南側が浅くなっている。断面はＵ字形を呈し、底面のレベルは南から北へ約30cmの比高差で緩やかに低くなっている。埋土は、上

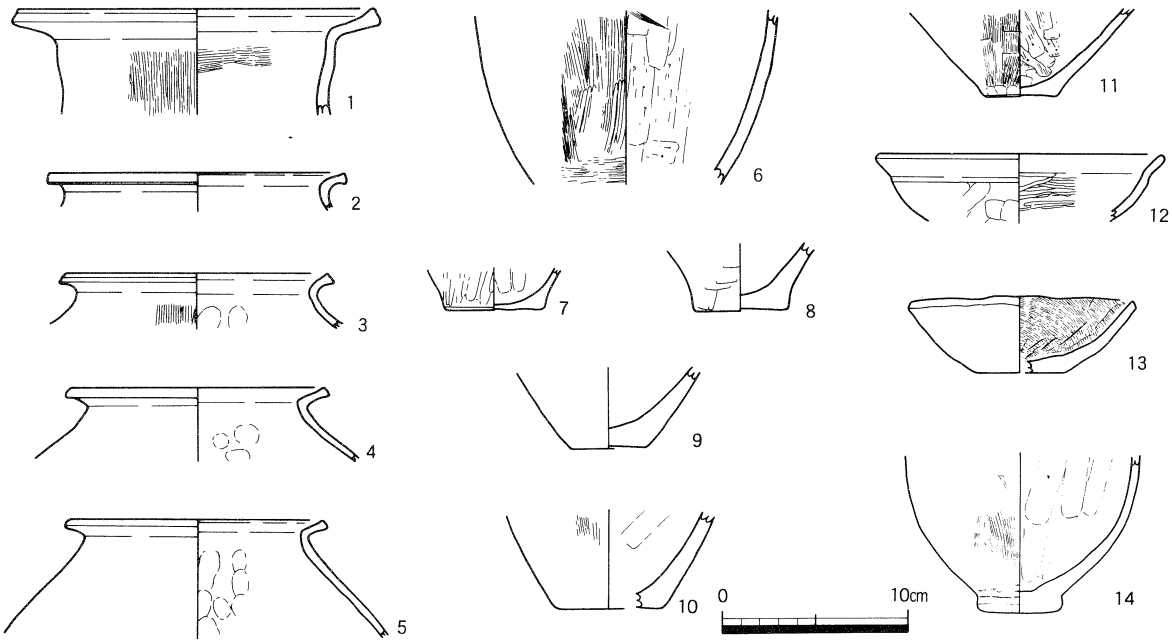
位から鈍い褐色シルト質極細砂、褐灰色シルト質極細砂＋白灰色細砂、褐灰色シルト質細砂、黒褐色シルト質極細砂の４層に分層できるが、２層と３層はほぼ同一である。土層の堆積はレンズ状をなし、自然堆積である。

出土遺物　遺物の大部分は、底面近くからの出土であり、弥生土器壺(1)、同甕(2～11)、同鉢(12～14)、その他の弥生土器片がある。

１は外傾気味に直立する頸部から強く外に広がる口縁部の壺であり、口縁端部は上方に若干拡張し外面にわずかな凹線を有する。口縁部はヨコナデ、頸部外面は縦方向、内面は横方向のハケメが施される。

２～５は「く」字状口縁をなし、端部は若干拡張する。口縁部はヨコナデ、胴部内面は指頭圧痕が施される。３の外面はハケメ、５はナデが施される。６は胴部下半のみ残存し、外面上位は縦方向のハケメ・ナデ、下位は横方向のハケメが施され、内面はヘラケズリである。７～11は底部である。

12は内湾する体部から稜を境に口縁部が直線的に外反する。口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面は横方向のヘラミガキが施される。13の口縁端部は面をなし、口唇部は若干波状になる。内面は細かいハケメが施される。14は台状底部をなし、外面はハケメ・ナデ、内面は指ナデである。



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	色調 内	胎土
1	弥生土器　壺	19.0		(5.7)	直立する頸部外面ハケメ、内面ナデ、ハケメ。口縁部ヨコナデ	鈍黄橙 10YR6/4		石英、長石
2	弥生土器　甕	15.8		(2.0)	口唇部は上下に拡張。口縁部ヨコナデ	鈍褐 7.5YR5/4	鈍赤褐 5YR4/4	石英、微～細砂
3	〃	14.0		(2.9)	口唇部は拡張し、凹線２条。胴部外面ハケメ、内面指頭圧痕	〃		石英、長石
4	〃	13.6		(3.9)	口唇部は若干拡張。胴部内面に指頭圧痕。摩滅	鈍橙 7.5YR6/4		長石、微～細砂
5	〃	13.6		(6.2)	口唇部は若干拡張。口縁部ヨコナデ、胴部内面指頭圧痕・ナデ	鈍黄褐 10YR5/4	鈍赤橙 10YR6/3	石英、長石、角閃石
6	〃			(9.2)	胴部外面は縦と横方向のハケメ・ナデ、内面ヘラ削り	灰黄褐 10YR6/2		石英、長石
7	〃		5.2	(2.2)	外面ヘラミガキ・ナデ、内面ヘラケズリ。底面ナデと部分的なハケメ	灰褐 7.5YR5/2	鈍黄橙 10YR6/3	石英、長石、角閃石
8	〃		4.8	(3.6)	外面ヘラケズリ後にナデ。底面は無調整	橙 5YR6/6	灰 5Y4/1	石英、長石
9	〃		4.2	(4.3)	摩滅	明赤褐 5YR5/6	鈍黄橙 10YR7/2	〃
10	〃		5.6	(5.2)	外面はハケメ・ナデ、内面はヘラケズリ	灰黄褐 10YR6/2	褐灰 10YR6/1	〃
11	〃		3.8	(4.5)	外面ハケメ、内面ヘラケズリ。底面ナデ。底部黒斑	褐灰 10YR5/1	鈍黄橙 10YR6/3	微砂
12	弥生土器　鉢	15.0		(3.6)	体部と口唇部の境に稜。体部外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ	鈍黄橙 10YR6/3		長石、微～細砂
13	〃	11.6	4.6	4.1	口唇部は若干波うつ。外面ナデ、内面前面に細かいハケメ	鈍橙 7.5YR6/4	鈍褐 7.5YR5/4	石英、長石、角閃石
14	〃		4.4	(8.4)	底部厚い。胴部外面ナデ・ハケメ、内面指ナデ。底部無調整	浅黄橙 10YR8/3		石英、長石、金雲母

第32図　SD305出土遺物（S：1/4）

ＳＤ306　（第30，33図）

３工区中央やや西寄りにおいて検出された溝であり、ＳＤ305・308を切るが、ＳＤ304には切られる。

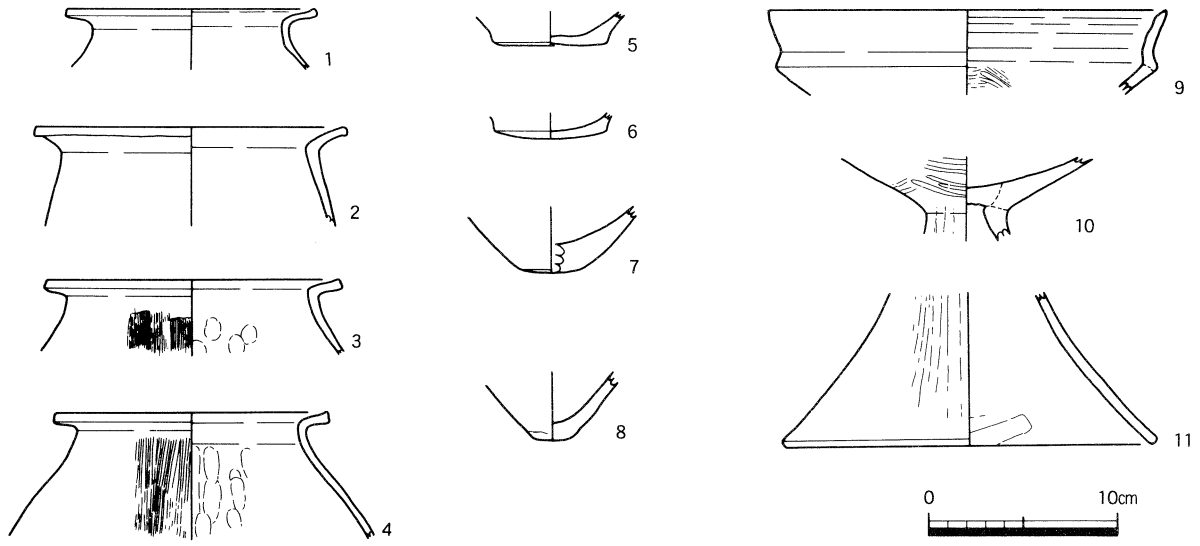
確認面のレベルは標高6.30m前後である。溝の方向は南－北を示し、３工区北側ではＳＤ305のほぼ上面を走っている。南側も同様にＳＤ305と同じ位置で検出されるが、南端近くでは南西方向に曲がっている。検出できた溝の全長は北側約6.00m、南側約7.80mである。南端での溝の幅は0.90m、北端では1.10mを測り、北側になるにしたがいやや広くなっている。深さは15～40cmを測り、底面のレベルは南から北方向へ緩やかに低くなっており、その比高差は約20cmである。断面はＵ字形を呈する。埋土は上位から黒褐色シルト質細砂・灰白色中砂・白灰色細砂の３層に分けられるが、溝の下半を占める２・３層は砂層であり、多量の水が流れていたと考えられる。

出土遺物　遺物の出土は溝全域において見られるが、特に、２・３層中からの出土が多い。遺物としては、弥生土器甕(1～6)、同鉢(7,8)、同高坏(9～11)、その他の弥生土器片がある。

１～４は胴部から水平方向に外反する「く」字状口縁をなし、口縁端部は若干拡張する。口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケメ、内面は指頭圧痕が施される。５，６は底部である。

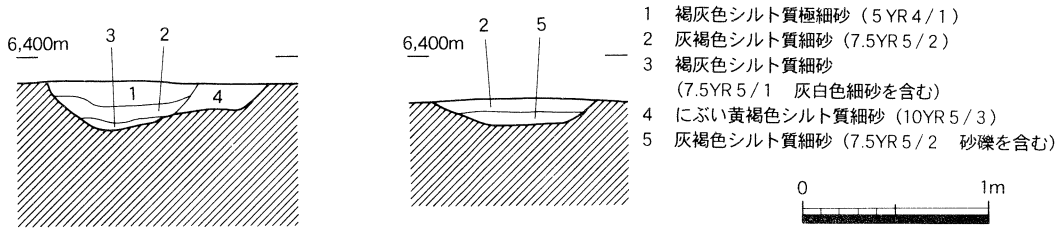
７，８は鉢の底部付近であり、底径は小さい。

９は体部と口縁部の境に明瞭な稜を持ち、口縁部は直線的に外反する。口唇部は段を持ち急激に細くなる。体部内面はヘラミガキが施される。10は円盤充填の高坏で、坏部外面はヘラミガキ・ナデ、脚部はヘラケズリ後にナデが施される。11は大きく広がる脚部で、外面ナデ、内面ヘラケズリである。

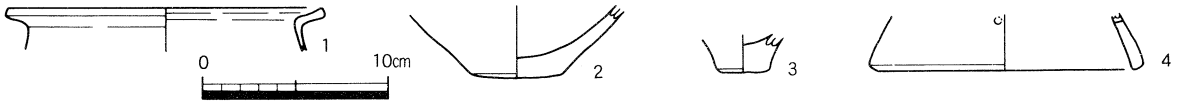


番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
1	弥生土器　甕	13.0		(3.2)	口唇部が若干上方に拡張。摩滅	明赤褐 5YR5/6		石英、長石、角閃石
2	〃	16.4		(5.3)	く字口縁ヨコナデ。口縁部が下方に若干拡張。口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	橙 5YR6/6	鈍橙 7.5YR7/3	〃
3	〃	15.6		(4.0)	口唇部ヨコナデ。胴部外面はハケメ、内面ナデ、指頭圧痕	鈍橙 7.5YR5/4		〃
4	〃	14.4		(6.7)	口唇部は若干拡張。胴部外面はハケメ、内面指頭圧痕	鈍赤褐 5YR5/4	鈍橙 7.5YR6/4	〃
5	〃		5.6	(1.8)	底面中央が少し凹む。外面ナデ	鈍黄褐 10YR5/3	鈍黄橙 10YR6/3	長石、角閃石
6	〃		6.0	(1.3)	やや丸みのある底部。摩滅	鈍褐 7.5YR5/4		石英、長石、角閃石
7	弥生土器　鉢		3.0	(3.5)	底部の器厚が厚い。摩滅	鈍黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/3	石英、長石
8	〃		2.0	(3.6)	摩滅	鈍橙 2.5Y6/3	鈍橙 2.5YR6/4	石英若干
9	弥生土器　高杯	21.2		(4.5)	外面に稜を持ち、口縁部は直立。外面摩滅。内面はヨコナデ・ヘラミガキ	鈍黄褐 10YR5/4		石英、長石、角閃石
10	〃			(4.5)	円盤充填。杯部外面ヘラミガキ・ナデ。脚部外面ヘラケズリ、内面ナデ	鈍黄褐 10YR6/4		石英、長石多量
11	〃		19.2	(8.1)	ほぼ直線的に広がる。外面ヘラケズリ後にナデ、内面ヘラケズリ	鈍褐 7.5YR5/4		石英、長石、角閃石

第33図　SD306出土遺物（Ｓ：１/４）



第34図　SD307断面図（S：1/40）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　甕	16.8		(2.3)	口唇部は上方に若干拡張。摩滅	鈍褐 7.5YR5/4		石英、長石、角閃石
2	〃		4.4	(3.8)	平底。摩滅	鈍黄橙 10YR6/1		石英、長石、金雲母
3	弥生土器　鉢		2.1	(2.0)	外面ヘラケズリ後にナデ、内面ナデ	黄灰 2.5Y4/1	明赤褐 2.5YR5/6	石英、長石、礫
4	弥生土器　高杯		14.8	(2.9)	孔1個のみ残存。外面摩滅、内面ヘラケズリ	赤褐 5YR4/6		石英、長石

第35図　SD307出土遺物（S：1/4）

SD307　（第34，35図）

3工区中央やや西寄りにおいて検出された溝である。調査区北側においてSD305・306・308と重複し合流しているが、切り合い関係は不明である。

確認面のレベルは南側で標高6.15m、北側で6.25mである。溝の方向は大局的には南－北を示すが、南側では若干湾曲気味に南東－北西に延びる。北側ではやや北北東である。検出された溝の全長は北側で約6.60m、南側で約9.30mを測る。溝の幅は0.90～1.30mで、南側はやや細くなっている。深さは10～25cmを測り、底面のレベルは南から北に緩やかに低くなっている。その比高差は約6cmである。断面はU字形を呈する。埋土は5層に分けられ、調査区北側の土層（第34図左側）を見ると、1～3層が4層を切って堆積しており、この溝は再掘削されたと考えられる。底面直上には細砂や砂礫が堆積しており、水が流れていたことがわかる。

出土遺物　埋土中からの遺物は、弥生土器甕(1,2)、同鉢(3)、同高坏(4)、その他の弥生土器片である。

1は「く」字状口縁で、端部が若干拡張し面をなす。内外面とも摩滅している。

3は小さな底部の鉢で、外面はヘラケズリ後にナデ、内面はナデが施される。

4は1個の孔を残存する脚部で、裾部は面をなす。内面はヘラケズリの痕跡がある。

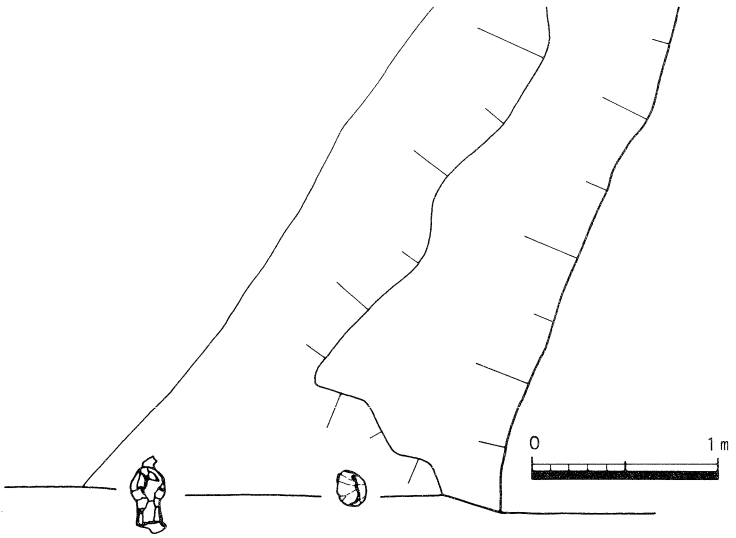
SD308　（第36～40図）

3工区中央やや西寄りにおいて検出された規模の大きな溝であり、SD305・306・315・316に切られ、SD307と重複する。

確認面のレベルは南側で標高6.15m、北側で6.25m前後である。溝の方向は南から北に延び、未調査の道路の下で方向を北東に流れを変え、そのまま北流する。若干蛇行する溝である。検出することができた溝の全長は、北側で約7.00m、南側で約7.50mを測る。土層観察の結果、この溝は2期に分かれることが判明したため、各期別に遺物を取り上げ調査を実施した。

Ⅰ期の溝は幅5.50～6.70mを測る。深さは50～60cmであり、最深部は東岸に寄ったところにあるため、東岸の掘り込みは急傾斜である。反対に西岸は非常に緩やかである。埋土は7層に細分されるが、上層の1，2層と下層の3～7層に大別される。

Ⅱ期の溝は、幅約7,00～9,00m、深さ0.90～1.00mを測る。断面はU字形を呈し、掘り込みは急傾斜である。底面のレベルはほぼ平坦であり、底面は砂礫層となっている。埋土は8～20層の13層に細分され、殆ど全ての土層に砂・小礫を多く含み、ラミナ状堆積が見られる。



第36図　SD308出土遺物平面図（S：1/40）

出土遺物　調査時には各期毎に遺物の取り上げを行ったが、出土した土器に明確な時期差が見られなかったので、ここでは分けずに報告する。Ⅰ期・Ⅱ期共に埋土中からの遺物の出土が見られたが、特に、Ⅱ期の底面直上からは完形及び完形に近い土器の出土があり、遺物の出土も多い。遺物としては、弥生土器壺(1～11)、同甕(12～27)、同鉢(28,29)、同高坏(30,31)、同製塩土器(32)、縄紋土器深鉢(33)、須恵器蓋(34,35)、打製石斧(36,37)、その他の弥生土器片がある。

1の口縁部は緩やかに外反し、外面に3条の沈線が巡る。口縁部外面の調整はヨコナデ、頸部はハケメ、内面は指頭圧痕の後にナデが施され、頸部外面には刻目文がある。2は内傾する頸部で、境に若干の段を有する。頸部内面に絞り目・ヘラケズリ、胴部内面に指頭圧痕・ヘラケズリが施される。4は完形の長頸壺であり、頸部は直立し口縁部は水平に大きく広がる。口縁端部は上方に若干拡張する。胴部は球形、底部は平らである。頸部外面・胴部外面上半は細かいハケメ、下半はヘラミガキが施され、頸部内面・胴部内面上半は指頭圧痕、下半は横方向のヘラケズリが施される。5は長頸壺の頸部以上であり、口縁端部は上下に拡張し凹線3条があり、頸部外面には多条の沈線が巡る。内面に絞り目が残る。6は胴部上半のみであり、外面はハケメ後にナデ、内面は指頭圧痕とヘラケズリが施される。7の細頸壺は頸部以上と底部を欠損する。外面は摩滅し、内面上半は指頭圧痕の後にナデ、下半はヘラケズリが施される。8は短頸壺である。9は複合口縁の壺であり、外面に2条の沈線を有する。内外面ともヨコナデである。10は完形の丸底壺であり、球形の胴部とやや内湾する口縁部を持つ。口縁部外面は粗いハケメの後にヘラナデ、胴部は粗いハケメ、口縁部内面は斜め方向の粗いハケメとヘラナデ、胴部内面上半は横方向のヘラケズリ、下半は指頭によるナデが施される。

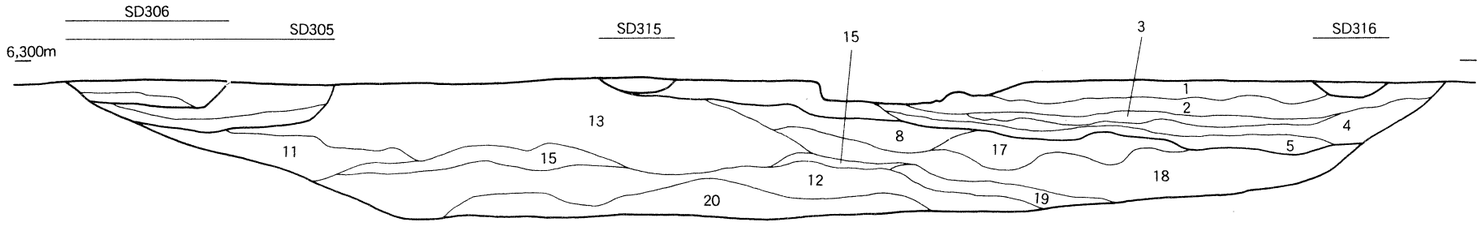
12～14は球形の胴部と「く」字状口縁部の甕であり、胴部上半は指頭圧痕、下半はヘラケズリが施される。15はほぼ完形であり、口縁部は受口状に内湾し、肩はあまり張らず長胴である。器壁は薄く均一であるが、底部は厚い。16～27は底部である。

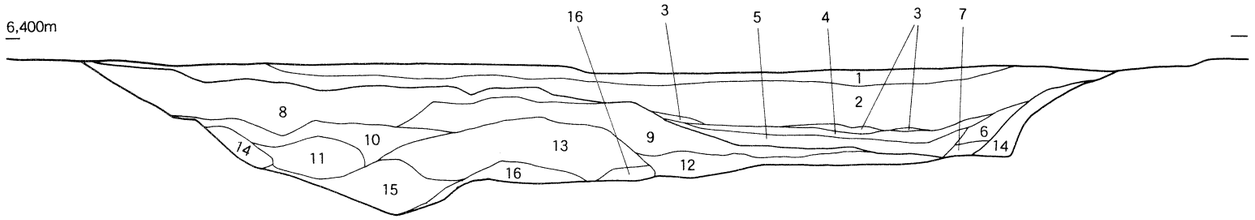
28は半球形の体部で、外面はナデ・ヘラミガキを施す。29は逆円錐形の鉢である。

32は左右不対称の製塩土器で、胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラケズリ・ナデが施される。

33は縄紋土器の深鉢で、外反する口縁部外面に刻目突帯文があり、その下に篦描文がある。

36,37はバチ形を呈する打製石斧である。

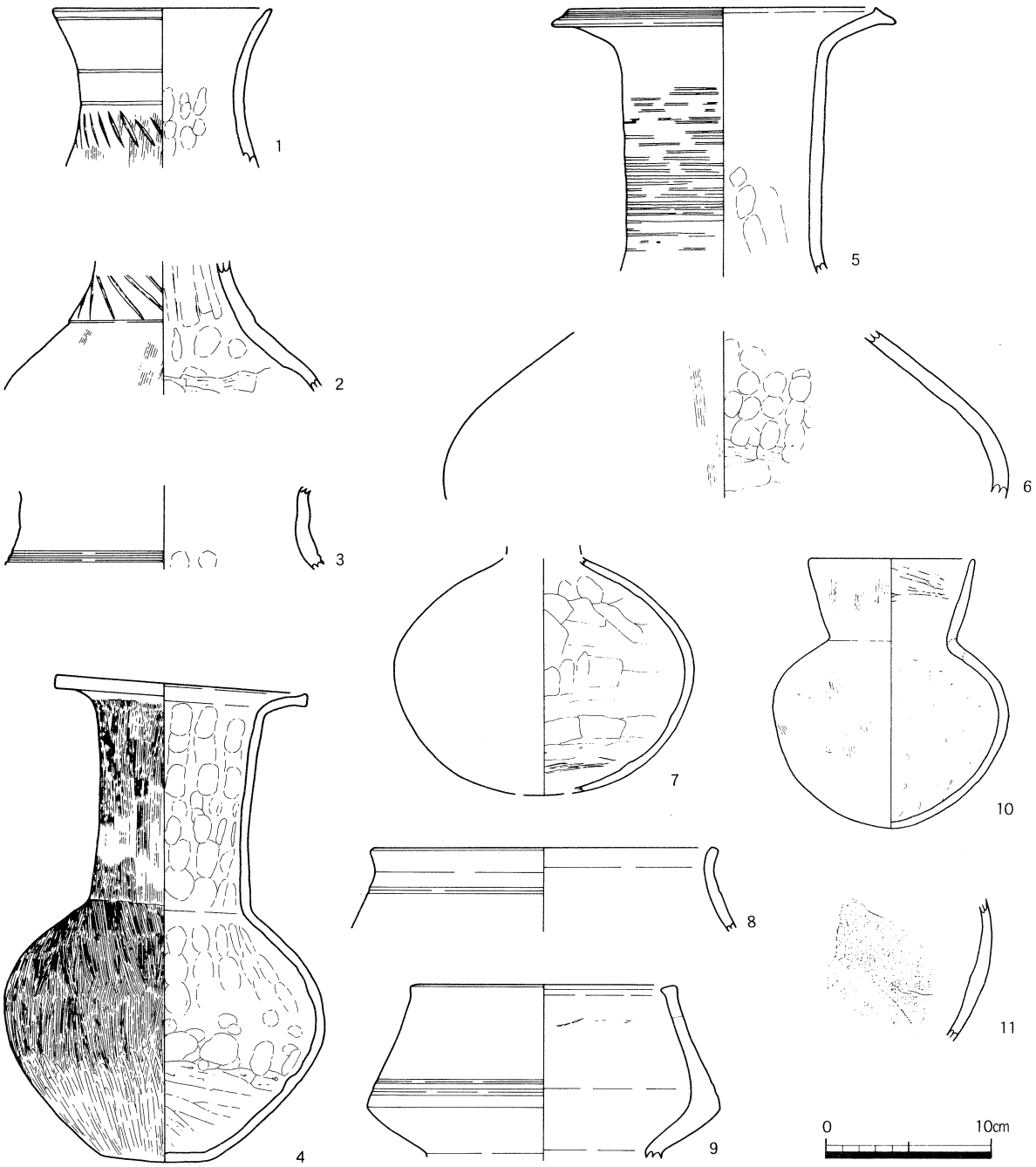




1　明褐色シルト質極細砂（7.5YR 7 / 4）
2　褐灰色シルト質極細砂（7.5YR6 / 1）
3　褐灰色シルト質細砂（7.5YR4 / 1　浅黄橙色土をブロック状に含む）
4　にぶい褐色＋褐灰色シルト質極細砂（7.5YR 5 / 3 ＋ 5 / 1）
5　黒褐色シルト質極細砂（5 YR 2 / 1　粘性強い）
6　4 層とほぼ同じ
7　黒褐色シルト質極細砂（5 YR 3 / 1）
8　褐灰色シルト質細砂（5 YR 4 / 1　灰白色細砂を含む）
9　灰黄色細～中砂（10YR 6 / 2）
10　にぶい黄橙色細～中砂（10YR 7 / 2）
11　灰白色中砂（2.5Y 8 / 1 ラミナ状）
12　灰白色中～粗砂（N 8 / 1 礫を含む）
13　灰褐色細～中砂（7.5YR 5 / 2 を多量に含む）
14　灰黄褐色シルト質極細砂（10YR 5 / 2）
15　オリーブ灰色シルト質細砂＋灰白色細砂
(2.5GY 5 / 2 +5Y 7 / 1　ラミナ状)
16　黒色シルト質細砂（7.5YR 2 / 1　礫，細砂を含む）
17　暗赤褐色シルト質細砂＋灰白色中砂（5YR 3 / 3 +5Y 8 / 1）
18　12層と同一（礫を多量に含む）
19　灰色細～中砂（5 Y 6 / 1）
20　灰オリーブ細～中砂（5 Y 6 / 2　礫を多量に含む）

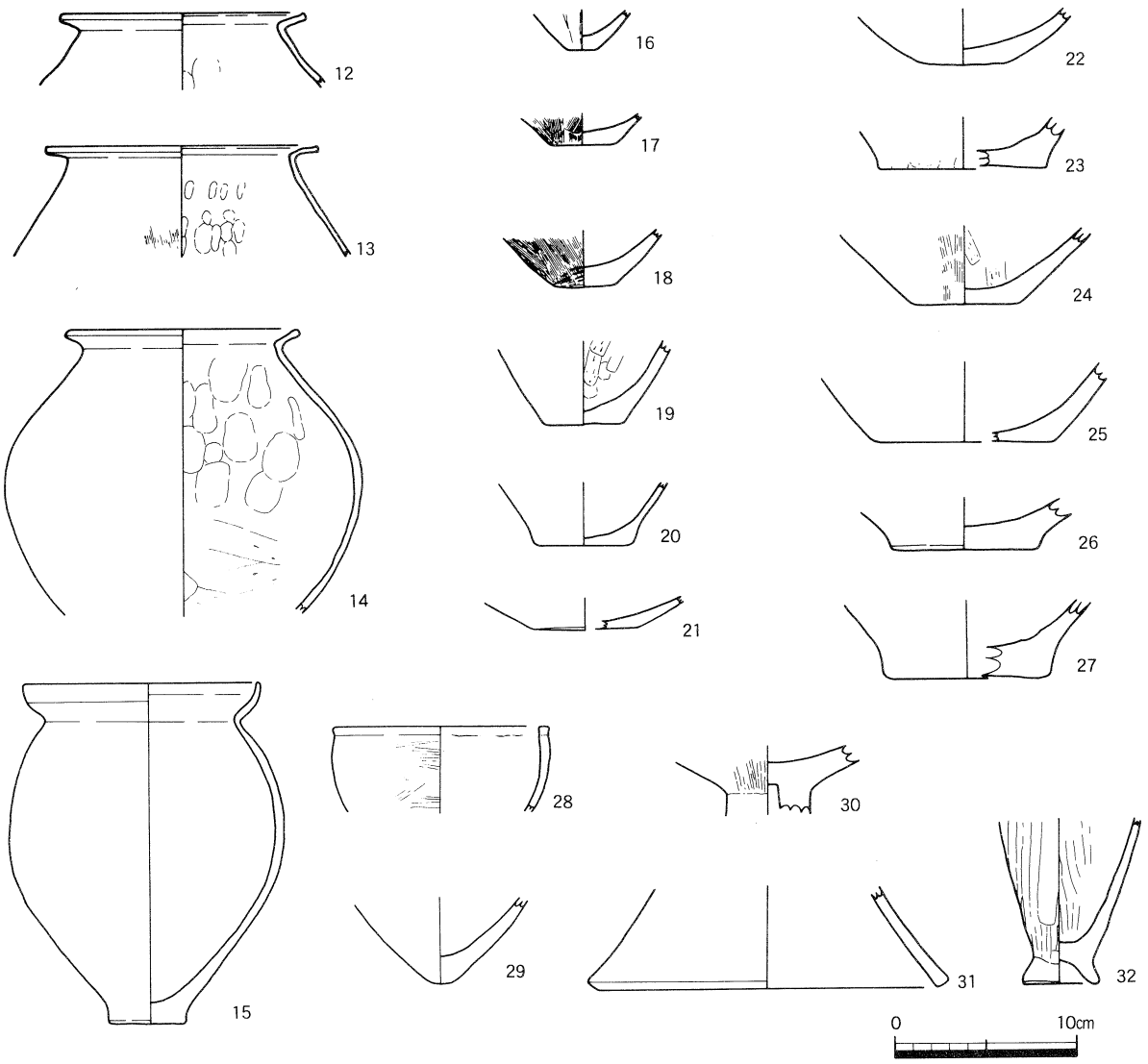
0　1 m

第37図　SD305、306、308、315、316断面図



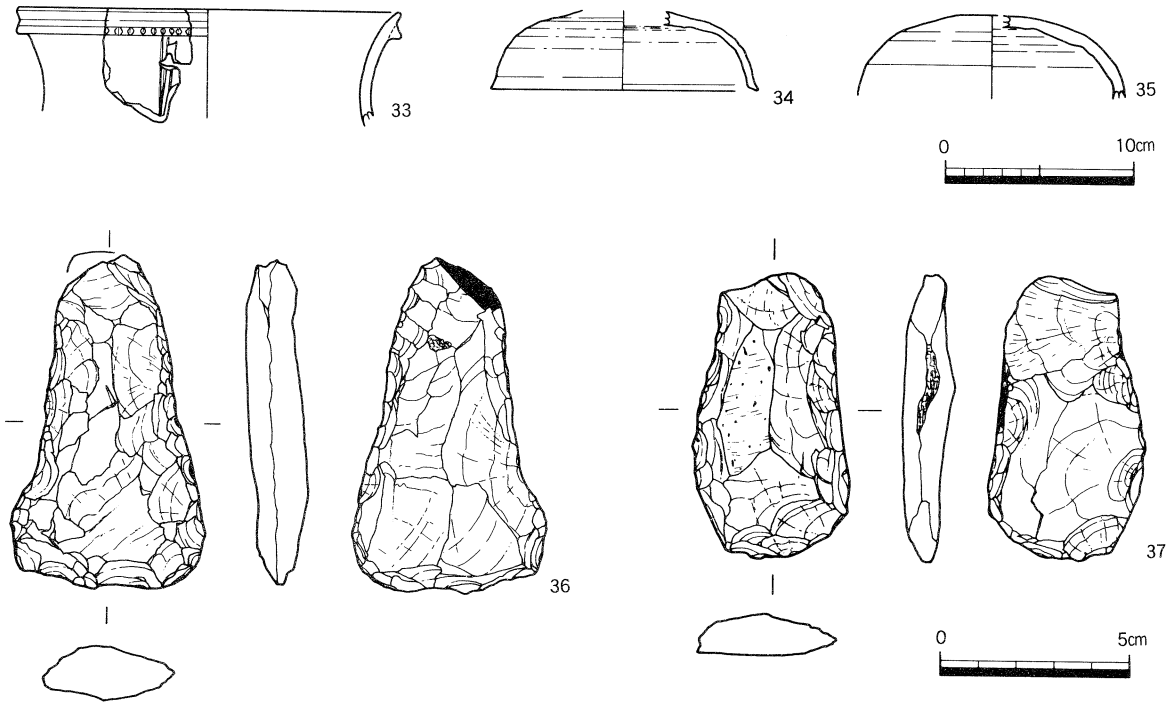
番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壺	13.4		(9.6)	口縁部に沈線３条。頸部外面ハケメ・内面指頭圧痕。刻目文	鈍褐 7.5YR5/4	褐 7.5YR4/6	石英、長石、角閃石
2	〃			(7.5)	頸部刻目文。胴部外面ハケメ、内面指頭圧痕、ヘラケズリ	〃		〃
3	〃			(5.1)	２条の凹線。内面ナデ、指頭圧痕	灰白 5Y8/2		石英、粗砂
4	〃	15.2	6.6	29.6	外面ハケメ・ヘラミガキ、内面指頭圧痕・ヘラ削り。口縁ヨコナデ	鈍黄褐 10YR5/3		石英、長石、角閃石
5	〃	18.6		(16.1)	口縁端部に凹線、頸部に 26 条の沈線。外面ヨコナデ、内面しぼり目	鈍黄橙 10YR7/2	灰白 10YR7/1	石英、長石
6	〃			(10.1)	球形の胴部。外面ハケメ後にナデ、内面指頭圧痕・ヘラケズリ	鈍黄橙 10YR6/3		石英、長石多量
7	〃			(14.2)	球形の胴部。内面上半は指頭圧痕後にナデ、下半はヘラケズリ	鈍褐 7.5YR5/4	鈍黄褐 10YR5/3	石英、長石、金雲母
8	〃	21.2		(5.1)	口縁部は短く外反。外面に１条の沈線	灰白 7.5Y8/2		粗砂
9	〃	16.0		(10.6)	複合口縁。外面に浅い沈線２条。内面に輪積み痕	灰黄褐 10YR6/2	鈍黄橙 10YR6/3	石英、長石、角閃石
10	弥生土器 小形丸底壺	10.0		16.3	外面ハケメ後にヘラナデ。口縁部内面ハケメ、胴部ヘラケズリ、指頭ナデ	鈍黄褐 10YR5/3	鈍黄褐 10YR4/3	長石
11	弥生土器　壺			(8.6)	外面ハケメ後にヘラミガキ・刻目文。内面指頭圧痕、ヘラケズリ	褐 10YR4/4		石英、長石、角閃石

第38図　SD308出土遺物（1）（S：1/4）



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
12	弥生土器 甕	13.4		(4.2)	く字口縁ヨコナデ。胴部外面は摩滅、内面指頭圧痕	褐 7.5YR4/6		石英、長石、角閃石
13	〃	15.0		(6.1)	口縁部はほぼ水平。胴部外面はナデ・ハケメ、内面指頭圧痕	鈍黄橙 10YR6/3		〃
14	〃	12.6		(15.7)	く字口縁。胴部外面は摩滅、内面上半指頭圧痕、下半ヘラケズリ	鈍橙 7.5YR6/4		〃
15	〃	12.9	4.2	18.2	口縁部は受口状に内弯。全面摩滅	灰白 2.5Y7/1	灰 N4/	〃
16	〃		1.6	(2.2)	外面ヘラケズリ、内面摩滅	黄灰 2.5Y4/1	灰白 2.5Y8/2	微砂若干
17	〃		3.4	(1.7)	外面ハケメ、内面ナデ。底面ナデ・ハケメ	暗灰 N7/	灰 N4/	微～細砂、長石
18	〃		3.4	(3.1)	外面細かいハケメ、ヘラによる押圧。内面摩滅	褐 7.5YR4/6		石英、長石
19	〃		4.5	(4.6)	外面摩滅、内面ヘラケズリ。外面黒斑	浅黄橙 7.5YR8/3	灰白 10YR8/1	微～細砂
20	〃		5.0	(3.5)	外面ナデ、内面摩滅	黄灰 7.5Y4/1	黄褐 2.5Y5/3	石英、長石
21	〃		6.0	(1.8)	底部からゆるやかに立ち上がる。内外面摩滅	鈍黄橙 10YR6/3		石英、長石、角閃石
22	〃		4.8	(3.1)	〃	橙 2.5YR6/6		石英、長石
23	〃		9.2	(2.8)	器壁が厚い。外面ナデ、内面摩滅	鈍黄橙 10YR6/3	鈍黄橙 10YR7/3	石英、長石多量
24	〃		5.2	(4.3)	外面は粗いハケメ、内面ヘラケズリ・ナデ。底面一方からのハケメ	淡黄 2.5Y8/3	灰白 2.5Y7/1	石英、長石
25	〃		10.0	(4.4)	平底。内外面とも摩滅	鈍橙 7.5YR7/4	灰黄褐 10YR6/2	〃
26	〃		8.0	(2.8)	〃	灰黄 2.5Y7/2	灰白 2.5Y7/1	細～粗砂
27	〃		9.0	(4.3)	底部は非常に厚い。内外面とも摩滅	〃		石英、長石
28	弥生土器 鉢	12.0		(4.2)	底部はわずかに内弯。口縁部ヨコナデ。底部外面ナデ・ヘラミガキ	鈍黄橙 10YR7/3	灰白 10YR7/1	〃
29	〃		0.8	(4.7)	全面摩滅	鈍橙 5YR7/4	灰白 10YR8/2	細～粗砂
30	弥生土器 高杯			(3.8)	杯部外面ヘラミガキ、内面ナデ。内面摩滅	灰黄 2.5Y7/2		石英、長石
31	〃		20.0	(5.6)	直線的に広がる。外面ナデ、内面摩滅	鈍橙 7.5YR6/4		石英、長石、角閃石
32	弥生土器 製塩土器		4.2	(9.1)	左右不対称。胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラケズリ・ナデ	鈍赤褐 5YR5/4	褐灰 7.5YR6/1	〃

第39図　SD308出土遺物（2）（S：1/4）



番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
33	縄紋土器 深鉢	20.2		(6.0)	外面に刻目突帯文、頸部篦描文	灰黄 2.5Y6/25	鈍黄橙 10YR7/2	細～粗砂
34	須恵器 蓋	4.2		(4.2)	回転ナデ。天井部外面は回転ヘラケズリ	灰白 N7/		微砂若干
35	〃			(4.3)	〃	灰 N6/		微砂、粗砂

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
36	打製石斧	8.6	5.2	1.4	67.0	サヌカイト	刃部が広く、基部が狭いバチ形を呈す。調整は粗い
37	〃	7.5	4.2	1.1	46.5	〃	基部上部を欠損。調整は粗い

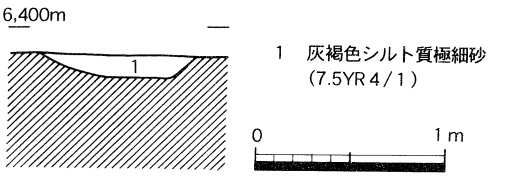
第40図　SD308出土遺物（3）（S：1/4、1/2）

ＳＤ309　（第41, 42図）

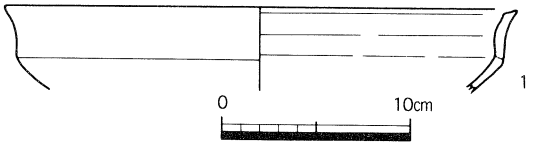
３工区中央やや西寄りにおいてＳＤ308の東岸上面で検出された溝である。調査区北側のみの検出である。

確認面のレベルは標高6.25ｍである。溝の方向は南南西－北北東を示し、検出された全長は約6.00ｍである。溝の幅は80cmを測り、深さは10cmである。断面は浅いＵ字形を呈する。底面のレベルは南から北へ緩やかに下がり、その比高差は５cmである。埋土は単一層である。

出土遺物　遺物の出土は非常に少なく、図化できたのは弥生土器高坏(1)のみである。



第41図　SD309断面図（S：1/40）



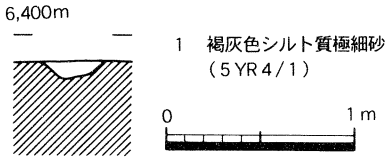
番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器 高杯	27.2		(4.4)	外面に稜。口唇部内面に稜を持ち、細くなる。摩滅	鈍黄褐 10YR5/3	褐 7.5YR4/6	石英, 長石, 角閃石

第42図　SD309出土遺物（S：1/4）

ＳＤ310　（第43図）

３工区ほぼ中央において単独で検出された溝である。調査区北側のみで検出され、南側ではＳＤ311に切られている。

確認面のレベルは標高6.25ｍである。検出することのできた溝の全長は6.20ｍであり、幅は40cmを測る。深さは10cmで、断面はＵ字形を呈する。溝の方向はほぼ南－北を示す。底面のレベルは南から北へ緩やかに低くなっており、その比高差は４cmである。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。



第43図　SD310断面図（Ｓ：１/40）

出土遺物　遺物の出土は非常に少なく、数点の弥生土器片のみであり、図化することができるものはなかった。

ＳＤ311　（第44～46図）

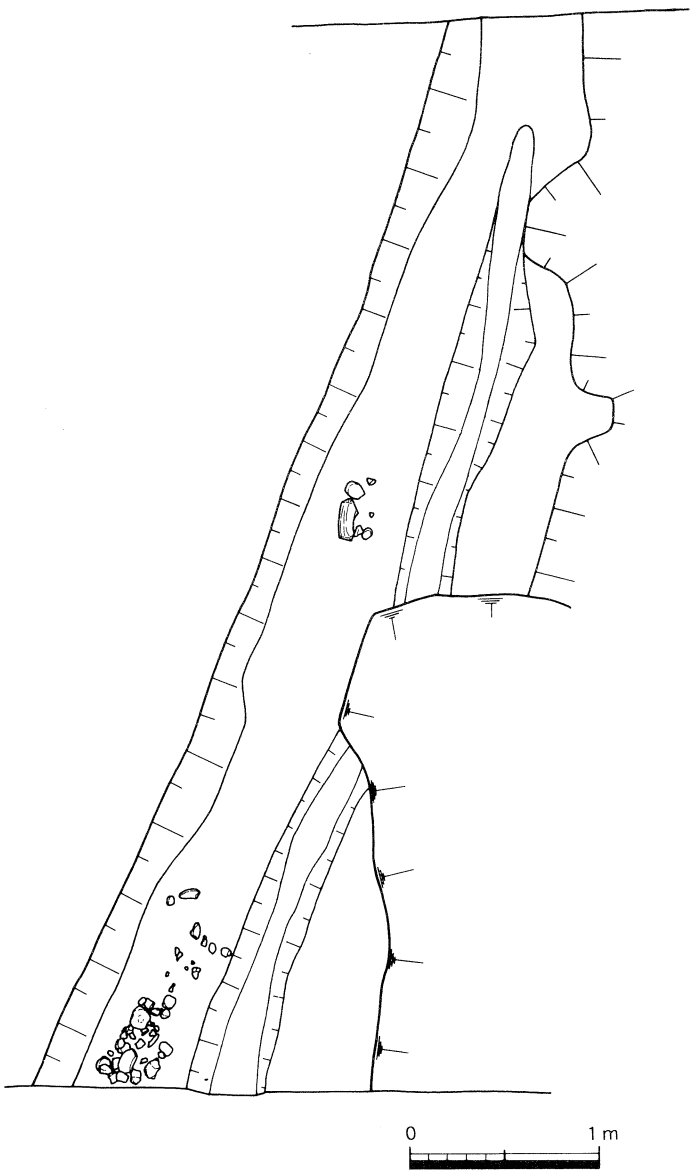
３工区ほぼ中央において検出された溝である。北端ではＳＤ312と合流し、ＳＫ304・311に切られている。本溝とＳＤ312との新旧関係は不明である。

南側の確認面のレベルは標高6.15ｍ、北側では6.25ｍである。北側にはコンクリートの畦道があり一部未調査である。溝の方向は南西－北東を示し、南側では平行する２条の溝に分流するが、北側で合流する。検出することのできた溝の全長は、南側約6.50ｍ、北側6.30ｍである。幅は合流部分で2.80ｍを測り、深さは20～50cmである。断面はU字形を呈するが、北側では西岸の落ち込みに段がある。底面のレベルは南から北へ緩やかに低くなっており、その比高差は27cmである。また、南側の２条の溝では東にある溝の底面のレベルが低い。埋土は８層に細分され、堆積状態により東側の溝が本流であると考えられる。

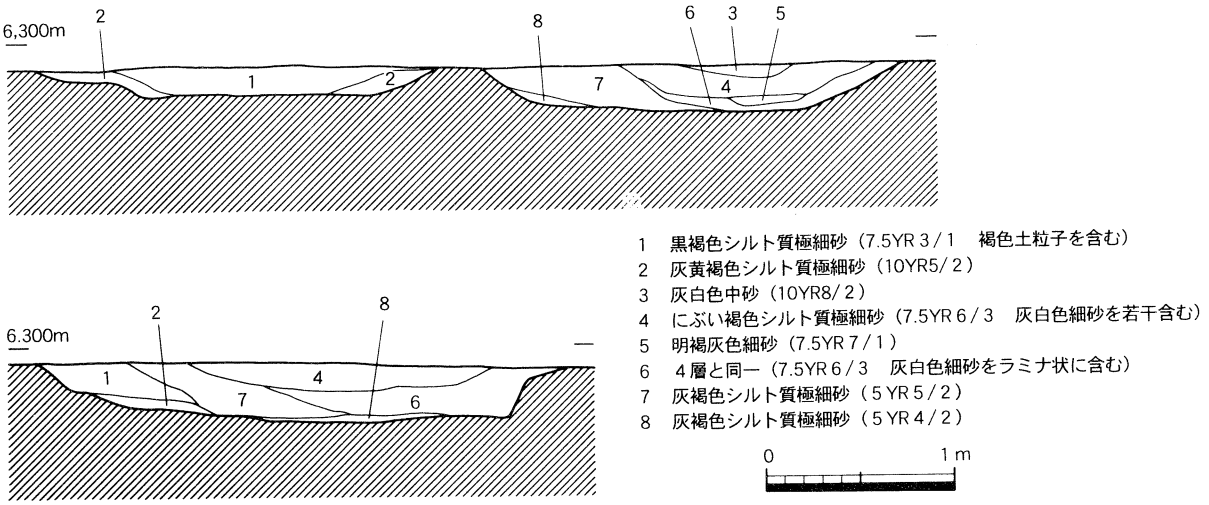
出土遺物　遺物の出土は溝の全域で見られるが、北側の段部分に土器が集中していた。遺物としては、弥生土器壺(1)、同甕(2～7)、同鉢(8～11)、同高坏(12)、その他の弥生土器片がある。

１は水平に広がる口縁部で、端部は上方に若干拡張する。

２は胴部上半にあたり、内面に指頭圧痕が施される。３～５はやや小型、６，７は大型である。３の底部外面はナデ、４は１方向からのヘラミガキが施される。



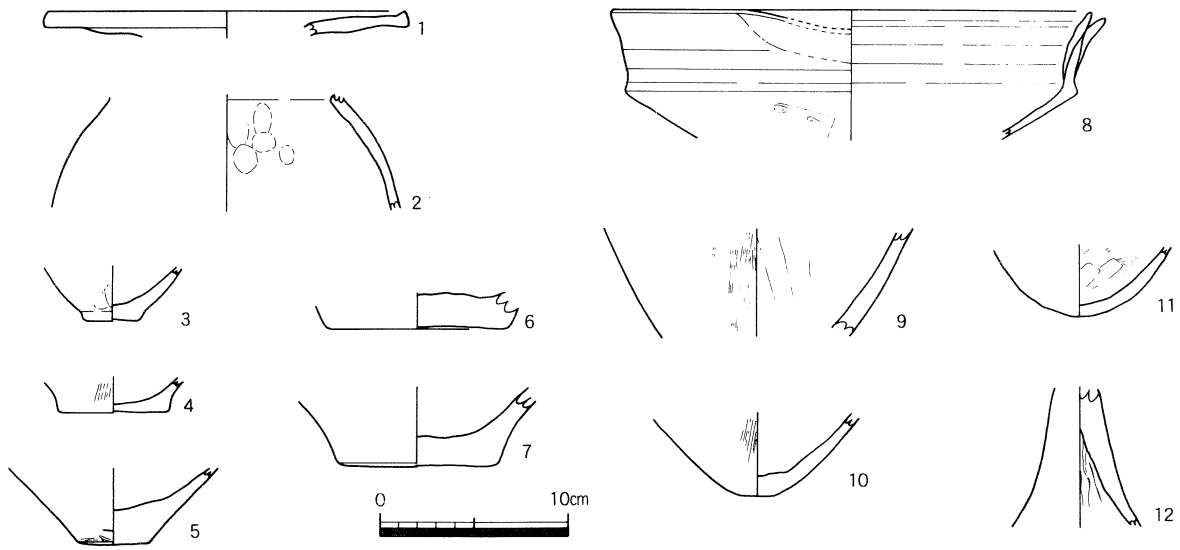
第44図　SD311出土遺物平面図（Ｓ：１/40）



第45図　SD311断面図（S：1/40）

8は片口を有する大型の鉢であり、形態は高坏に類似する。外面の稜を境に口縁部は外反気味に立ち上がる。口縁部はヨコナデ、体部外面にはヘラケズリが一部残存する。10は逆円錐形の鉢で、外面の一部にハケメが残存する。11は半球形で、内面にハケメ・ヘラケズリが残存する。

12は内面に絞り目がある。



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壷	19.0		(1.4)	口縁部はほぼ水平。口唇部は上方に少し拡張。ヨコナデ	鈍褐 7.5YR5/4		石英、長石、角閃石
2	弥生土器　甕			(6.1)	外面摩滅、内面指頭圧痕	灰白 2.5Y8/1	浅黄 2.5Y7/3	石英、長石
3	〃		2.8	(2.9)	外面ヘラケズリ後にナデ、内面摩滅	鈍橙 5YR7/4	灰白 10YR8/1	〃
4	〃		5.6	(1.9)	平底。外面ヘラミガキ、内面ナデ。底面1方向からのヘラミガキ	褐灰 7.5YR4/1	鈍褐 7.5YR5/3	石英、長石、角閃石
5	〃		3.8	(4.0)	底部厚い。外面ヘラケズリ。底面ナデ。外面に黒斑	明黄褐 10YR6/6	灰 N5/	〃
6	〃		9.2	(1.9)	底部は非常に厚い。内外面とも摩滅	鈍黄橙 10YR7/3	鈍黄橙 10YR6/3	〃
7	〃		8.6	(4.2)	底部は厚い。内外面とも摩滅	赤褐 2.5YR4/6	鈍橙 7.5YR6/4	細砂、礫多量
8	弥生土器　鉢	25.4		(6.8)	片口。外面に稜を有す。口縁部に若干の凹線。体部外面ヘラケズリ	明褐 7.5YR5/6		石英、長石、角閃石
9	〃			(5.7)	内外面とも摩滅するが、外面にハケメ、内面ヘラケズリが残る	橙 5YR6/6	褐灰 7.5YR5/1	石英、長石
10	〃		1.4	(4.4)	外面ハケメ、内面摩滅。底面無調整	浅黄 2.5Y7/3	灰白 2.5Y8/2	〃
11	〃			(3.7)	丸底。外面摩滅、内面ハケメ・ヘラケズリ	浅黄橙 10YR8/3		〃
12	弥生土器　高杯			(7.3)	外面摩滅、内面シボリメ	褐 7.5YR4/6	鈍褐 7.5YR6/3	長石、角閃石

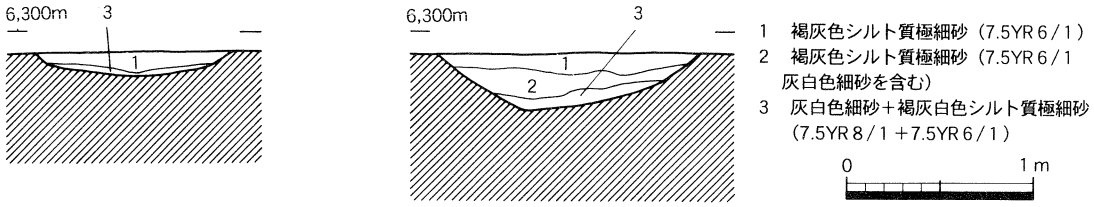
第46図　SD311出土遺物（S：1/4）

ＳＤ312　（第47図）

３工区中央においてＳＤ311と重複して検出された溝である。本溝とＳＤ311との新旧関係は不明であり、ＳＫ304に切られる。

北側の確認面のレベルは標高6.08m、南側6.20mである。溝の方向は南－北を示し、ＳＤ311と合流する部分では北北西に湾曲する。溝の長さは北側で約7.00m、南側で約9.20mを測る。溝の幅は1.15～1.40m、深さは10～30cmを測る。断面はU字形を呈する。底面のレベルは南から北に緩やかに低くなり、その比高差は27cmである。埋土は自然堆積の３層に分けられる。

出土遺物　数点の弥生土器片のみの出土であり、図化できるものはなかった。

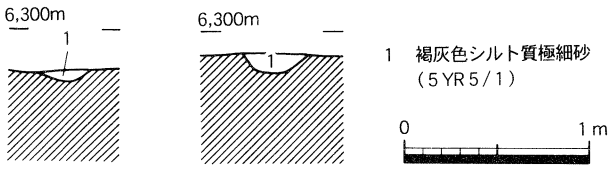


第47図　SD312断面図（S：1/40）

ＳＤ313　（第48図）

３工区中央やや東寄りにおいてＳＤ314と重複して検出された溝である。本溝はＳＤ314によって切られている。

北側の確認面のレベルは標高6.05m前後、南側は6.17m前後である。溝の方向は南南西－北北東を示し、ほぼ直線的に延びるが南端近くで若干西方に曲がる。溝の全長は北側で6.75m、南側で6.80mを測る。幅は30～40cmを測り、断面はU字形を呈する。底面のレベルは南から北へ緩やかに下がり、その比高差は約10cmである。埋土は単一層である。



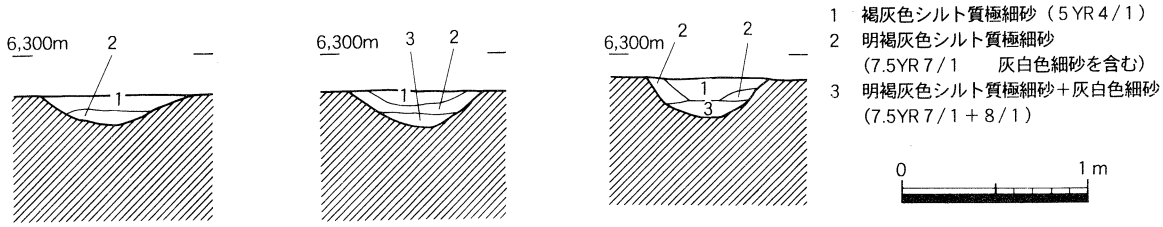
第48図　SD313断面図（S：1/40）

出土遺物　遺物は数点の弥生土器片のみであり、図化できるものはなかった。

ＳＤ314　（第49，50図）

３工区中央やや東寄りにおいて検出された溝であり、ＳＤ313を切る。

北側の確認面のレベルは標高6.05m前後、南側は6.17m前後である。溝の方向は南西－北東を示し、南側で若干西方に湾曲するがほぼ直線的である。検出された溝の全長は、北側で7.20m、南側で7.00mを測る。幅は65～80cm、深さは10～16cmである。断面はU字形を呈する。底面のレベルは南から北へ緩やかに低くなっており、その比高差は17cmである。埋土は３層であり、自然堆積である。底面直



第49図　SD314断面図（S：1/40）

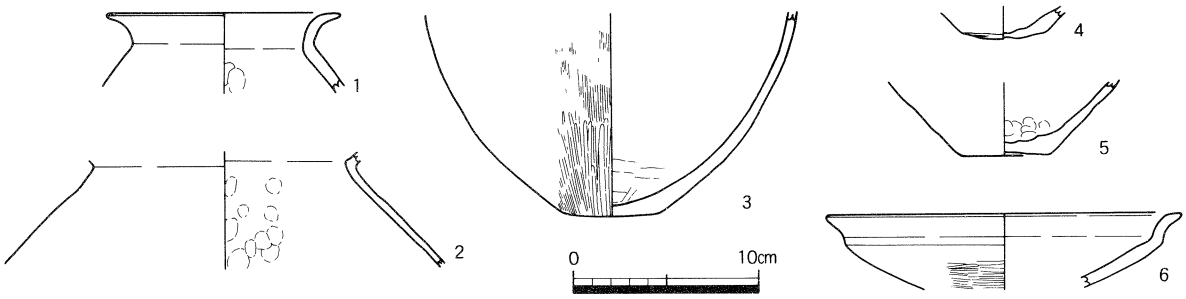
上には細砂が含まれる。

出土遺物　埋土中からの出土遺物は、弥生土器壺(1)、同甕(2～5)、同高坏(6)、その他の弥生土器片がある。

1は胴部から強く外反し、口唇部はほぼ水平に広がる。口縁部はヨコナデ、胴部内面は指頭圧痕の後にナデが施される。外面は摩耗している。

2は胴部上半であり、内面は指頭圧痕が施される。3は胴部中位から底部であり、外面はハケメ・ナデ、下位はヘラミガキ、内面は部分的にヘラケズリが施される。底部外面は全面ナデである。

6は器高のやや浅い高坏で、明瞭な稜を境に口縁部が外反する。口唇部は若干水平に広がる。口縁部はヨコナデ、体部外面は横方向のヘラミガキ、内面はナデが施される。



番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	弥生土器　壺	12.6		(4.3)	口唇部はほぼ水平に広がる。口縁部ヨコナデ。胴部内面指頭圧痕	鈍黄 2.5Y6/3	鈍橙 7.5YR6/4	石英、長石
2	弥生土器　甕			(6.2)	外面摩滅。内面指頭圧痕。口縁部ヨコナデ	褐 7.5YR4/6		石英、長石、角閃石
3	〃		5.0	(10.7)	外面上半はハケメ・ナデ、下半ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。底面ナデ	灰黄褐 10YR6/2	明赤褐 5YR5/6	石英、長石、金雲母
4	〃		4.6	(1.7)	外面ナデ。底面ヘラケズリ	黒 N1.5/	鈍黄橙 10YR6/3	石英、長石、角閃石
5	〃		4.8	(3.8)	外面摩滅。内面の底部付近は指頭圧痕	鈍橙 7.5YR6/4	明赤褐 5YR5/6	石英、長石
6	弥生土器　高杯	19.2		(4.0)	器高やや浅く、口唇部水平。体部外面ヘラミガキ、内面ナデ。	〃		〃

第50図　SD314出土遺物（S：1/40）

ＳＤ315　（第37，51図）

3工区中央やや西寄りにおいて検出された溝であり、ＳＤ308と重複する。調査区南側にのみ検出される。本溝がＳＤ308の上面を掘り込んでいる。

確認面のレベルは標高6.17m前後である。溝の方向は南－北を示す。検出することができた溝の全長は約7.70mを測り、幅は0.60～1.10mである。幅は南端から北方になるにしたがい次第に広くなっている。深さは約15cmで、断面はU字形を呈する。底面のレベルはほぼ平坦であり、標高6.00m前後である。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

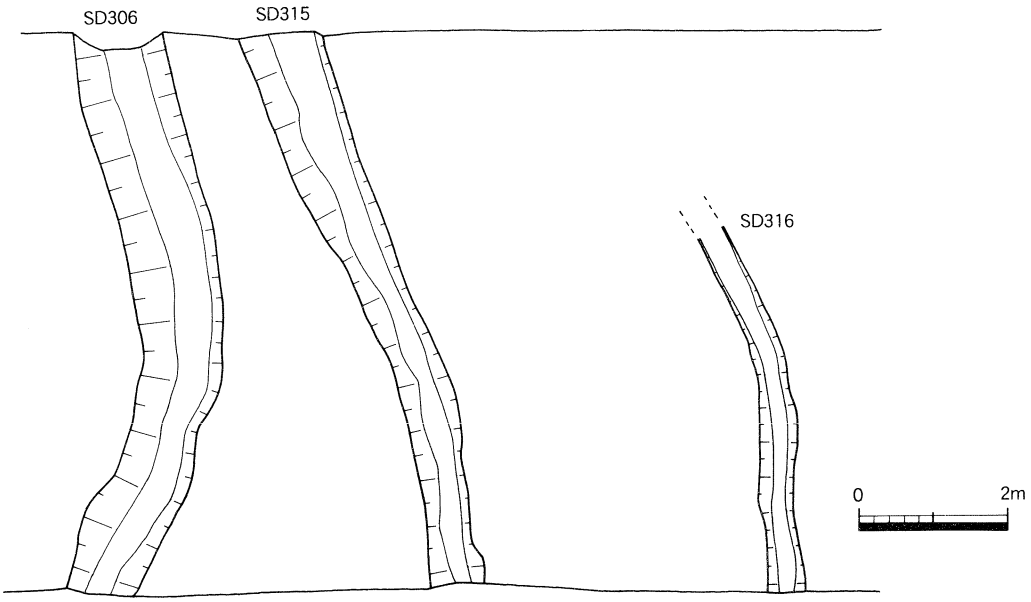
出土遺物　遺物は数点の弥生土器片のみであり、図化できるものはなかった。

ＳＤ316　（第37，51図）

3工区中央やや西寄りにおいて検出された溝であり、ＳＤ308の東岸上面を掘り込む。本溝はＳＤ308より新しい遺構である。調査区南側のみに検出された。

確認面のレベルは標高6.17m前後である。溝の方向は南－北を示し、若干湾曲する。検出することのできた溝の全長は約4.90mを測り、北端は削平されている。幅は40～50cm、深さ8cmを測り、断面は浅いU字形を呈する。底面のレベルは北から南に若干低くなっている。

出土遺物　遺物の出土は数点の弥生土器片のみであり、図化できるものはなかった。



第51図　SD306、315、316平面図（S：1/100）

2）　近世

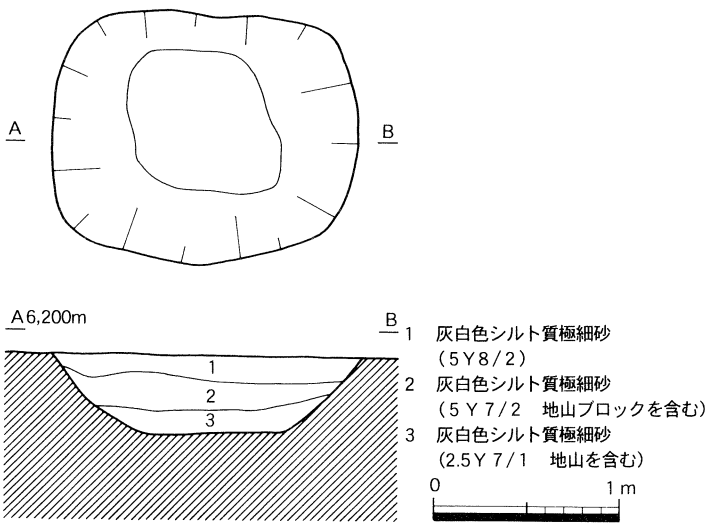
1　土坑

SK301　（第52図）

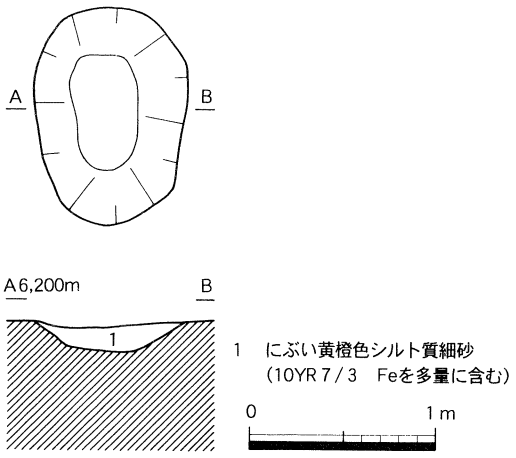
3工区北東部に単独で検出された土坑である。SD314とSX301のほぼ中間に位置する。

確認面のレベルは標高6.08m前後である。平面形は隅丸方形を呈し、長軸を東西方向に持つ。長辺は1.65m、短辺1.30mを測り、深さは約40cmである。底面中央がやや凹むがほぼ平坦であり、不整な方形をなす。埋土は灰白色シルト質極細砂であり、包含物によって3層に細分される。埋土中に地山のブロックを含み、人為的に埋められたと考えられる。

出土遺物　遺物の出土は数点の陶磁器片・土師質土器片のみであり、図化できるものはなかった。



第52図　SK301平・断面図（S：1/40）



第53図　SK302平・断面図（S：1/40）

ＳＫ302　（第53図）

３工区北東部において単独で検出された土坑である。ＳＤ313・ＳＫ305の西側に位置する。

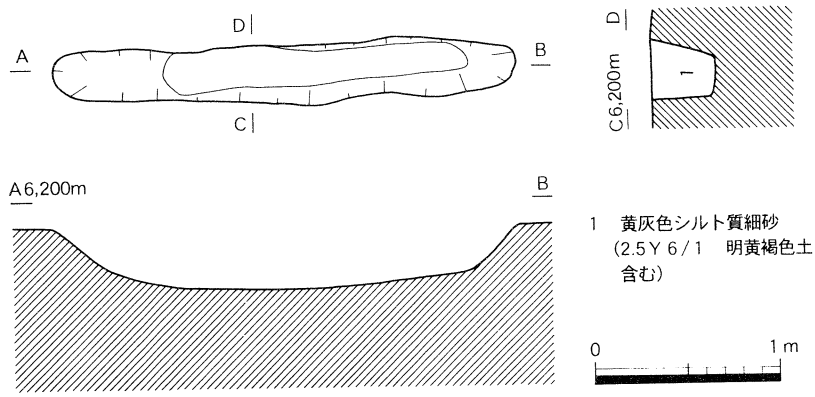
確認面のレベルは標高6.08ｍである。平面形は円形を呈し、南北径1.15ｍ、東西径0.80ｍを測る。深さは15cmであり、掘り込みは緩やかである。底面は60×35cmを測り、ほぼ平坦である。埋土は鈍い黄橙色シルト質細砂の単一層である。

出土遺物　遺物の出土はなかった。

ＳＫ303　（第54図）

３工区中央部の北側において単独で検出された土坑である。ＳＤ312の東側に位置する。

確認面のレベルは標高6.07ｍ前後である。平面形は東西方向に細長い形を呈し、長径は2.48ｍ、短径0.30ｍ前後を測る。深さは約35cmである。底面はやや西側に寄っており、長さは1.63ｍである。南・北壁はほぼ垂直に落ち込み、東西の掘り込みは緩やかである。底面は中央部がやや下がっている。埋土は明黄褐色シルト質極細砂を含む黄灰色シルト質細砂の単一層である。



第54図　SK303平・断面図（S：1/40）

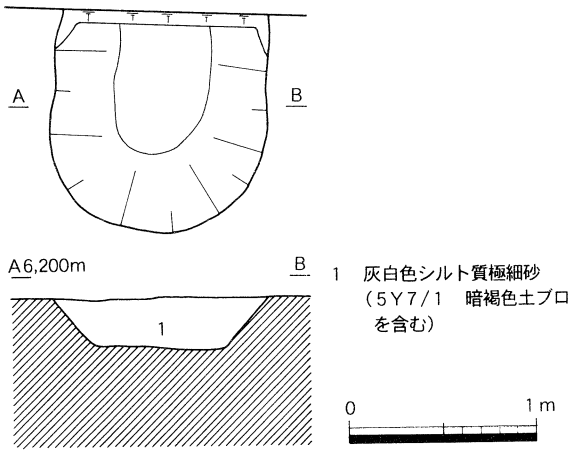
出土遺物　遺物は数点の土師質土器片のみであり、図化できるものはなかった。

ＳＫ304　（第55図）

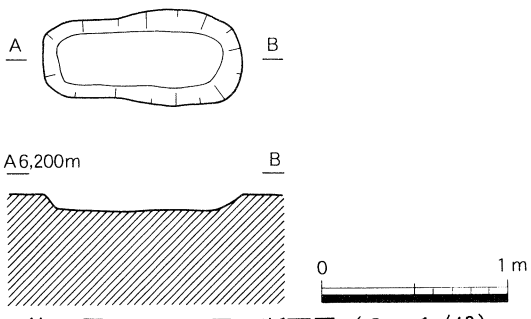
３工区中央の北側において検出された土坑である。西側はコンクリートによって削平されている。

確認面のレベルは標高6.20ｍである。平面形は円形を呈し、東西径1.10ｍ以上、南北径1.15ｍを測る。深さは30cmであり、掘り込みは緩やかである。底面は平坦である。埋土は暗褐色土をブロック状に含む灰白色シルト質極細砂の単一層であり、人為的に埋められたと考えられる。

出土遺物　遺物は数点の陶磁器片・土師質土器片のみである。



第55図　SK304平・断面図（S：1/40）



第56図　SK305平・断面図（S：1/40）

ＳＫ305　（第56図）

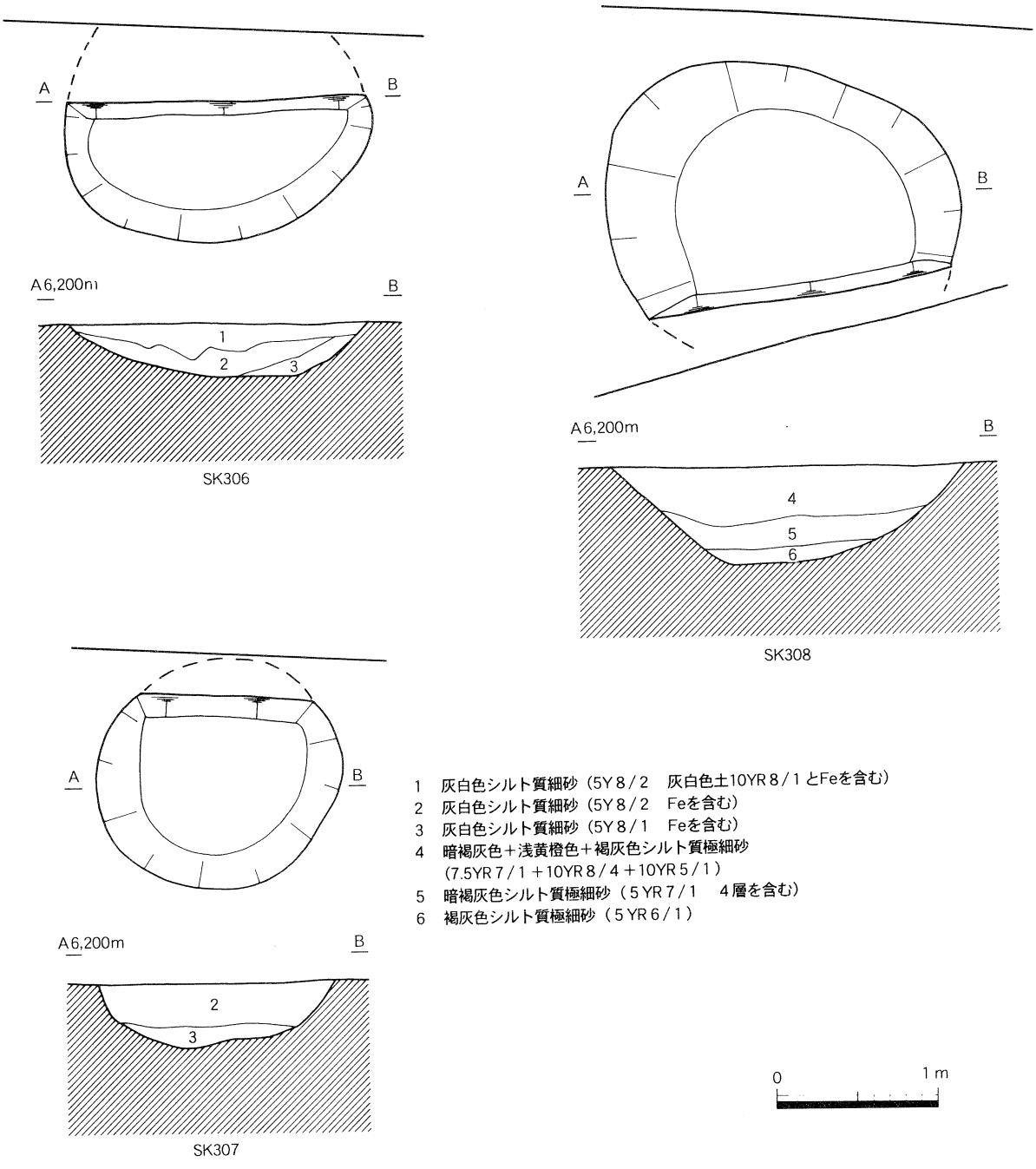
３工区北東部において単独で検出された土坑であり、ＳＤ313の西側でＳＫ302の北東に位置する。

確認面のレベルは標高6.10ｍである。平面形は南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、長軸1.05ｍ、短軸0.40～0.50ｍを測る。深さは９cmで、底面は平坦である。埋土はにぶい黄橙色シルト質細砂の単一層である。

出土遺物　遺物の出土は全くなかった。

ＳＫ306　（第57図）

３工区南東隅において単独で検出された土坑であり、ＳＫ307・308の西側に位置する。



第57図　SK306～308平・断面図（Ｓ：１/40）

確認面のレベルは標高6.05ｍである。北側は現有道路を保護する必要から未調査であり、土坑の南半分のみ検出された。平面形は円形を呈し、その規模は直径1.85ｍを測る。深さは30cmで、掘り込みは緩やかである。底面は若干東に片寄っている。埋土は３層に分かれ、自然堆積である。

出土遺物　遺物の出土は非常に少なく、数点の陶磁器片のみである。

ＳＫ307　（第57図）

３工区南東隅において単独で検出された土坑であり、ＳＫ306と308の中央に位置する。土坑の北端は現有道路のため未調査である。

確認面のレベルは標高6.05ｍである。平面形は円形を呈し、直径は1.45ｍを測る。深さは40cmで、掘り込みは緩やかである。埋土は若干色の異なる灰白色シルト質細砂の２層である。

出土遺物　遺物は数点の陶磁器片のみである。

ＳＫ308　（第57図）

３工区南東隅において単独で検出された土坑であり、ＳＫ307の東側に位置する。土坑の南側は調査区外となっている。

確認面のレベルは標高6.05ｍ前後である。平面形は不整な円形を呈し、直径は2.20ｍを測る。深さは58cmを測り、掘り込みは緩やかである。底面の中央が窪み、20cm大の石が数個出土した。埋土は３層に細分されるが、上位２層はほぼおなじであり、３種類の異なる土がブロック状に混入しており、人為的に埋められたと考えられる。

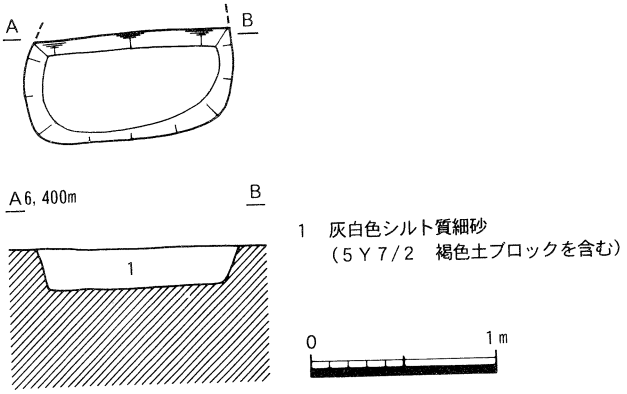
出土遺物　遺物は数点の陶磁器片のみであり、図化できるものはなかった。

ＳＫ309　（第58図）

３工区中央やや東寄りにおいて単独で検出された土坑であり、ＳＤ312と314の中間に位置する。

確認面のレベルは標高6.20ｍである。土坑の北側は現有道路のため未調査であり、検出された範囲で平面形は隅丸方形を呈する。その規模は1.10ｍ、深さは20cmを測る。掘り込みは垂直に近い。埋土は単一層であり、褐色土のブロックを多量に含み、人為的な埋め戻しであろう。

出土遺物　遺物の出土はなかった。



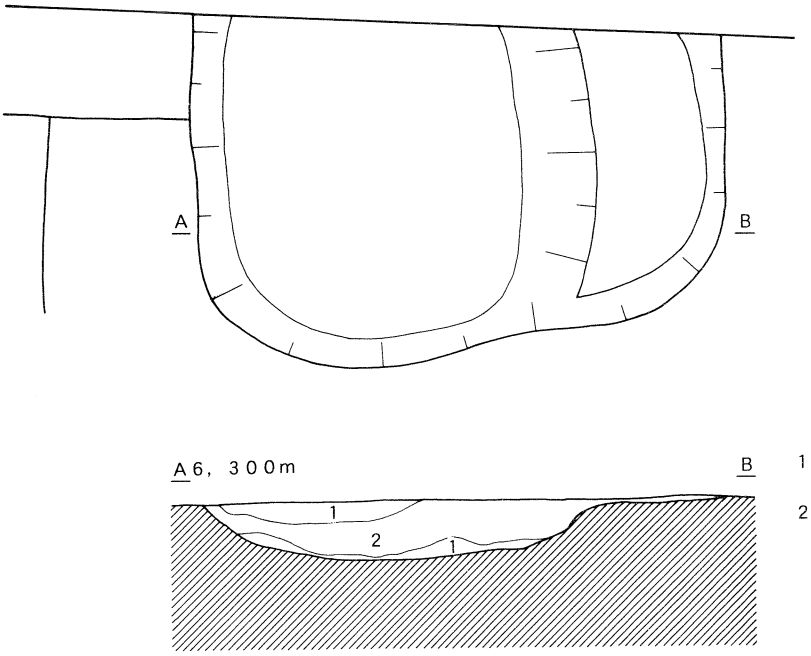
第58図　SK309平・断面図（S：1/40）

ＳＫ310　（第59図）

３工区ほぼ中央において検出された土坑である。ＳＤ311・ＳＫ311の東側に位置する。土坑の北側は現有道路のため未調査である。

確認面のレベルは標高6.16ｍ前後である。平面形は隅丸方形を呈し、その規模は2.80ｍを測る。底面は西に片寄っており、東側に浅い段を有する。最深部の深さは36cmを測る。掘り込みは緩やかである。埋土は、上層と最下層が同じ土であり、埋土中に褐色土ブロックが多量に混入しており、人為的に埋め戻されたと考えられる。

出土遺物　遺物の出土は非常に少なく、数点の陶磁器片のみである。



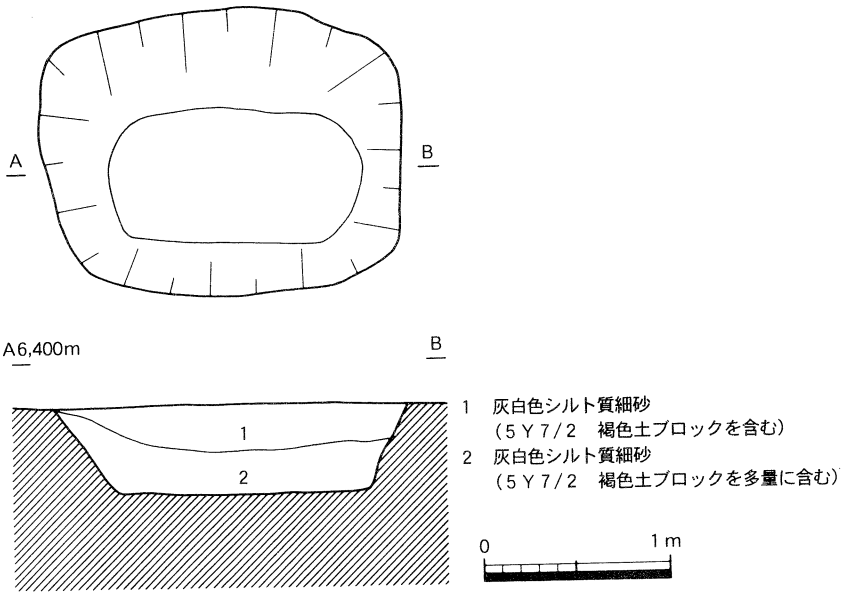
第59図　SK310平・断面図（S：1/40）

ＳＫ311　（第60，61図）

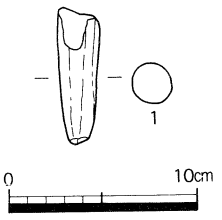
３工区ほぼ中央において検出された土坑であり、ＳＤ311を切っている。

確認面のレベルは標高6.18mである。平面形は東西方向に長い隅丸長方形を呈し、その規模は1.93×1.53mを測る。北西隅が若干張り出す。深さは50cmである。底面は南側に片寄っており、ほぼ平坦である。掘り込みはやや急傾斜である。埋土は若干内容物の異なる２層の白灰色シルト質細砂であるが、共に褐色土ブロックを多量に含み、人為的に埋められたと考えられる。

出土遺物　遺物の出土は非常に少なく、数点の土師質土器片や陶磁器片のみである。実測できたのは土師質土器土鍋の脚部(1)だけである。



第60図　SK311平・断面図（S：1/40）



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
1	土師器　土鍋				脚主軸方向のヘラナデ	橙 7.5YR6/6		微～細砂

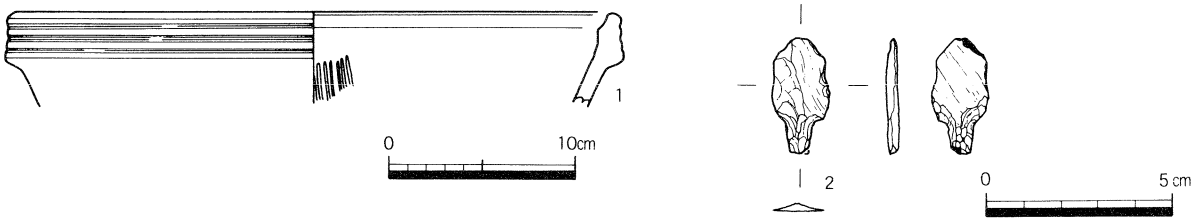
第61図　SK311出土遺物（S：1/4）

ＳＫ312　（第62図）

３工区中央やや東寄りにおいて単独で検出された土坑であり、ＳＫ302の西側に位置する。

確認面のレベルは標高6.09ｍである。平面形は不整な楕円形を呈し、その規模は1.30×0.80ｍを測る。深さは12cmで、掘り込みは緩やかである。底面は若干凸凹であり、礫が数個検出された。埋土は白灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　遺物の出土は少なく、数点の土師質土器片・陶磁器片である。図化することができたのは、備前焼擂り鉢(1)とサヌカイト製の石鏃(2)の２点である。



番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	備前焼　擂鉢	32.0		(5.0)	口縁部を上下に拡張し、外面に３条の凹線が入る	明赤褐 2.5YR6/6		微砂若干

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
2	石　鏃	3.1	2.5	0.2	1.4	サヌカイト	有基式。基部は細かい調整だが、両側縁は粗い

第62図　SK312出土遺物（Ｓ：１/４、１/２）

ＳＫ313　（第63，64図）

３工区中央やや西寄りにおいて検出された土坑であり、ＳＫ311とＳＤ311の西側に位置する。本土坑がＳＤ311を切っている。

確認面のレベルは標高6.17ｍ前後である。平面形は円形を呈し、その規模は2.27ｍを測る。土坑の北東部が若干張り出し、やや不整形となっている。深さは50cmを測り、底面はほぼ平坦である。掘り込みは一応に緩やかである。埋土は４層に細分されるが、上位の２層によって土坑の大部分が埋められている。上層の埋土には２種類以上の異なる土が混入しており、人為的な埋め戻しが行われたと考えられる。

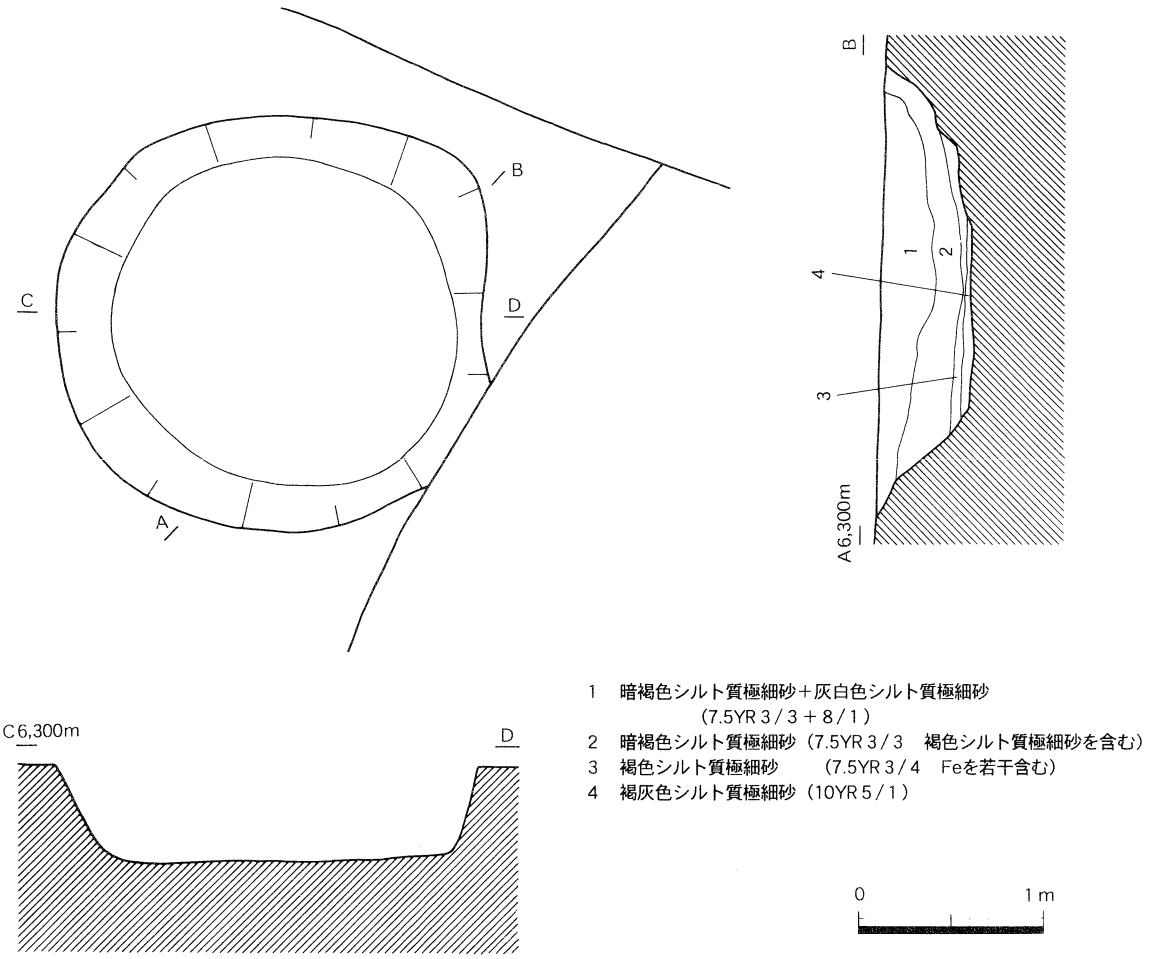
出土遺物　遺物としては土師質土器・陶磁器が中心をなすが、その大部分は小片であり、図化することができたのは混入遺物の須恵器蓋（1,2）のみである。

２　性格不明遺構

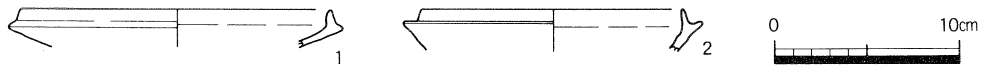
ＳＸ301　（第65図）

３工区北東側において検出された大規模な落ち込みである。

確認面のレベルは標高5.95ｍ前後である。完全に検出することができなかったので、平面形は不明であるが、検出された範囲では西側に頂点があり、反対の東側に底辺を持つ不整な三角形を呈すると推定される。掘り込みは非常に緩やかで、深さは40cmを測る。南端部ではさらに一段深くなっており、その差は40cm以上である。埋土は水平堆積をなし、７層に細分される。それぞれの層は土壌層と非土壌層に分けることが可能である。埋土を詳述すると、上位より明オリーブ灰色シルト質極細砂・灰白色シルト質極細砂４層・褐灰色シルト質極細砂・灰白色シルト質極細砂＋淡黄色細砂であり、非土壌層には褐鉄鉱の沈澱が見られる。



第63図　SK313平・断面図（S：1/40）



番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	須恵器 杯身	16.6		(2.0)	回転ナデ。口縁部は短かく内傾	灰 N6/		微砂若干
2	〃	14.0		(2.3)	〃	灰 7.5Y4/1	灰 N6/	〃

第64図　SK313出土遺物（S：1/4）

出土遺物　遺物は土師質土器皿(1)、同杯(2)、同土鍋(8～10)、土師器杯(3)、瓦器椀(5)、瓦質土器杯(4)、同椀(6, 7)、磁器碗(11, 12)、石鏃(13)がある。

1は器高の低い小皿であり、体部の立ち上がりは緩やかである。

2の底部は回転ヘラ切りによる切り離しである。3，4は直線的な体部である。

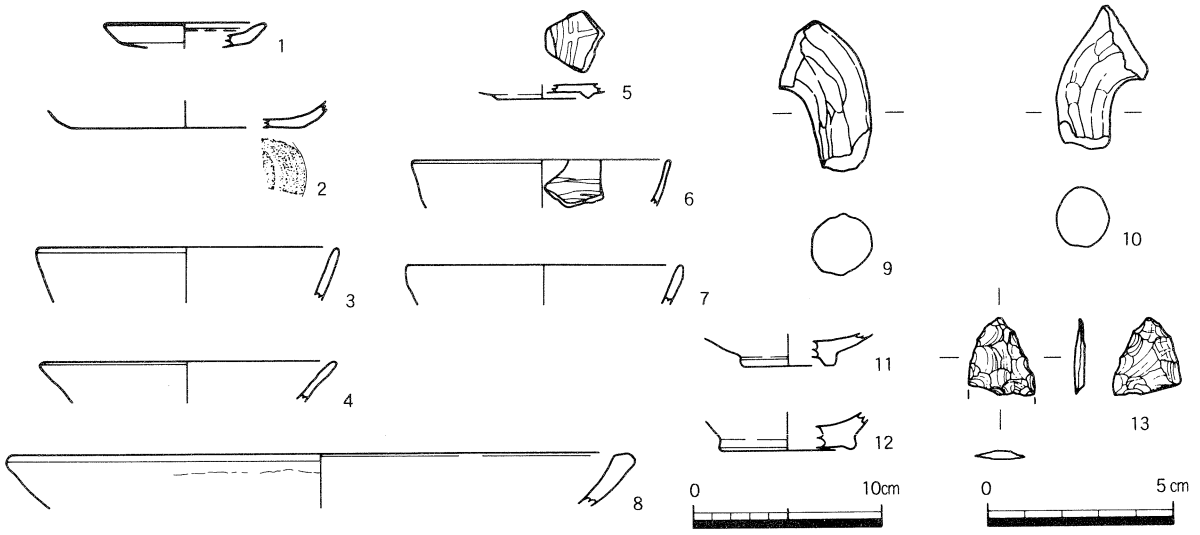
5，6は内面にヘラミガキが施される。

11，12は低い高台を持つ底部である。

13はサヌカイト製の石鏃の先端部であり、混入した遺物である。

3）　包含層出土遺物　（第66図）

1は若干内碗する体部の土師質土器碗である。内外面とも摩滅している。2は土師質土器こね鉢の小片であり、外面の稜を境に口縁部が内湾する。

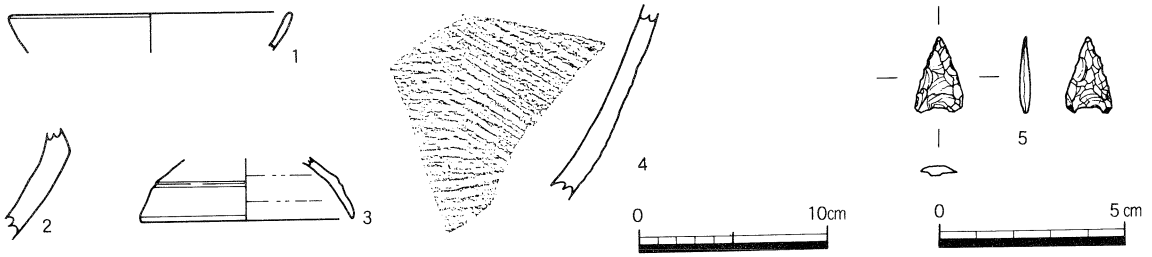


番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
1	土師質土器 皿	8.6	7.0	(1.3)	全面摩滅	鈍橙 7.5YR6/4	褐 7.5YR4/6	微～細砂
2	土師質土器 杯		12.4	(1.4)	回転ナデ。底面は回転ヘラ切り	鈍黄橙 10YR7/4		細砂
3	土師器 杯	16.0		(2.9)	全面摩滅	鈍橙 5YR7/4	淡橙 5YR8/4	微砂若干
4	瓦質土器 杯	15.8		(2.2)	回転ナデ	淡黄 2.5Y8/3	灰白 2.5Y8/2	〃
5	瓦 器 椀		5.0	(0.8)	貼付高台。内面ヘラミガキ	黒 N2/		〃
6	瓦質土器 椀	11.8		(2.5)	回転ナデ。内面ヘラミガキ	灰 10Y6/1	灰白 7.5Y7/1	〃
7	〃	14.8		(2.1)	回転ナデ。摩滅	ｵﾘｰﾌﾞ黒 10Y3/1	灰白 10Y8/1	〃
8	土師質土器 土鍋	32.0		(2.8)	若干内弯する口縁部。輪積み痕。内面ナデ	淡黄橙 10YR8/4	鈍黄橙 10YR7/4	微～粗砂
9	〃				脚主軸に沿ったヘラケズリ、ナデ	橙 7.5YR6/6		細～粗砂
10	〃				〃	暗褐 7.5YR3/4		〃
11	磁 器 椀		5.0	(2.2)	逆台形の高台。見込みに黄緑色の釉 (地)	灰白 2.5Y8/1		微砂若干
12	〃		6.8	(2.4)	低い高台。底部の器壁は厚い。見込みに透明な釉薬	〃		〃

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
13	石 鏃	2.1	1.8	0.4	1.0	サヌカイト	基部を欠損。細かい調整

第65図 SX301出土遺物（S：1/4、1/2）

3は須恵器蓋で、外面に沈線を有する。4は須恵器甕で、外面に平行タタキが施される。
4は小型の凹基式石鏃で、重さ0.6ｇである。



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
1	土師質土器 椀	15.0		(2.1)	内外面とも摩滅	灰白 10YR8/2		微砂若干
2	土師質土器こね鉢			(5.4)	外面ナデ・ヘラ削り。内面ナデ	鈍黄橙 10Y7/4	橙 5YR6/6	微～細砂多量
3	須恵器 蓋	11.4		(3.3)	回転ナデ。外面に若干の沈線	灰 10Y6/1		微砂若干
4	須恵器 甕			(10.3)	外面は平行タタキメ、内面ナデ	灰 N51	灰 N61	粗砂

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
5	石 鏃	1.9	1.3	0.3	0.6	サヌカイト	凹基式。小形。細かい調整

第66図 3工区包含層出土遺物（S：1/4、1/2）

4　4工区

4工区は本遺跡の東端に位置し、3工区との境には現有道路と古代の山田郡・香川郡の郡界に比定されている水路がある。南側には、現在埋め立てられて高松市立木太中学校と（仮称）川原池運動場となっているが、高松平野の特徴である溜池のひとつのガラ池があった。

4工区の全長は約100mであるが、西側の道路と東側の水路を保全する必要から調査区をやや狭めて約93mとした。幅は南側に現有道路があるため15mであるが、東側になるにしたがい道路が南に曲がっているので幅は次第に広くなっている。東端では約22mを測る。調査以前の水田面の標高は5.50～5.70mであり、3工区と比較すると約80cm低い水田である。4工区内での標高は西側から東側に向かって緩やかに低くなっている。

遺構は4工区のほぼ全域に検出され、古代～中世と近世の2時代に分かれている。古代～中世初めの遺構としては、3面の水田と溝がある。3面の水田は調査区中央から西端にかけての旧河道の埋没してできた微低地において検出された。溝は東側で1本のみ検出された。近世の遺構は、掘立柱建物・溝・土坑・ピット群がある。土坑は調査区南壁に沿って多数検出された。調査区中央と東端では明確な遺構でない性格不明の落ち込みが検出された。

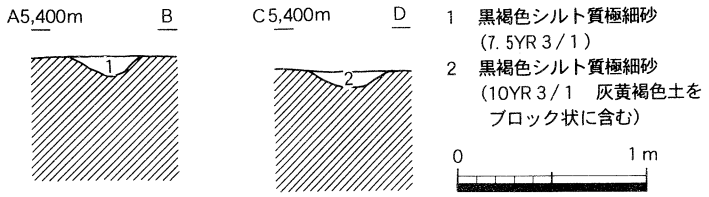
4工区の基本的な土層の堆積は、上層より現水田耕作土・近世条里型水田の白灰色シルト質極細砂・中世～近世の条里型水田の暗灰色シルト質極細砂であり、ほぼ水平堆積をなしている。調査区東側には中世～近世の水田の堆積は見られない。地山は高松平野で一般的な淡黄色シルトであるが、微低地には旧河道堆積層があり約80cm下がると河床に達する。

1）　古代～中世

1　溝

SD401　（第67，68図）

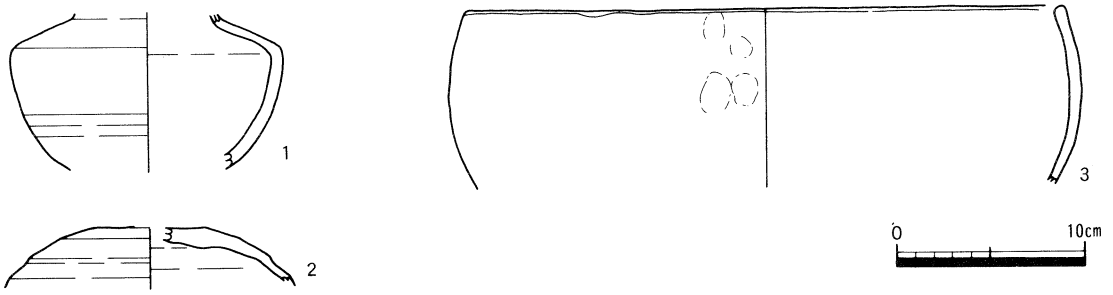
4工区東側において検出された溝で、SD402に切られている。



第67図　SD401断面図（S：1/40）

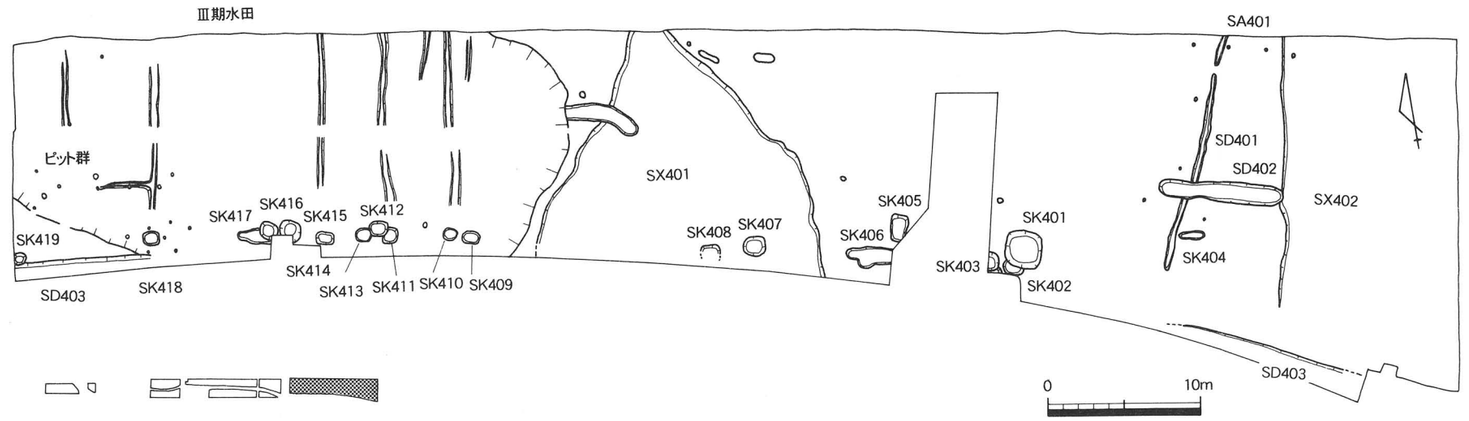
確認面のレベルは標高5.19～5.25mである。溝の方向は南南西－北北東を示し、ほぼ直線である。北側に約55cmの長さで途切れている部分がある。溝の幅は40cm、深さは10cmを測る。断面は浅いU字形を呈する。底面のレベルは約4cmの差で南から北に下がっている。

出土遺物　遺物は須恵器壺(1)、同蓋(2)、土師器鉢(3)、その他の土師質土器片である。

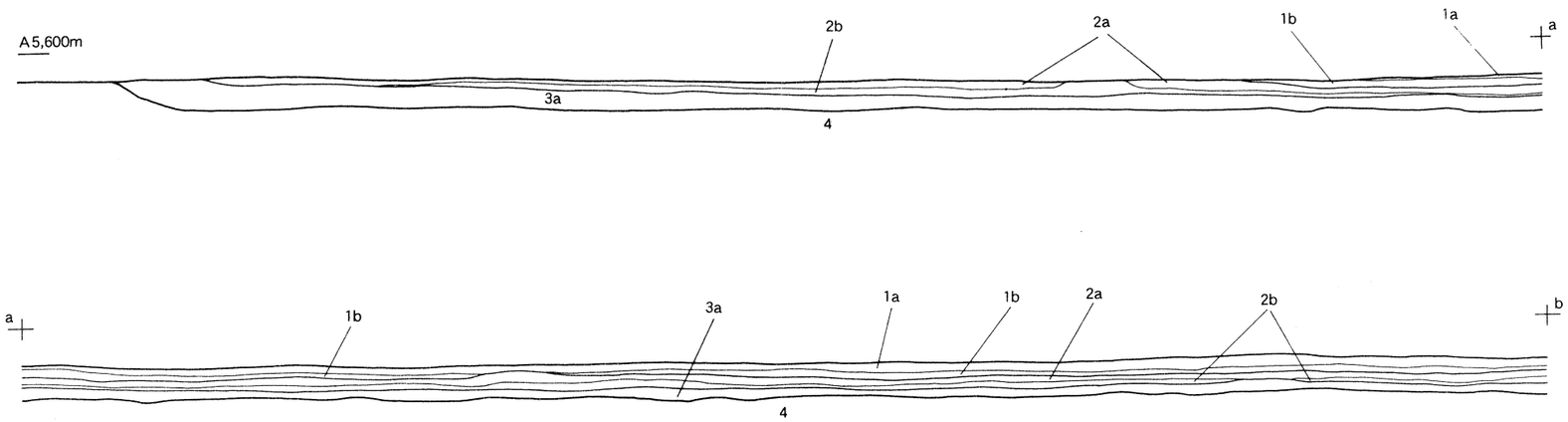


番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
1	須恵器　壺			(8.2)	肩が強く張る。回転ナデ。胴部外面下半は回転ヘラケズリ	灰 N6/	灰白 N7/	微砂若干
2	須恵器　蓋			(3.1)	回転ナデ。天井部外面は回転ヘラケズリ	〃	〃	微～細砂
3	土師器　鉢	32.0		(9.5)	球形の胴部。外面指頭圧・ナデ、内面ナデ。剥離	鈍赤褐 5YR5/4	黒褐 5YR3/1	細～粗砂

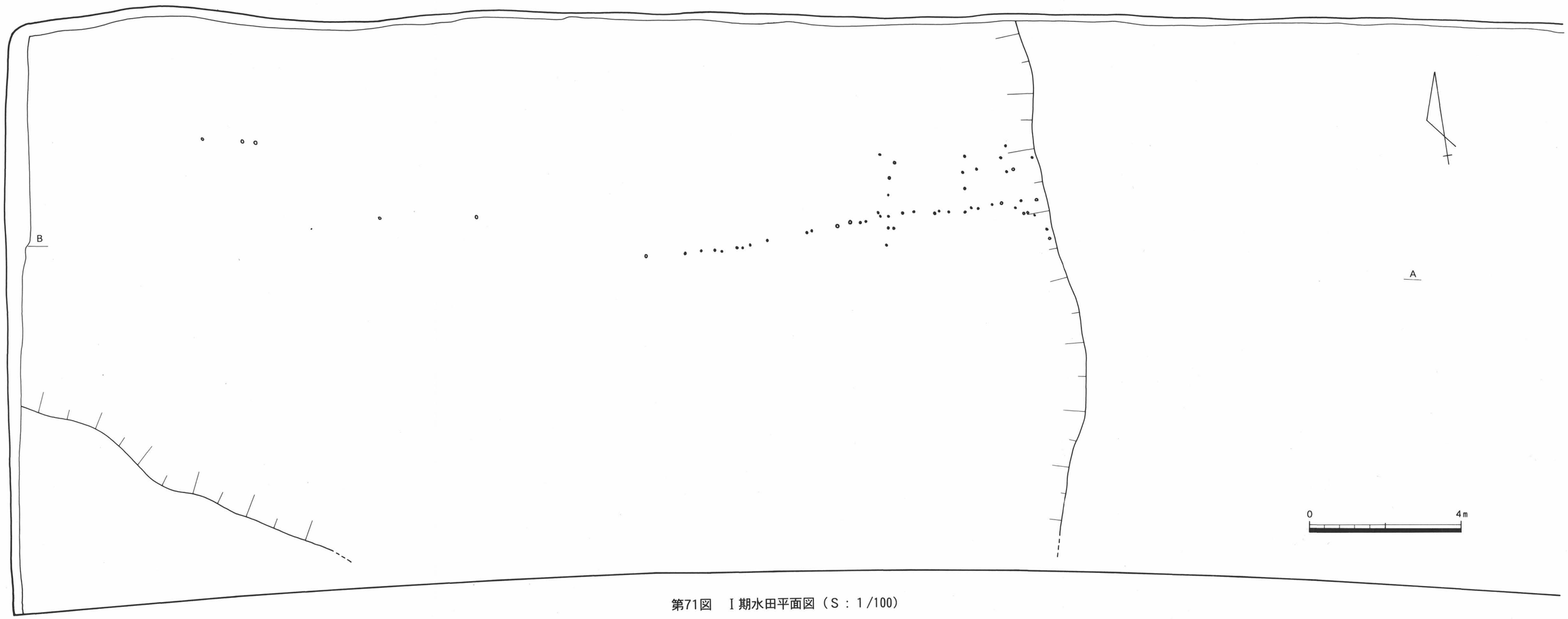
第68図　SD401出土遺物（S：1/4）



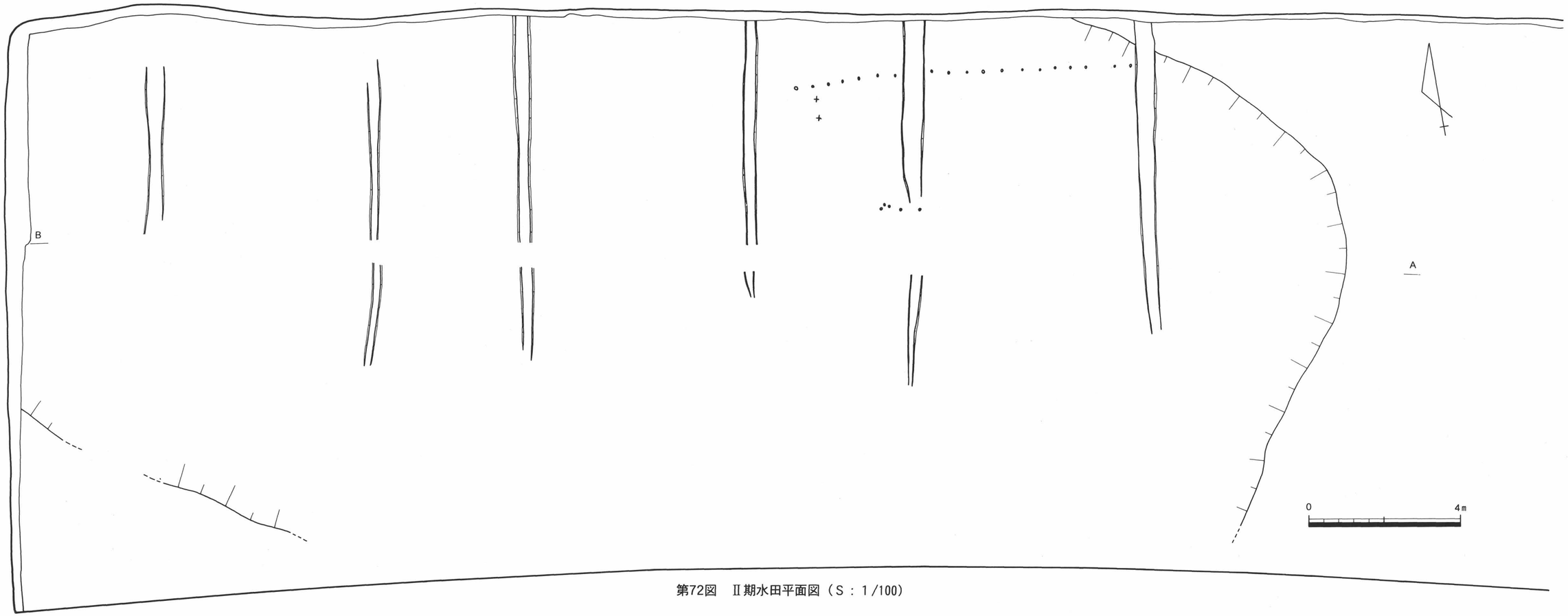
第69図　４工区遺構配置図（Ｓ：１/400）



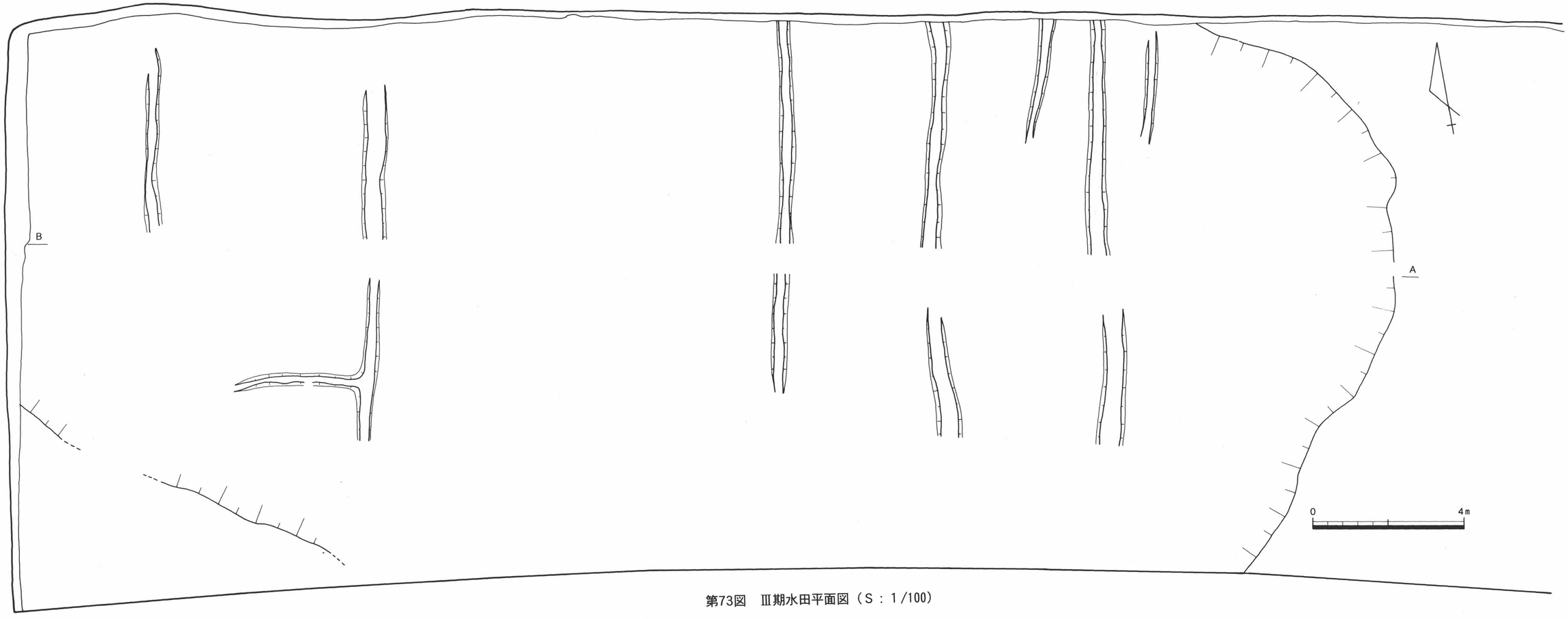
第70図　Ⅰ～Ⅲ期水田断面図（Ｓ：1/40）



第71図　Ⅰ期水田平面図（S：1/100）



第72図　Ⅱ期水田平面図（S：1/100）

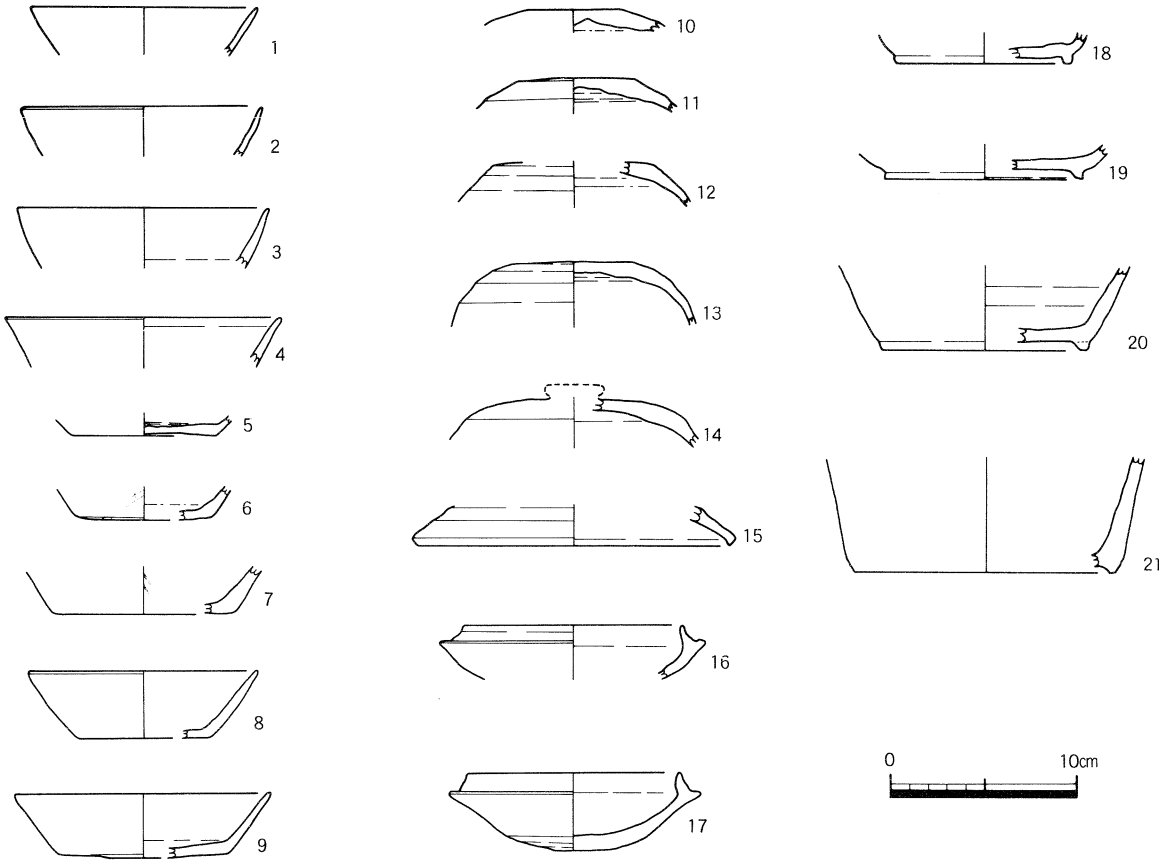


第73図　Ⅲ期水田平面図（S：1/100）

2　水田　（第70～77図）

4工区中央部から西側にかけて検出された水田であり、Ⅰ～Ⅲ期の3面の水田が確認された。水田は旧河道の埋没した微低地のみに残存するが、条里型水田の形態から考えると本来は周辺に広がっていたであろう。以下、各期ごとに記述する。

Ⅰ期水田　（第70，71，74，75図）　4工区西端から約28m東までの範囲で検出された水田であり、調査区南西隅は地山の上がる微高地となっており、水田は検出されなかった。水田の耕作土は土壌層



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
1	須恵器　杯	12.4		(2.6)	直線的な体部。回転ナデ	灰白 N7/		微砂若干
2	〃	13.0		(2.7)	〃	〃		〃
3	〃	13.6		(3.2)	体部下位は器壁厚い。回転ナデ	灰 N6/	灰白 N7/	〃
4	〃	15.0		(2.7)	口縁部が若干外反。回転ナデ	灰白 N7/		〃
5	〃		7.6	(1.1)	回転ナデ。底面回転ヘラ切り後にヘラナデ。棒状黒斑	灰 N6/	灰白 N7/	〃
6	〃		7.0	(1.8)	回転ナデ。底面ナデ。外面と底面に棒状黒斑	灰白 N7/		〃
7	〃		8.8	(2.5)	回転ナデ。底面ナデ。内面に棒状黒斑	〃		〃
8	〃	12.2	7.0	3.6	直線的な体部。回転ナデ。底面ナデ。内面に棒状黒斑	灰白 N8/		〃
9	〃	13.8	9.0	3.4	回転ナデ。底面回転ヘラキリ後にナデ	灰 N6/		〃
10	須恵器　蓋			(1.1)	回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリ	灰白 N7/		〃
11	〃			(1.9)	〃	灰 N6/		微～細砂
12	〃			(2.4)	回転ナデ	灰白 N8/		〃
13	〃			(3.4)	回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリ	灰 N5/	灰 N6/	〃
14	〃			(2.6)	宝珠の痕跡。回転ナデ。天井部外面はヘラケズリ後にナデ	灰白 5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	微砂
15	〃	16.8		(2.1)	口縁部は短かい。回転ナデ	黄灰 2.5Y6/1	〃	〃
16	須恵器　杯身	11.8		(3.9)	口縁部は薄く内傾する。回転ナデ	灰白 N7/	灰 N6/	〃
17	〃	13.6		4.1	口縁部は内傾。回転ナデ。体部外面下半は回転ヘラケズリ	灰白 5Y7/1		〃
18	須恵器　椀		9.4	(1.6)	内面回転ナデの後に指ナデ。底面回転ヘラキリ後にナデ	灰白 N7/		〃
19	〃		10.8	(1.8)	回転ナデ	灰 5Y5/1	灰白 10YR8/1	〃
20	須恵器　壺		11.0	(4.5)	胴部は急傾斜で立ち上がる。回転ナデ。底面ナデ	灰白 N7/		〃
21	〃		14.0	(6.1)	体部から急傾斜で立ち上がる。回転ナデ	灰 N5/	灰 N6/	〃

第74図　4工区Ⅰ期水田出土遺物 (1)　（S：1/4）

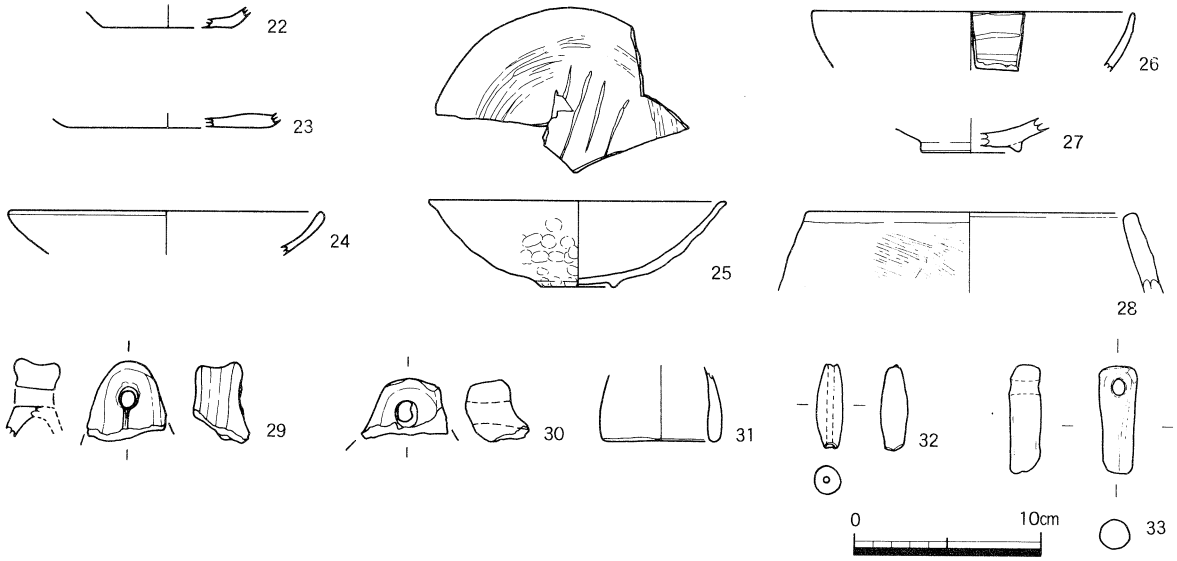
と非土壌層に分けられる。土壌層は褐灰色シルト質極細砂で、厚さは平均８cmを測る。非土壌層は灰褐色シルト質極細砂である。水田上面は後世の削平を受けており、畦畔は検出されなかった。水田面のレベルは標高5.30～5.40mである。水田の東側には灰白色シルト質極細砂を充填するピットが東西方向にほぼ直線的に並んでいるのが検出された。南北方向に派生している部分が３ヶ所ある。ピットの直径は５～10cmを測る。

出土遺物　遺物は須恵器坏(1～9)、同蓋(10～15)、同坏身(16,17)、同椀(18,19)、同壺(20,21)、須恵質土器坏(22,23)、同椀(27)、土師質土器坏(24)、同土鍋(28)、瓦器椀(25,26)、飯蛸壺(29～31)、土錘(32,33)がある。

須恵器坏の底部外面は回転ヘラ切り後にナデ（５，９）、ナデを施したもの（６～８）がある。蓋の天井部は回転ヘラケズリが施される。須恵質土器坏の底部外面は回転ヘラ切り後にナデが施される。

瓦器椀は外面指押さえ、内面ヘラミガキ、暗文が施され、高台は扁平な逆三角形である。

Ⅱ期水田　(第70，72，76，77図)　４工区西端から34.75m東の範囲で検出された水田であり、Ⅰ期水田より約6.75m東方に拡張する。東縁部は東に大きく湾曲する。水田土壌層は褐灰色シルト質極細砂で、厚さは５cmである。非土壌層は黄灰色シルト質極細砂を若干含む褐灰色シルト質極細砂である。水田上面のレベルは標高5.30m前後であり、西側から東側に緩やかに低くなっている。南北方向に延びる畦畔が６本検出された。畦畔の幅は15～50cm、高さ４cmを測る。畦畔の間隔は６mと４mの



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
22	須恵質土器 杯		7.0	(1.2)	回転ナデ。底面回転ヘラキリ後にナデ	灰白 N7/		微砂
23	〃		10.0	(0.8)	回転ナデ。底面回転ヘラキリ後に回転ヘラナデ	灰白 N8/	灰白 2.5Y8/1	微～細砂
24	土師質土器 杯	16.6		(2.2)	回転ナデ。内面ナデ	灰白 2.5Y8/1		〃
25	瓦器 椀	16.0	3.8	4.5	口縁ヨコナデ。体部外面指押え。内面ヘラミガキ、暗文	灰 N4/	灰 N5/	〃
26	〃	17.2		(3.1)	口縁ヨコナデ。体部外面指押え・ナデ・内面ナデ・ヘラミガキ	灰 N5/		〃
27	須恵質土器 椀		5.2	(1.8)	回転ナデ。底面回転ヘラキリ	灰白 7.5Y8/1		微砂
28	土師質土器土鍋	18.8		(4.2)	口縁部内傾。外面粗いハケメ、内面ナデ	鈍褐 7.5YR5/3	鈍黄橙 10YR6/3	細礫
29	飯蛸壺				飯蛸壺の上部。中央に孔を有し、側面は溝状	明赤褐 5YR5/6		細～粗砂
30	〃				飯蛸壺の上部。中央に孔有り	灰白 5Y7/1		〃
31	〃	6.0		(4.0)	摩滅	黄灰 2.5Y6/1		〃

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
32	土錘	4.5	1.5				浅黄 2.5Y7/4　中央に孔を持ち、擦痕がある
33	〃	(5.7)	1.7				赤褐 5YR7/6　上端に孔有り

第75図　４工区Ⅰ期水田出土遺物(2)（S：1/4）

繰り返しである。畦畔の土は土壌層と同じである。水田北東隅において、灰白色シルト質極細砂を充填するピットが直線的に並んで検出された。その全長は９ｍを測り、ピットの直径は５～10cmである。

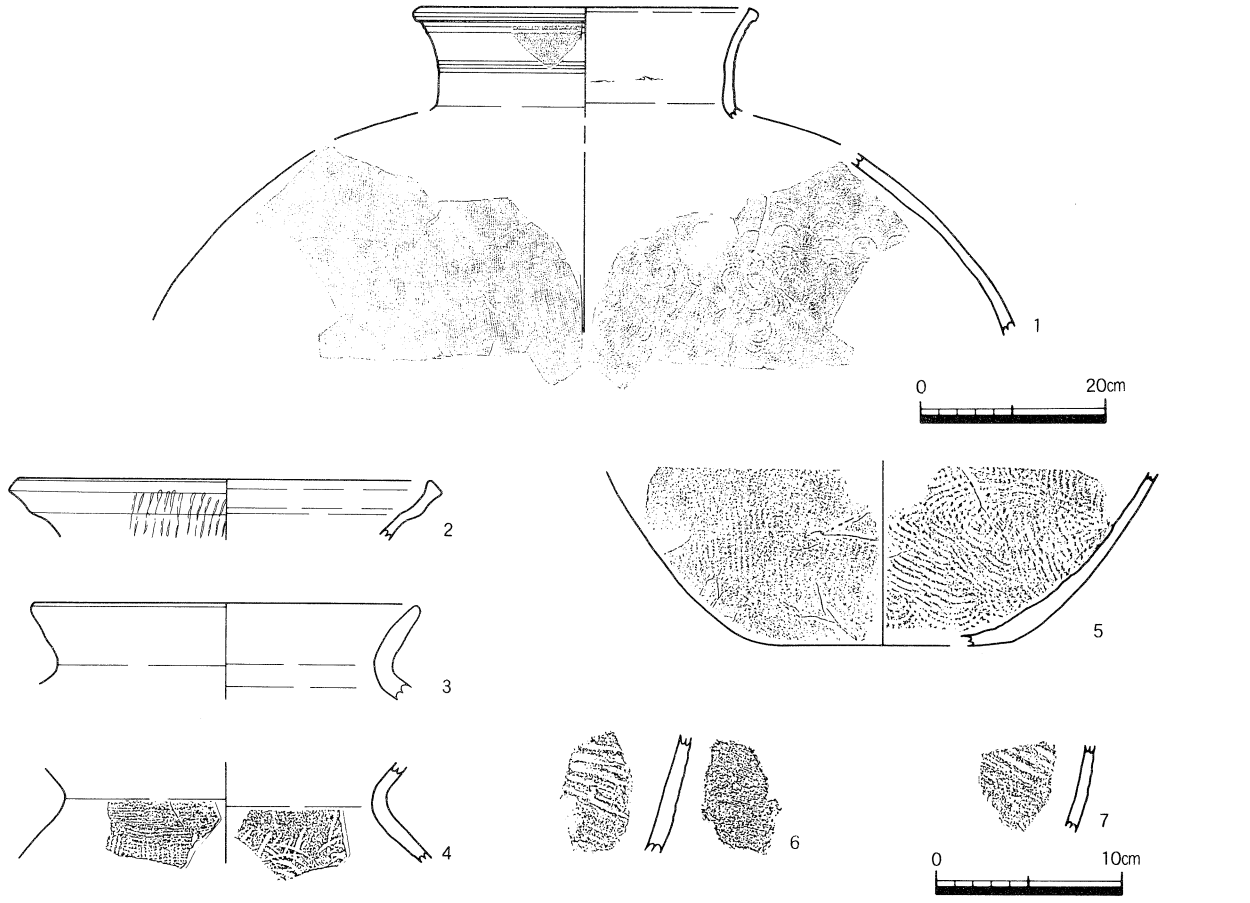
出土遺物　須恵器壺(1,2)、同甕(3～5)、同蓋(8～10)、同坏身(11～13)、須恵質土器椀(14)、同坏(15,16)、土師器高坏(17)、同甕(6,7)、飯蛸壺(18)、石鏃(19)である。

１は口径35.2cmを測る大型の壺で、胴部外面は平行タタキ、内面は青海波状タタキが施される。５は底部の境が不明瞭であり、外面に格子目状タタキ、内面青海波状タタキである。

須恵器蓋の天井部外面は回転ヘラケズリが施され、８にはヘラ記号がある。坏身の口縁部は短く、直立あるいは若干内傾する。

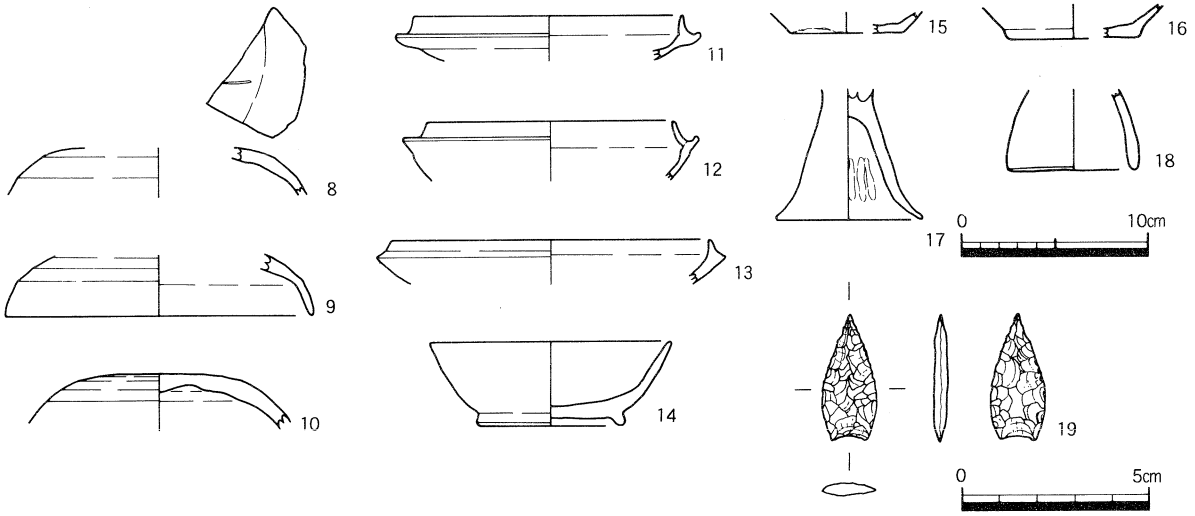
14はやや高い高台を持ち、底部は厚い。外面は黒色である。

Ⅲ期水田　(第70，73図)　４工区西端から約36ｍ東までの範囲で検出された水田であり、Ⅱ期水田より約1.30ｍ東に拡張する。東縁部はⅡ期水田と同様に大きく湾曲する。水田土壌層は褐灰色シル



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
1	須恵器　壺	35.2		(34.0)	口縁部ヨコナデ。胴部外面平行タタキメ、内面青海波状タタキメ	灰白 N7/		微～細砂
2	〃	22.0		(3.2)	口縁部外面に櫛によるわずかな刻目文	暗オリーブ灰 2.5GY4/1	灰白 N8/	〃
3	須恵器　甕	20.8		(4.9)	回転ナデ。	灰 N5/	灰 N6/	微砂
4	〃			(5.3)	回転ナデ。外面格子目状タタキメ、内面青海波状タタキメ	〃	〃	微～細砂
5	〃		11.0	(9.3)	丸底気味。外面格子目状タタキメ、内面青海波状タタキメ	灰白 2.5Y8/1	灰白 N8/	微砂
6	土師器　甕			(6.3)	外面タタキメ、内面細かいハケメ	褐 10YR4/6		細砂、礫
7	〃			(4.7)	外面タタキメ、内面ナデ	灰黄 2.5Y6/2		〃

第76図　４工区Ⅱ期水田出土遺物(1)（Ｓ：１/８、１/４）



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
8	須恵器 蓋			(2.5)	回転ナデ。天井部外面ヘラナデ。ヘラ記号	灰白 N7/	灰 N6/	微～細砂
9	〃	16.6		(3.3)	回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリ	明青灰 5PB7/1		細砂
10	〃			(2.9)	〃	灰 N6/	灰白 N7/	微砂
11	須恵器 杯身	14.4		(2.4)	口縁部直立。回転ナデ	灰白 N7/		〃
12	〃	13.2		(3.1)	口縁部は薄く、内傾する。回転ナデ	灰 N4/	灰白 N7/	〃
13	〃	17.0		(2.4)	口縁部は短かく直立。回転ナデ	明青灰 5PB7/1		微砂少量
14	須恵質土器 椀	13.0	7.8	4.5	回転ナデ。底面回転ヘラキリ後にナデ。外面黒色	灰 N6/	灰白 10YR8/1	微砂
15	須恵質土器 杯		6.0	(1.2)	回転ナデ。底面回転ヘラキリ後にナデ	灰 N8/		〃
16	〃		7.0	(1.8)	回転ナデ	〃	灰 5Y5/1	微～細砂
17	土師器 高杯		8.0	(6.2)	裾部は若干広がる。外面摩滅、内面ナデ・ユビナデ	鈍橙 2.5YR6/4	灰白 2.5Y7/1	細～粗砂
18	飯 蛸 壺	6.8		(4.3)	摩滅	橙 5YR7/6		細砂、礫

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
19	石 鏃	3.3	1.5	0.3	1.9	サヌカイト	凹基式。全面細かい調整

第77図　４工区Ⅱ期水田出土遺物(2)（S：1/4、1/2）

ト質極細砂、非土壌層は褐鉄鉱を含むにぶい黄橙色シルト質細砂である。土壌層の厚さは４～10cmである。水田面のレベルは標高5.16～5.30ｍであり、中央付近がやや低くなっている。南北方向に延びる畦畔が７本、東西の畦畔が１本検出された。幅は35～70cm、高さ１～３cmを測る。畦畔の間隔は４ｍと６ｍである。畦畔の位置は、Ⅱ期水田とほぼ同一である。東端の２本の畦畔は不規則な位置にあり、やや湾曲している。畦畔を形成する土は、土壌層と同じ褐灰色シルト質極細砂である。１本のみであるが東西方向の畦畔が検出されたことより、Ⅲ期水田は長地形の地割りであったと考えられる。

出土遺物　須恵器、土師器片が出土したが、全て小片であり図化できなかった。

２）　近世

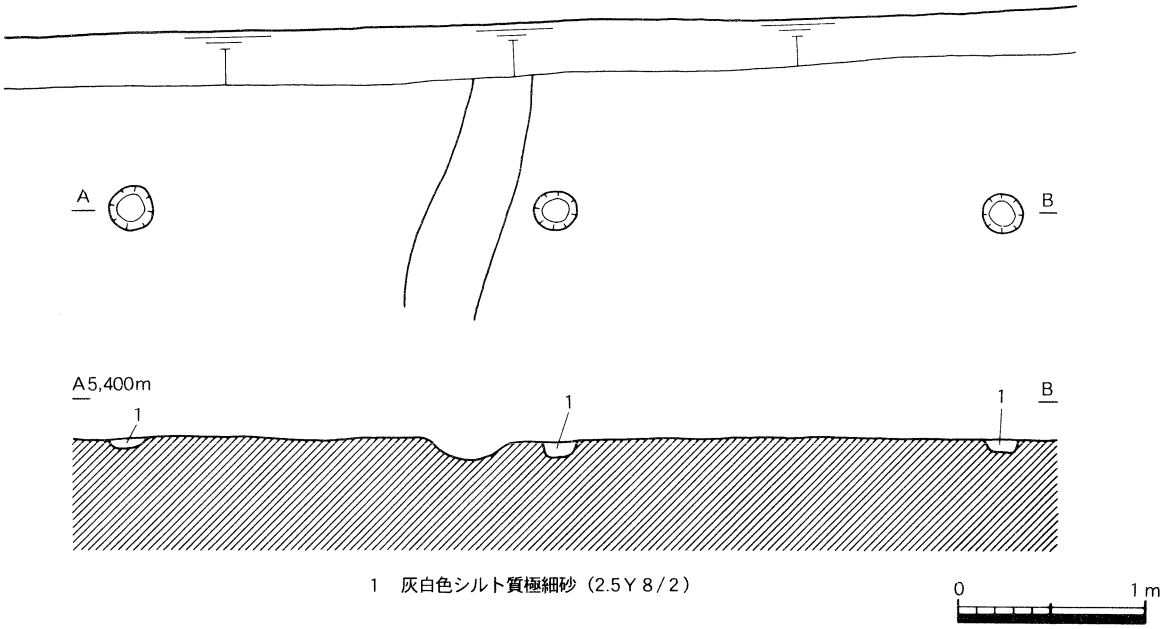
１　掘立柱建物

ＳＢ401　（第78図）

４工区北東隅において検出された掘立柱建物であるが、検出できたのは３個の柱穴のみであり、平面形や規模は不明である。柵列の可能性も考えられるが、ここでは掘立柱建物として報告する。

確認面のレベルは標高5.20ｍである。柱穴は東西方向に並び、心心間の距離は2.35ｍを測る。柱穴の直径は約20cm、深さ６～10cmである。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。南側には柱穴が検出されておらず、掘立柱建物は北側の調査区外に広がると考えられる。

出土遺物　遺物の出土はなかった。



第78図　SB401平・断面図（S：1/40）

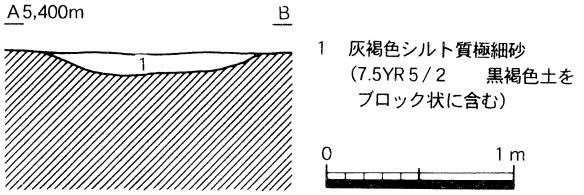
2　溝

SD402　（第79，80図）

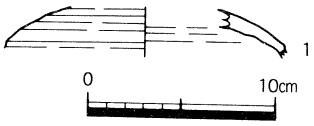
4工区東部で検出された溝であり、SD401とピット群1を切っている。

確認面のレベルは標高5.23m前後である。溝の方向は東－西を示し、幅は1.15m、深さ10cmを測る。断面は浅い船底形を呈す。底面はほぼ平坦である。溝の全長は約8.00mである。埋土は黒褐色土をブロック状に含む灰褐色シルト質極細砂である。

出土遺物　遺物は数点の土師質土器、陶磁器であるが、小片のため図化できなかった。1は混入した遺物である。



第79図　SD402断面図（S：1/40）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	須恵器　蓋			(2.5)	回転ナデ。天井部外面は回転ヘラケズリ	灰 N6/	灰白 N7/	微砂

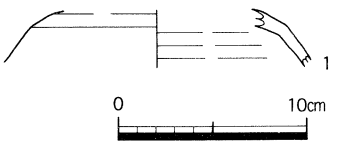
第80図　SD402出土遺物（S：1/4）

SD403　（第81図）

4工区の南西隅と南東隅において検出された溝であり、4工区南側にある現有のコンクリート水路とほぼ同位置である。

確認面のレベルは標高5.44m、5.12mである。規模、断面は不明である。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　遺物は須恵器蓋(1)、数点の土師質土器片、染付片、陶磁器片である。



番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	須恵器　蓋			(3.1)	回転ナデ。天井部外面は回転ヘラケズリ	灰 10Y5/1	灰 10Y6/1	微砂少量

第81図　SD403出土遺物（S：1/4）

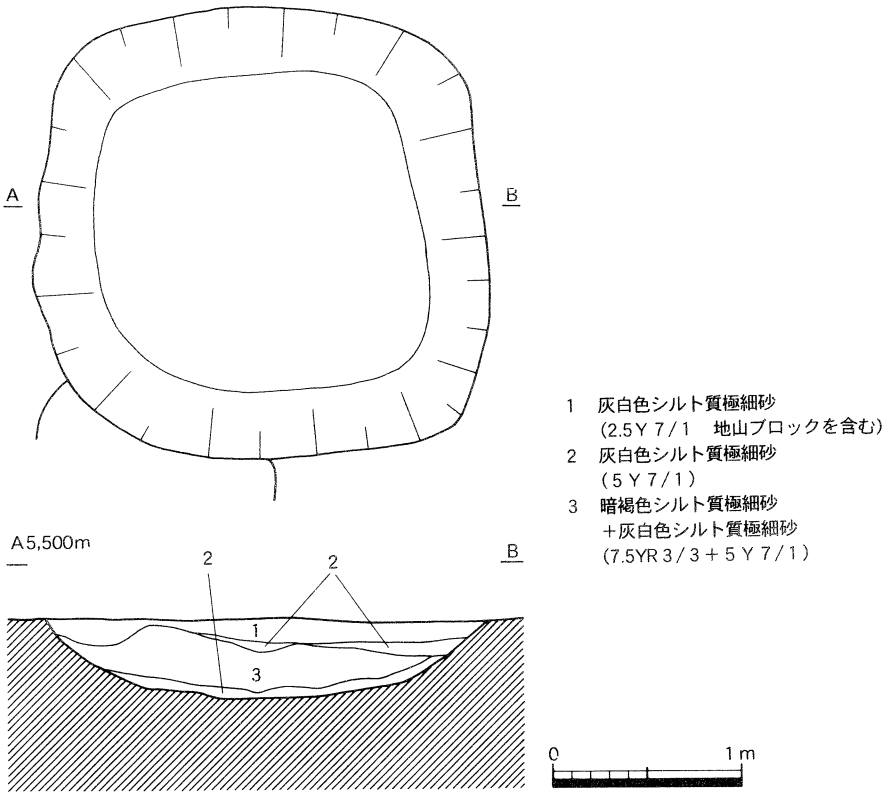
3　土坑

ＳＫ401　（第82図）

４工区中央やや東寄りにおいて検出された土坑である。

確認面のレベルは標高5.20mである。平面形は隅丸方形を呈し、2.35×2.40mを測る。南西隅のカーブはやや大きい。深さは42cmであり、掘り込みは緩やかである。底面の中央部は若干下がる。埋土は３層に細分されるが、灰白色シルト質極細砂と暗褐色シルト質極細砂に大別される。埋土に地山をブロック状に含み、人為的に埋められたと考えられる。

出土遺物　遺物は土師質土器・陶磁器の小片のみであり、図化できるものはなかった。



第82図　SK401平・断面図（S：1/40）

ＳＫ402　（第83図）

４工区中央やや東寄りのＳＫ401に南接して検出された土坑である。

確認面のレベルは標高5.20mである。土坑の平面形は隅丸長方形を呈し、東西方向の長軸の長さは1.25mを測り、北側にＳＫ401があるため短軸は不明である。深さは10cmで、底面は平坦である。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　遺物の出土はなかった。

ＳＫ403　（第83図）

４工区中央東寄りにおいて検出された土坑である。西側と南側は未調査である。

確認面のレベルは標高5.20mである。土坑の平面形は未調査部分があるため不明であるが隅丸方形を呈すると考えられる。深さは25cmで、掘り込みは緩やかである。南側に非常に浅い落ち込みがある。底面は平坦である。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。

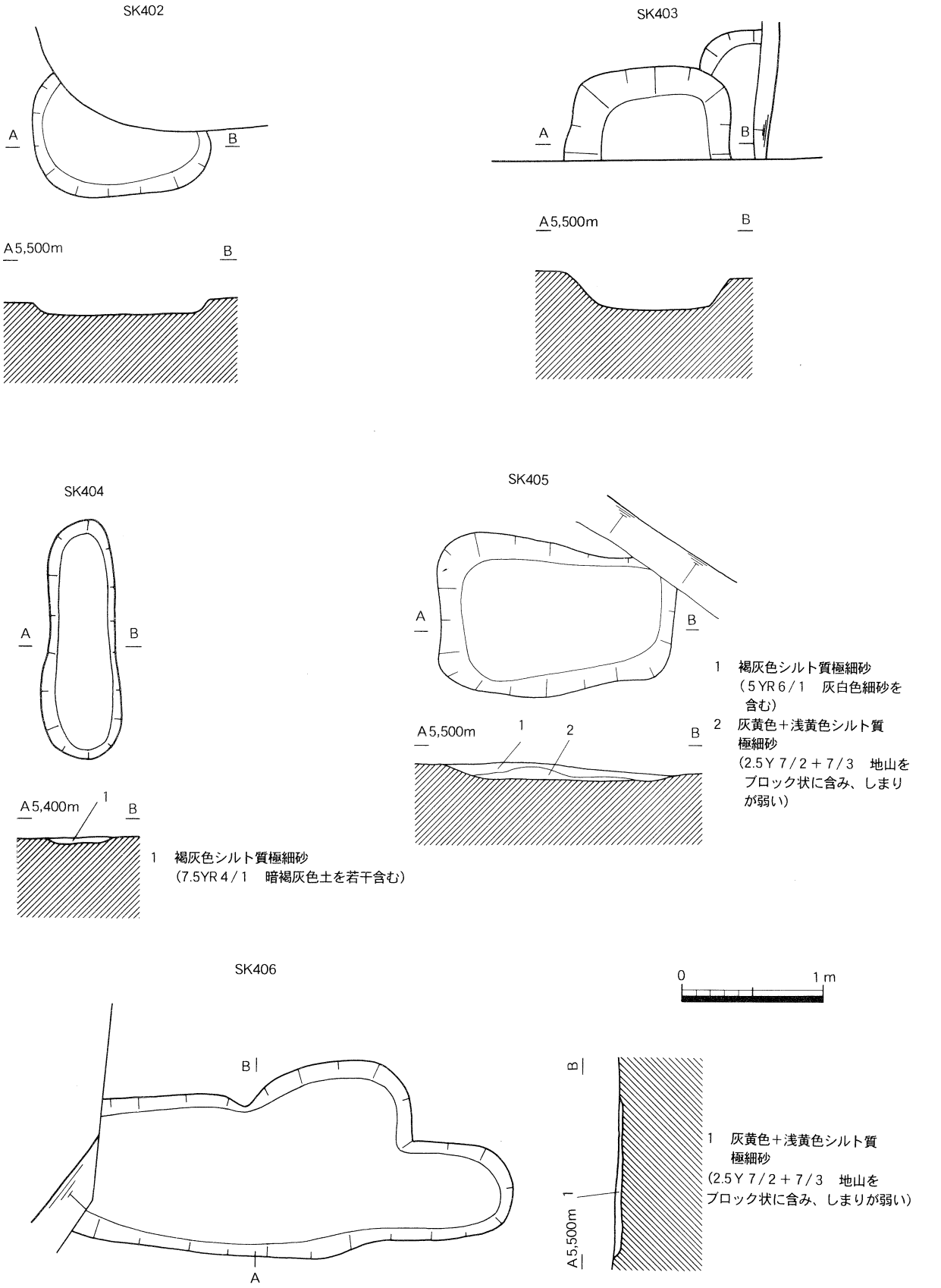
出土遺物　遺物の出土はなかった。

ＳＫ404　（第83図）

４工区東部において検出された土坑であり、ＳＤ402の南側に位置する。

確認面のレベルは標高5.25mである。土坑の平面形は中央の若干くびれるピーナツ形を呈し、東西方向の長軸は1.70m、短軸は0.50mを測る。深さは５cmである。底面は平坦である。埋土は褐灰色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　遺物の出土はなかった。



第83図　SK402～406平・断面図（S：1/40）

ＳＫ405　（第83図）

４工区中央東寄りに単独で検出された土坑であり、ＳＫ406の北側に位置する。

確認面のレベルは標高5.30～5.38ｍである。平面形は長方形を呈し、南北1.65ｍ×東西1.10ｍを測る。深さは10cmで、底面は平坦である。埋土は２層であり、下層に地山ブロックを含む。

出土遺物　遺物は数点の陶磁器片のみであり、図化できなかった。

ＳＫ406　（第83図）

４工区中央東寄りに単独で検出された土坑であり、ＳＫ405の南側に位置する。

確認面のレベルは標高5.25～5.30ｍである。平面形は不整な楕円形を呈し、東西3.00ｍ以上、南北1.12ｍを測る。深さは６cm未満である。埋土は灰黄色＋浅黄色シルト質極細砂の単一層である。

出土遺物　遺物は数点の陶磁器片であり、図化できるものはなかった。

ＳＫ407（第84図）

４工区中央において単独で検出された土坑であり、ＳＫ408の東側に位置する。

確認面のレベルは標高5.25ｍ前後である。平面形は不整な円形を呈し、直径1.30ｍを測る。深さは23cmであり、掘り込みは緩やかである。底面は平坦である。埋土は灰黄色＋浅黄色シルト質極細砂の単一層であり、地山をブロック状に含む。

出土遺物　遺物の出土はなかった。

ＳＫ408　（第85図）

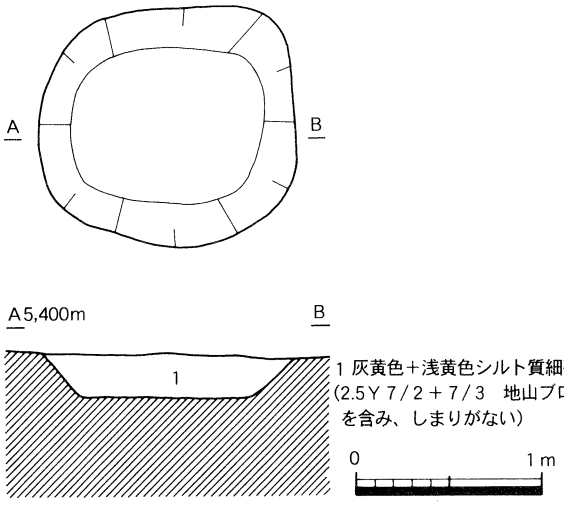
４工区中央において単独で検出された土坑であり、ＳＫ407の西側に位置する。

確認面のレベルは標高5.28～5.38ｍである。平面形は不整な円形であると推定され、直径1.20ｍを測る。深さは18cmであり、底面は西側が若干下がる。埋土に地山のブロックを含む。

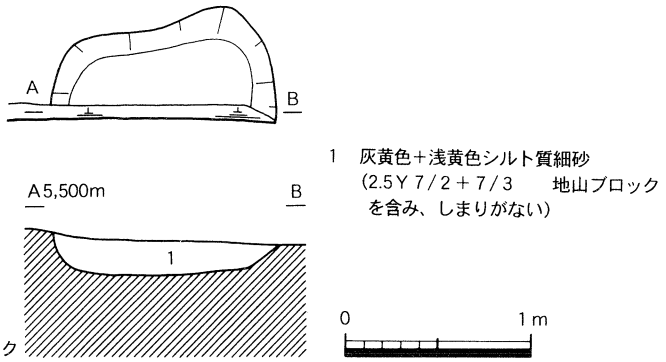
出土遺物　遺物の出土はなかった。

ＳＫ409　（第86図）

４工区中央西寄りに単独で検出された土坑であり、ＳＫ410の東側に位置する。



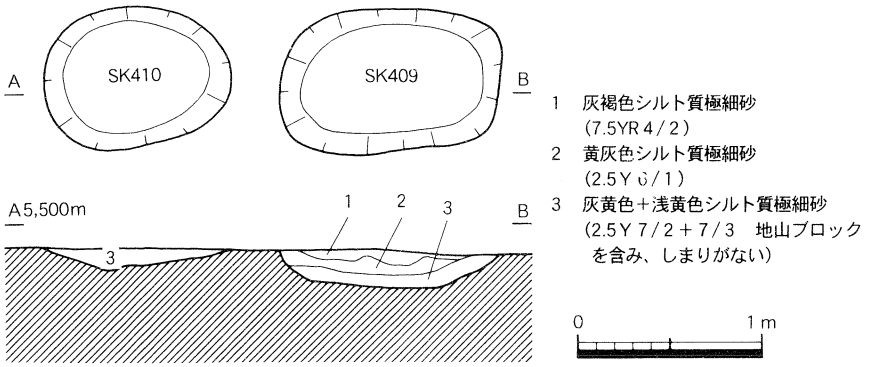
第84図　SK407平・断面図（Ｓ：1/40）



第85図　SK408平・断面図（Ｓ：1/40）

確認面のレベルは標高5.35mである。平面形は不整な円形を呈し、東西1.16m×南北0.75mを測る。深さは20cmで平坦な底面である。

出土遺物　遺物の出土はなかった。



第86図　SK409、410平・断面図（S：1/40）

ＳＫ410　（第86図）

４工区中央西寄りに単独で検出された土坑である。

確認面のレベルは標高5.35mである。平面形は不整な円形を呈し、東西1.00m×南北0.75mを測る。深さは10cmであり、掘り込みは非常に緩やかである。底面に若干の窪みがある。

出土遺物　遺物の出土は全くなかった。

ＳＫ411　（第87図）

４工区中央西寄りで検出された土坑であり、ＳＫ412に切られている。

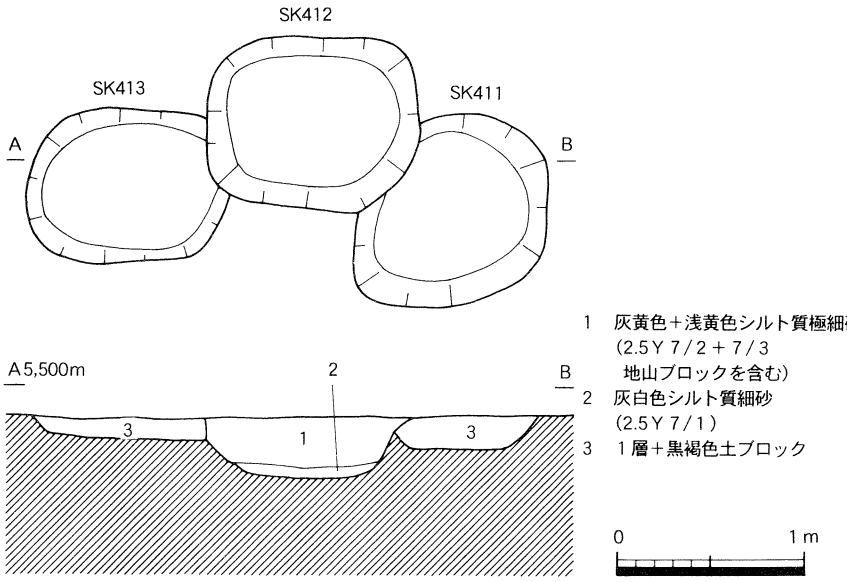
確認面のレベルは標高5.35mである。平面形は不整な円形を呈し、直径1.00mを測る。深さは18cmで、底面は平坦である。堆積状態により人為的に埋められたと考えられる。

出土遺物　遺物は数点の陶磁器片のみであり、図化できるものはなかった。

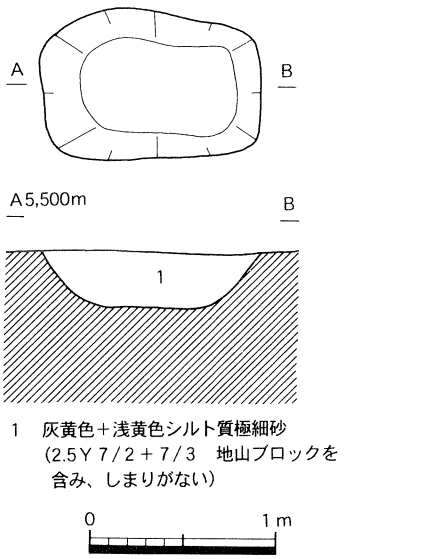
ＳＫ412　（第87図）

４工区中央西寄りで検出された土坑で、ＳＫ411．413を切っている。

確認面のレベルは標高5.35mである。平面形は隅丸方形を呈し、東西1.10m×南北0.90mを測る。深さは32cmで、掘り込みは緩やかである。底面は平坦である。埋土は地山のブロックを含み、人為的



第87図　SK411～413平・断面図（S：1/40）



第88図　SK414平・断面図（S：1/40）

に埋められたと考えられる。

出土遺物　遺物の出土は非常に少なく、数点の陶磁器片のみである。

ＳＫ413　（第87図）

４工区中央西寄りで検出された土坑であり、ＳＫ412の西側に位置する。

確認面のレベルは標高5.35ｍである。平面形は不整な隅丸方形を呈し、東西1.10ｍ×南北0.82ｍを測る。深さは10cmで、平坦な底面である。埋土はＳＫ411と同一である。

出土遺物　遺物の出土は全くなかった。

ＳＫ414　（第88図）

４工区西側に単独で検出された土坑で、ＳＫ413とＳＫ415の中間に位置する。

確認面のレベルは標高5.32ｍである。平面形は長方形を呈し、東西1.17ｍ×南北0.78ｍを測る。深さは30cmで、掘り込みは緩やかである。埋土は人為的な埋め戻しである。

出土遺物　遺物の出土は全くなかった。

ＳＫ415　（第89図）

４工区西側で単独に検出された土坑であり、ＳＫ416の東側の位置にある。

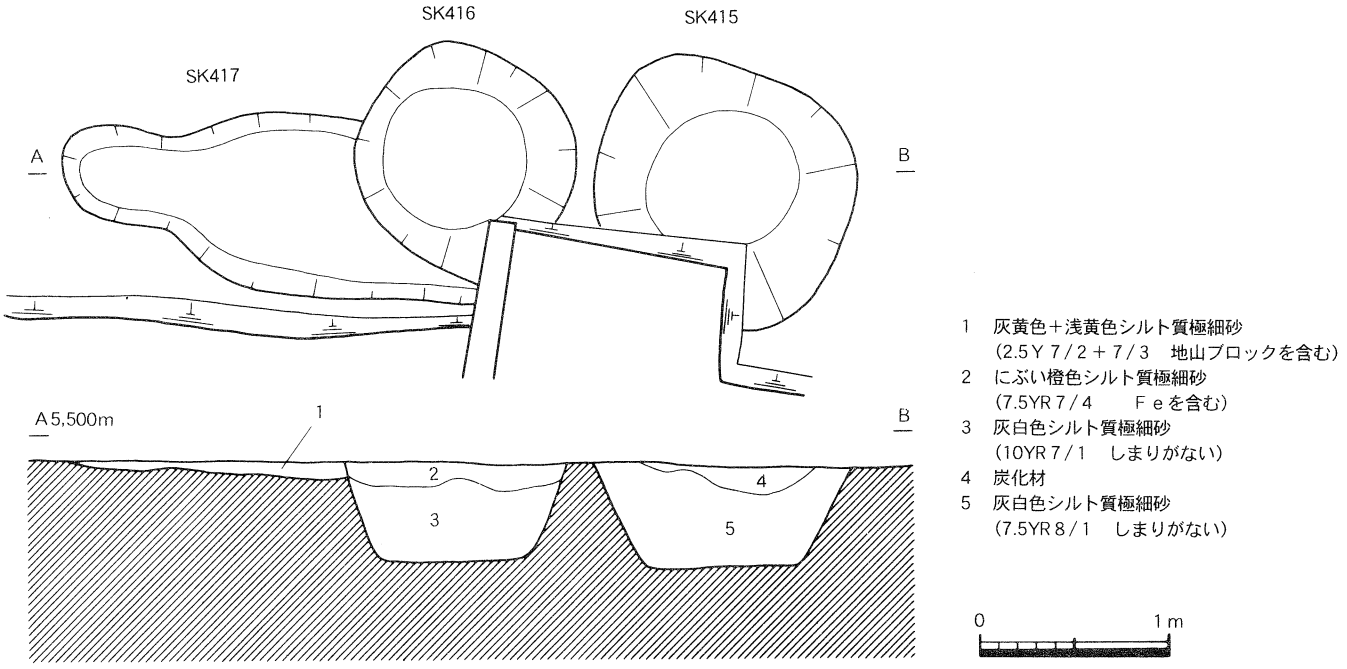
確認面のレベルは標高5.32ｍである。平面形は円形を呈し、直径1.36ｍを測る。深さは50cmで、掘り込みは緩やかである。底面は平坦である。埋土上面には多量の炭が検出された。

出土遺物　遺物は土師質土器・陶磁器の小片のみで、図化できるものはなかった。

ＳＫ416　（第89図）

４工区西側で検出された土坑で、ＳＫ415とＳＫ417に挟まれた位置にある。

確認面のレベルは標高5.32ｍである。平面形は円形を呈し、直径1.17ｍを測る。深さは52cmで、急



第89図　SK415～417平・断面図（S：1/40）

傾斜の掘り込みである。底面は平坦であり、底径とほぼ同じ大きさの大甕が置かれていた。

出土遺物　遺物は前述した陶器大甕、土師質土器、陶磁器、瓦が出土したが、図化できなかった。

ＳＫ417　（第89図）

４工区西側においてＳＫ416に切られて検出された土坑である。

確認面のレベルは標高5.32ｍである。平面形は不整な楕円形を呈し、東西2.30ｍ以上で南北0.95ｍを測る。深さは10cmであり、掘り込みは非常に緩やかである。埋土は単一層である。

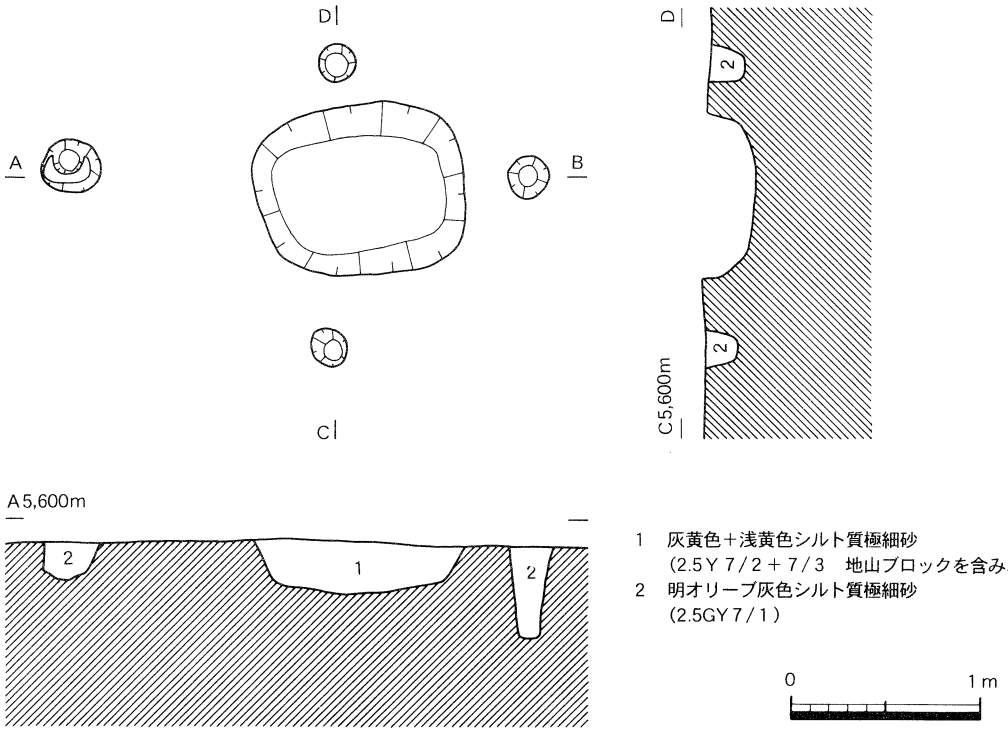
出土遺物　遺物は全く出土しなかった。

ＳＫ418　（第90図）

４工区西側において単独で検出された土坑である。

確認面のレベルは標高5.42ｍである。隅丸方形の平面形を呈する土坑を中心として南北・東西に４本の柱穴が取り囲んでいる。中心の土坑の規模は1.10×0.90ｍを測り、深さは28cmである。底面は中央がやや窪む。埋土は人為的に埋められている。柱穴の深さは東側の50cmを除き20cmである。

出土遺物　遺物は数点の土師質土器・陶磁器の小片であり、図化できなかった。



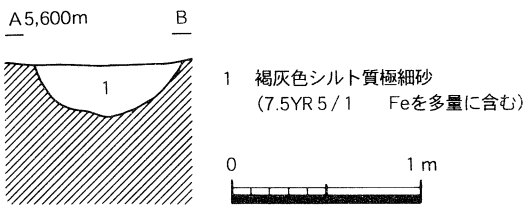
第90図　SK418平・断面図（Ｓ：1/40）

ＳＫ419　（第91図）

４工区南西隅に検出された土坑である。

確認面のレベルは標高5.45ｍである。平面形は不整な円形を呈し、直径1.00×0.80を測る。深さは25cmで、掘り込みは緩やかである。埋土は単一層である。

出土遺物　遺物は数点の陶磁器片のみである。



第91図　SK419断面図（Ｓ：1/40）

4　ピット

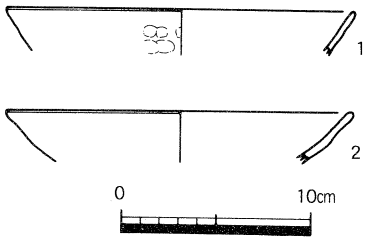
4工区の東側と西端においてピット群が検出された。東側のピット群1は不規則な並びの9個のピットからなっている。確認面のレベルは標高5.22m前後である。ピットは円形を呈し、直径15cm、深さ10cmを測る。埋土は灰白色シルト質極細砂の単一層である。遺物は出土しなかった。

ピット群2は14個のピットからなっており、確認面のレベルは標高5.40～5.50mである。ピットの平面形は円形を呈し、直径15～35cm、深さ10～25cmを測る。ピットの並びは不規則である。埋土はピットにより若干色が異なり、明オリーブ灰色シルト質極細砂・にぶい褐色シルト質極細砂・灰白色シルト質細砂の単一層を充填する。以下、遺物の出土したピットのみ記述する。

SP411　(第92図)

ピット群2のほぼ中央に位置し、平面形は円形を呈す。直径28cm、深さ13cmを測る。埋土は明オリーブ灰色シルト質極細砂。

出土遺物　瓦器椀(1,2)の口縁部の調整はヨコナデ、体部外面はユビオサエが施される。



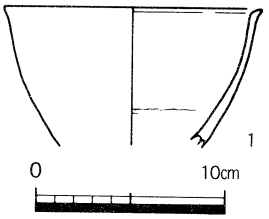
番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	瓦器　椀	18.6		(2.4)	口縁部ヨコナデ。体部外面指押え、内面ナデ	灰N4/	灰白N7/	微～細砂少量
2	〃	18.4		(3.7)	外面に若干の稜。口縁部ヨコナデ。体部外面指押え	〃		〃

第92図　SP411出土遺物（S：1/4）

SP412　(第93図)

ピット群2のほぼ中央に位置し、SP411の西側である。平面形は円形を呈し、直径17cm、深さ18cmを測る。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面は若干段を有する。埋土は明オリーブ灰色シルト質極細砂。

出土遺物　1は底面直上から出土した磁器碗である。



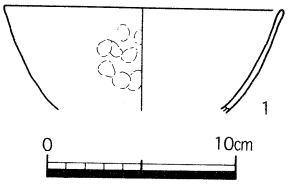
番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	磁器　碗	13.8		(7.3)	口縁部外反。内面・外面上半に釉　(釉)	明オリーブ灰 2.5GY7/1		微砂若干

第93図　SP412出土遺物（S：1/4）

SP419　(第94図)

ピット群2の北側に位置し、平面形は円形を呈する。直径は20cm深さ17cmを測る。埋土はにぶい褐色シルト質極細砂である。

出土遺物　遺物は瓦器碗(1)のみである。



番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外	内	
1	瓦器　椀	14.8		(5.5)	口縁部内面ナデ。体部外面指押え。黒色	灰N4/	灰白7.5Y8/1	微砂

第94図　SP419出土遺物（S：1/4）

5　性格不明遺構

SX401

4工区中央において検出された落ち込みである。平面形は北側に頂点を持つ不整形である。確認面

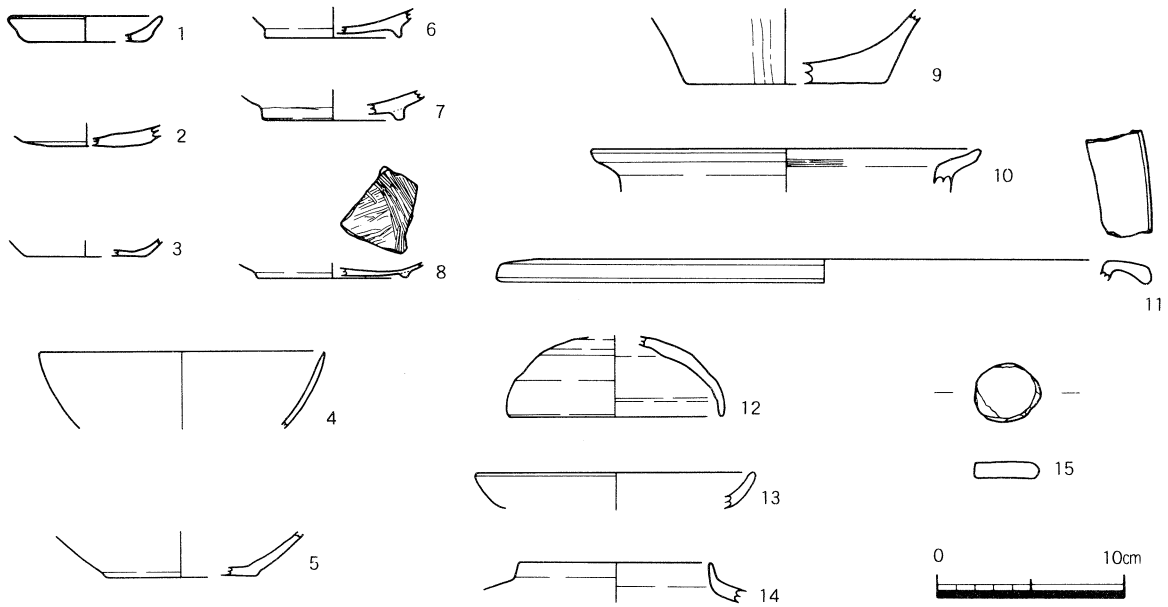
のレベルは標高5.40m前後である。深さは20cm前後で、底面は凹凸が著しい。埋土は上層から灰黄褐色シルト質細砂・黄灰色砂礫・明褐灰色シルト質細砂・白灰色中～細砂・浅黄色シルト質極細砂の５層であり、砂礫と細砂が厚く堆積する。

ＳＸ402

４工区東端に検出された落ち込みであり、ＳＢ401・ＳＤ402の東側に位置する。確認面のレベルは標高5.18m前後である。深さは10cmである。西側はほぼ直線的な平面である。埋土は灰白色シルト質極細砂・黄灰色シルト質極細砂の２層である。

３）　包含層出土遺物　（第95図）

４工区の包含層より出土した遺物としては、土師器坏(2,3)、須恵器蓋(12)、同坏(13)、同短頸壺(14)、土師質土器皿(1)、同椀(4,6,7)、同坏(5)、同甕(9.10)、同焙烙(11)、瓦器椀(8)、紡錘車(15)がある。



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外	内	胎土
1	土師質土器　皿	8.0	6.4	1.3	口縁部、内面ヨコナデ。摩滅	橙 5YR6/6	灰白 10YR8/2	細砂
2	土師器　杯		7.0	(1.1)	回転ナデ。底面回転ヘラキリ	橙 5YR7/6	橙 2.5YR6/6	微砂
3	〃		6.4	(1.0)	回転ナデ	鈍黄橙 10YR7/4		〃
4	土師質土器　椀	15.2		(4.1)	口縁部内面に若干の稜。体部外面ナデ、内面ヘラミガキ。内面黒色	鈍黄橙 10YR7/3	暗灰 N3/	微～細砂
5	土師質土器　杯		8.2	(2.4)	外面ナデ、内面ヘラミガキ。底面ヘラナデ。内面黒色	褐灰 10YR5/1	黒 10YR1.7/1	微砂
6	土師質土器　椀		7.0	(1.4)	摩滅	鈍褐 7.5YR5/4	褐灰 10YR4/1	微～細砂
7	〃		7.2	(1.6)	外面ナデ、内面ヘラミガキ。内面黒色	灰黄褐 10YR5/2	暗灰 N3/	微砂
8	瓦器　椀		7.8	(0.8)	低い高台。外面摩滅。内面ヘラミガキ	明褐灰 7.5YR7/2	〃	微～細砂
9	土師質土器　甕		10.6	(4.0)	外面ヘラケズリ、内面摩滅。底面ナデ	灰白 10YR7/1	鈍黄橙 10YR7/2	細～粗砂多量
10	〃	20.8		(2.3)	口縁部ヨコナデ。内面ハケメ・ナデ	鈍黄 2.5Y6/3	褐灰 10YR5/1	微～細砂
11	土師質土器焙烙	34.0		(1.3)	ヨコナデ	灰黄褐 10YR4/2	灰白 2.5Y8/2	〃
12	須恵器　蓋	13.4		(4.3)	回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリ	灰 N61	灰白 N7/	微砂
13	須恵器　杯	14.8		(1.9)	浅い器高。回転ナデ	〃	〃	〃
14	須恵器　短頸壺	10.2		(2.2)	口縁部は短く直立。回転ナデ	灰白 N7/		〃

番号	器種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	特徴
15	紡錘車	3.1	3.5	0.9		土	未製品。側面を加工

第95図　４工区包含層出土遺物（Ｓ：１/４）

第４章　自然科学的分析

第１節　プラント・オパール分析

高松市木太町の市立木太中学校の北に所在する境目・下西原遺跡より、２ａ層上面の畦畔など、中世の水田層とみられる土層が検出された。この水田層を検証する目的で、これら土層より採取された試料についてプラント・オパール分析を行い、その結果を以下に示した。

１．試料と分析方法

分析用試料はサブトレンチ①の３地点（仮地点名１～３：図96）より採取された。各土層について簡単に記すと、１ａ層（Ⅰ期ａ層）はやや粘土質の褐灰色の砂質シルトで、砂は極細粒砂が塊状に認められる。１ｂ層（Ⅰ期ｂ層）は灰褐色の砂質シルト、２ａ層（Ⅱ期ａ層）はやや粘土質の灰褐色～黒褐色砂質シルトで、これら上部３層には黒褐色のマンガン小塊が点在している。２ｂ層（Ⅱ期ｂ層）は灰褐色～黒褐色の粘土質シルトで、微細粒砂が現状に混入している。３ａ層は黒褐色の粘土質シルト～シルト質粘土で、極細粒砂が根状に認められる。４層はにぶい黄橙色の砂質シルト～シルト質細砂で、上位水田層のベースではないかとみられている。

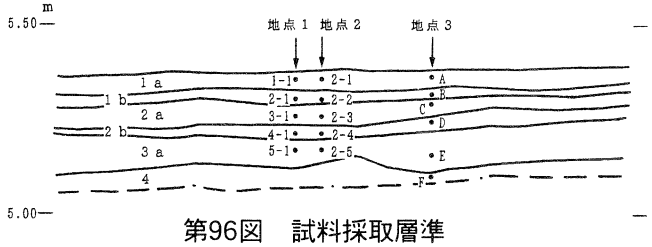
このⅠ期・Ⅱ期水田層はいずれも中世初期の13世紀と考えられている。

プラント・オパール分析は、上記した各層について３地点より採取された合わせて16試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１ｇ（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02ｇのガラスビーズ（直径約40μｍ）を加える。これに30％の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後沈降法により10μｍ以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

２．分析結果

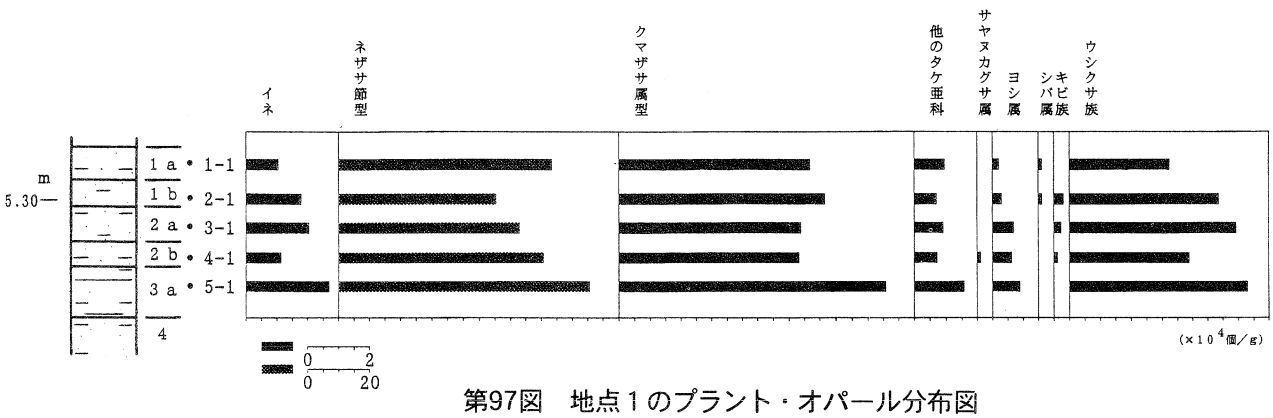
同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各プラント・オパール個数を求め(表１)、それらの分布を図１(地点１)、図２(地点２)、図３(地点３)に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料１ｇ当りの検出個数である。



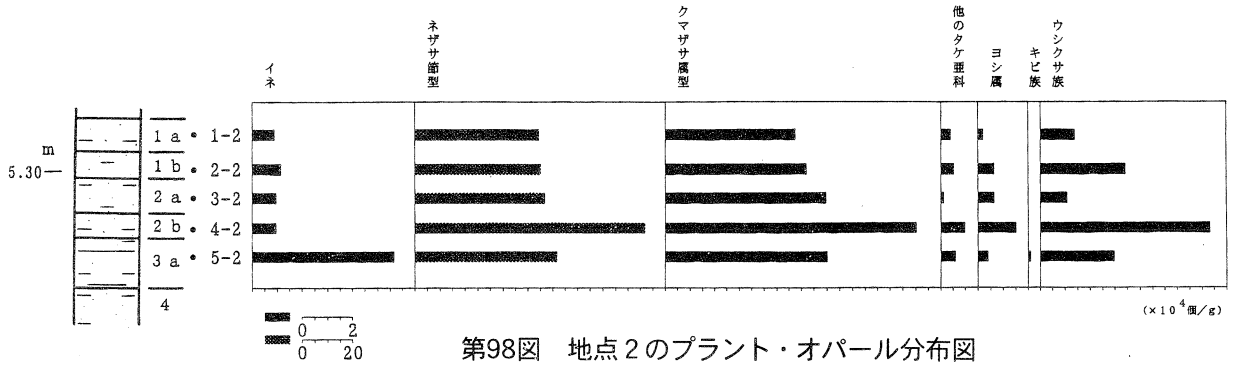
第96図　試料採取層準

検鏡の結果、全試料よりイネのプラント・オパールが検出された。以下に、各地点ごとにその結果を示す。

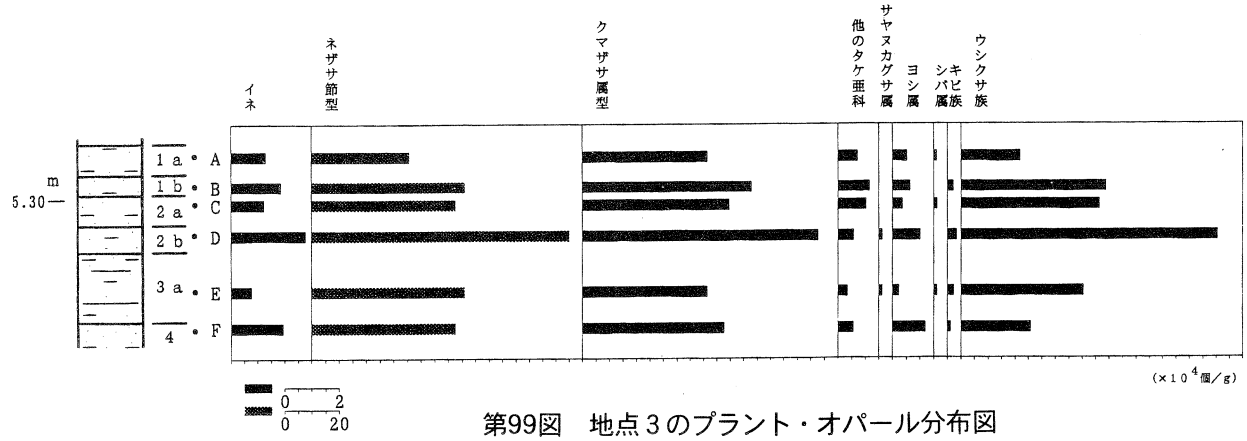
地点１（1-1～5-1）：イネのプラント・オパールが全試料より10,000個以上と多く検出され、上部に向かい減少する傾向が認められる。最も多く得られたのはネザサ節型で、全試料500,000個以上と非常に多く検出されているが、上部に向い減少し、最上部で再び増加している。次いでクマザサ属型が多く、最下部（約86,000個）を除き60,000個前後に安定している。ウシクサ族は50,000個前後で、大きな傾向としては上部に向かい減少しており、同様の傾向がヨシ属にもみられる。その他、シバ属やキビ属などが若干得られている。



第97図　地点1のプラント・オパール分布図



第98図　地点2のプラント・オパール分布図



第99図　地点3のプラント・オパール分布図

表１　試料１ｇ当りのプラント・オパール個数

試料番号	イネ（個／g）	ネザサ節型（個／g）	クマザサ属型（個／g）	他のタケ亜科（個／g）	サヤヌカグサ属（個／g）	ヨシ属（個／g）	シバ属（個／g）	キビ族（個／g）	ウシクサ族（個／g）	不明（個／g）
1－1	10,500	683,300	61,700	9,400	0	2,100	1,000	0	32,400	35,600
2－1	17,900	502,200	66,500	6,900	0	3,000	1,000	3,000	48,600	33,700
3－1	20,300	578,000	58,700	9,000	0	6,800	0	2,300	54,200	44,000
4－1	11,300	659,400	58,400	7,200	1000	6,200	0	1,000	39,000	19,500
5－1	26,900	809,400	86,200	15,700	0	9,000	0	0	58,200	49,300
1－2	8,900	492,500	52,400	4,000	0	2,000	0	0	13,800	21,800
2－2	11,300	497,900	56,600	5,100	0	6,200	0	0	34,000	31,900
3－2	9,600	520,800	65,000	1,100	0	6,400	0	0	10,600	17,000
4－2	9,500	912,700	99,600	9,500	0	14,800	0	0	67,800	66,800
5－2	56,300	563,600	64,800	5,700	0	3,800	0	1,000	29,600	36,200
A	12,800	355,600	46,300	6,900	0	4,900	1,000	0	21,700	30,500
B	18,600	561,400	63,000	11,400	0	6,200	0	2,100	53,700	29,900
C	12,200	523,900	54,500	10,000	0	3,300	1,100	0	51,200	20,000
D	27,600	944,800	87,200	5,500	1100	9,900	0	3,300	94,900	41,900
E	7,500	556,000	46,200	3,200	1100	2,200	1,100	2,200	45,200	46,200
F	19,400	526,300	52,700	5,400	0	11,800	0	1,100	25,800	45,200

地点２（1-2～5-2）：イネは10,000個前後と、非常に多い最下部の約56,000個を除き安定して検出されている。最も多く検出されているのはやはりネザサ節型で、試料4-2で突出した産状（約910,000個）を示す他は50,000個前後で、上部に向かい若干減少している。次いで多く得られているクマザサ属型も試料4-2で突出した産状を示すなど、ネザサ節型と同様の産出傾向を示している。ヨシ属も試料4-2でやや突出した産状を示し、その上位では減少している。ウシクサ族は増減を繰り返しており、その他、キビ属が若干検出されている。

地点３（Ａ～Ｆ）：イネは、試料Ｅ（7,500個）を除き10,000個以上と多く検出されている。やはり最も多く検出されているネザサ節型は、最上部の試料Ａで最も少ない約350,000個を、また、試料Ｄで突出した数値約910,000個を示す他は550,000個前後である。この試料Ｄにおける突出した産状はクマザサ属型（約87,000個）やウシクサ族（約95,000個）にも認められ、その他の試料についてクマザサ属型は50,000個前後を示し、ウシクサ族は上部に向かい増加するが、最上部では減少している。ヨシ属は最下部で10,000個を越え、ヨシ属としては非常に多く検出されており、試料Ｄにおいても多く検出されている。その他、シバ属、キビ属などが若干検出されている。

３．稲作について

上記したように、全試料よりイネのプラント・オパールが検出された。検出個数の目安として福岡市の板付北遺跡では、プラント・オパールが試料１ｇ当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。これに従えば、各試料とも5,000個以上のプラント・オパールが検出されており、稲作の可能性はプラント・オパール分析からは判断される。また、地点３の試料について予察的に花粉分析を行った結果、イネ科花粉が多く検出されており、水生植物（抽水植物）のオモダカ属が全試料から検出されるなど、水田雑草を含む分類群（オモダカ属・ミズアオイ属・キカシグサ属）も検出されている。このように、プラント・オパール分析および花粉分析結果から水田稲作が予想され、検出された水田遺構を支持する分析結果を示している。

また、地点３の最下部（４層）から多くのイネのプラント・オパールが検出されている。この４層は水田遺構のベースと考えられているが、今回の結果から当遺跡においては13世紀以前においても水田稲作が行われていた可能性は高いと判断される。なお、高松市伏石町に所在する居石遺跡においては縄文時代晩期の中頃から末にかけてと古代以降に稲作が営まれていたと考えられている（外山1995）。

４．遺跡周辺のイネ科植物

非常に多く検出されているネザサ節型のササ類（ゴキダケ、ケネザサ（ミヤコネザサ）は主に日のあたる開けたところに生育するササ類で、遺跡周辺丘陵部や住居の存在が予想される微高地、水田周辺の比較的乾いたところなどに普通にみられたのであろう。また、ウシクサ族（ススキ、チガヤなど）も同様のところでの生育が考えられ、ネザサ節型のササ類とともに草地を形成していたと思われる。

低地部では先にも記したが、中世以前においても稲作が行われていた可能性が高く、こうした水田周辺の水路などにヨシ属が多く生育していたものとみられる。その後、水田域の拡大・整備などによりヨシ属はその生育地を挟めたと推測される。また、シバ属は畦など比較的乾いたところに生育していたものとみられる。

クマザサ属型のササ類（ミヤコザサ、スズタケ、チマキザサなど）については、主に林下での生育が予想され、遺跡周辺の山地丘陵部に存在していたであろう森林の下草的存在で分布を広げていたと推測される。

なお、キビ属が少ないながら検出されているが、その形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、タイヌビエなどの雑草類によるものか分類できないのが現状であり、検出されたキビ属が栽培種によるものかどうかは不明である。

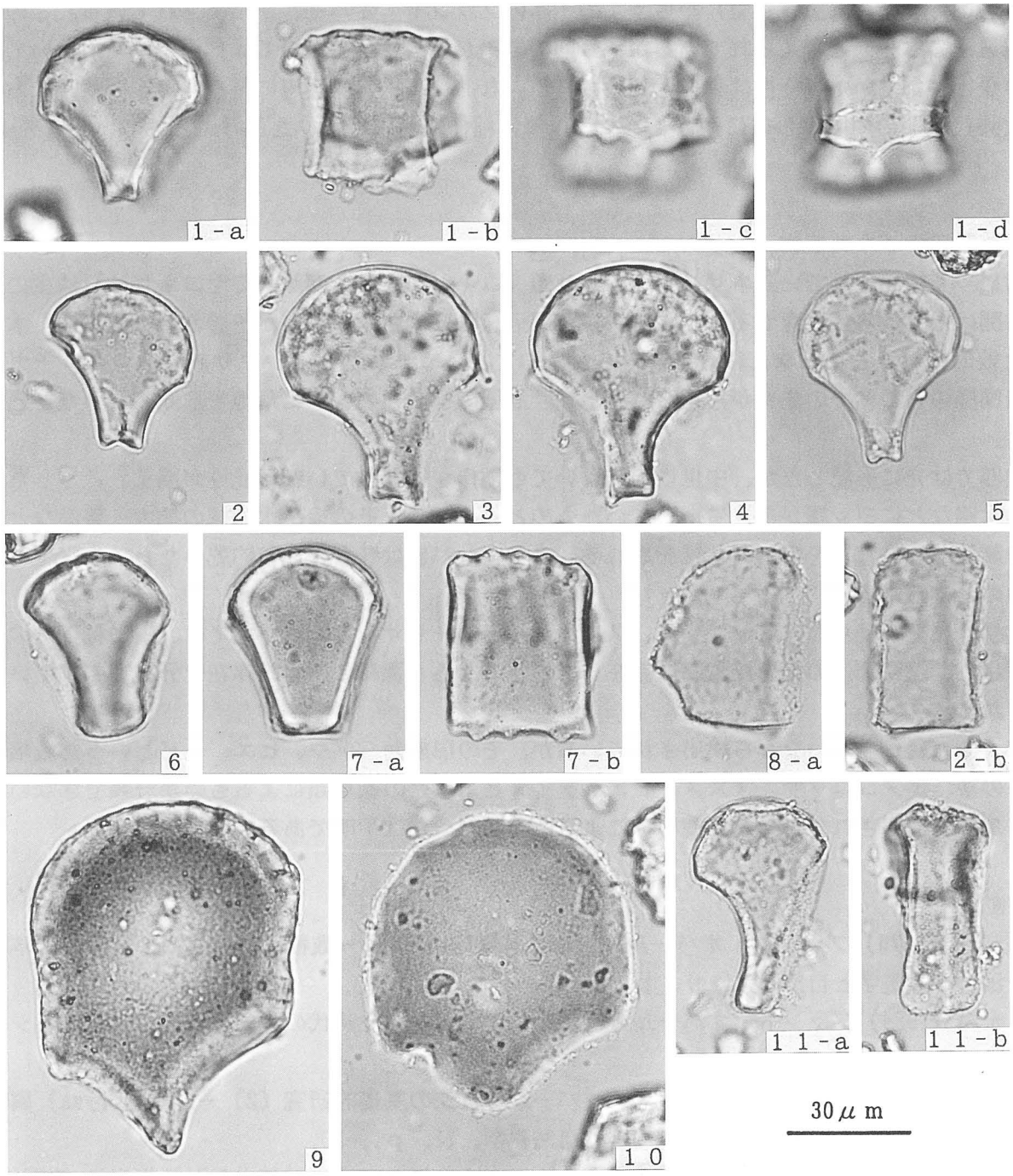
引用文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学、９、ｐ．15-29.

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－．考古学ジャーナル、227、ｐ．2-7.

藤原宏志・佐々木彰（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）－イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状－．考古学と自然科学、11、ｐ.9-20.

外山秀一（1995）居石遺跡におけるプラント・オパール分析．高松市埋蔵文化財調査報告 第30集 一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第七冊　居石遺跡、高松市教育委員会・建設省四国地方建設局、ｐ.193-210.



図版2　境目・下西原遺跡のプラント・オパール

1～5：イネ（1-a，2～4：断面、1-b，1-c：側面、1-d：表面）
1：F、2：3-1、3，4：4-2、5：5-1

6、7：ネザサ節型（6，7-a：断面、7-b：側面）　6：4-1、7：5-1

8：クマザサ属型（8-a：断面、8-b：側面）　3-2

9、10：ヨシ属（断面）　9：F、10：3-2

11：ウシクサ族（11-a：断面、11-b：側面）　4-2

第２節　境目・下西原遺跡の花粉化石

高松市木太町に所在する境目・下西原遺跡において行われた発掘調査で、中世初（13世紀）の水田遺構が検出された。このように、13世紀と時代が限定されていることから、この時期における遺跡周辺の植生について検討できることは意義深いと考え、水田遺構を埋積する土壌について花粉分析を行い、13世紀における遺跡周辺の古植生について検討した。

１．試料と分析方法

試料は、地点３より採取された６点（試料Ａ～Ｆ）で、おおむね灰褐色の砂質シルトである。なお、試料採取地点付近の土層断面や各試料の記載についてはプラント・オパール分析の章を参照して頂きたい。この６試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（混重約２～４ｇ）を遠沈管にとり、10％の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5㎜目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46％のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

２．分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉31、草本花粉27、形態分類で示したシダ植物胞子２、藻類１の総計61である。これら花粉・シダ植物胞子・藻類の一覧を表２に、主要な花粉・シダ植物胞子の分布を図100に示した。なお、分布図における樹木花粉は樹木花粉総数を基数に、草本花粉およびシダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものをしめし、クワ科・バラ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

検鏡の結果、コナラ属アカガシ亜属の優占で特徴づけられ、同じ常緑広葉樹ではシイノキ属－マテバシイ属（以後シイ類と略す）・ユズリハ属などが検出されている。アカガシ亜属に次いでコナラ属コナラ亜属が多く、同じ落葉広葉樹類ではサワグルミ属－クルミ属・クマシデ属－アサダ属・ニレ属－ケヤキ属などが検出されている。また、針葉樹類ではスギが５％前後でもっとも多く、その他、ツガ属・マツ属複維管束亜属（アカマツ・クロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）・コウヤマキ属・イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）などが産出している。草本類はイネ科が最も多く、次いでカヤグリグサ科・ヨモギ属が１％を越えて検出されている。また、水生植物（抽水植物）のオモダカ属も全試料１％以上を示しており、同じ水生植物のサジオモダカ属・イボクサ属・ミズアオイ属・キカシグサ属なども比較的検出されている。

３．境目・下西原遺跡周辺の古植生

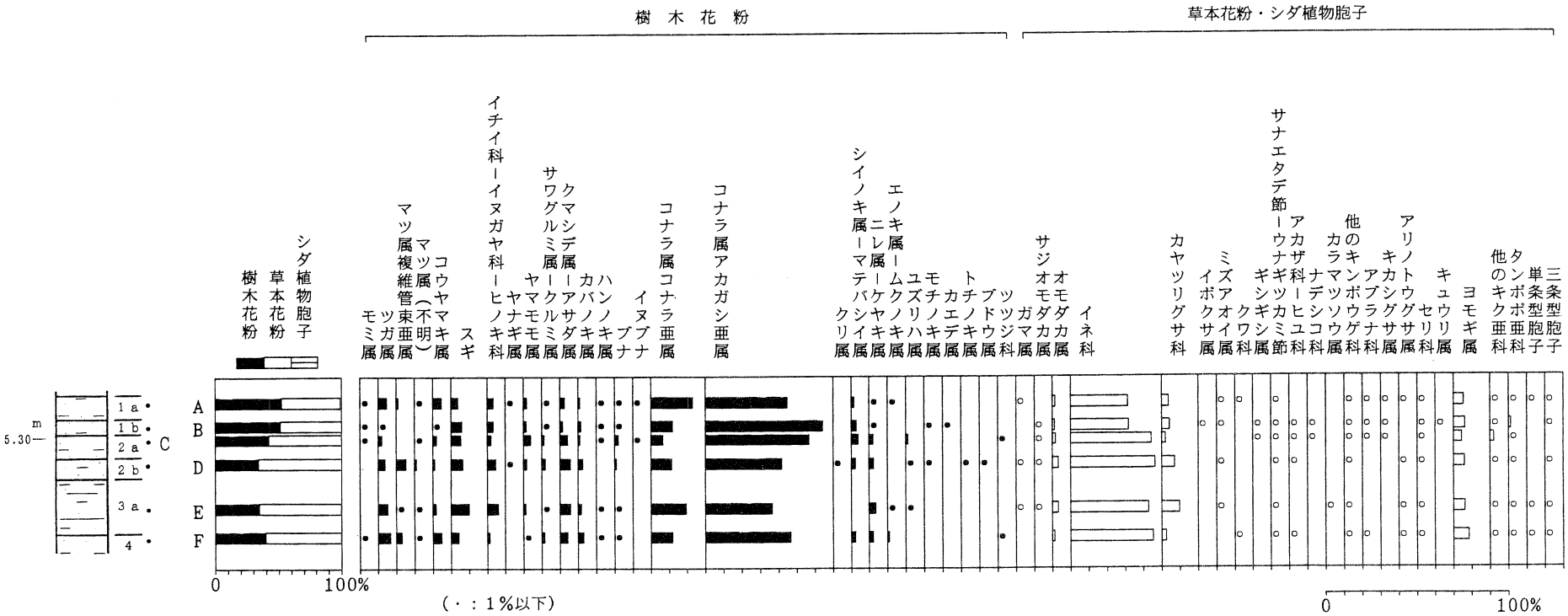
以上のような花粉分析結果から、中世初期（13世紀）の境目・下西原遺跡周辺の古植生は以下のようであったと推測される。

中世初期（13世紀）の遺跡周辺丘陵部や微高地ではシイ類を交えたアカガシ亜属を主体とした照葉

表 2　境目・下西原遺跡の産出花粉化石一覧表

和名	学名	A	B	C	D	E	F
樹木							
モミ属	*Abies*	1	1	1	-	-	1
ツガ属	*Tsuga*	11	1	5	9	11	17
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	3	-	-	12	1	8
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	1	-	1	3	2	2
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	11	2	5	3	4	12
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	9	14	13	15	21	11
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	8	8	5	11	13	4
ヤナギ属	*Salix*	1	-	-	1	-	-
ヤマモモ属	*Myrica*	4	4	9	4	3	2
ノグルミ属	*Platycarya*	-	-	-	-	1	-
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	2	1	3	5	2	4
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	6	4	10	13	12	11
カバノキ属	*Betula*	3	4	3	6	4	8
ハンノキ属	*Alnus*	2	1	1	-	2	1
ブナ	*Fagus crenata* Blume	1	1	5	3	2	1
イヌブナ	*Fagus japonica* Maxim.	1	-	1	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	51	27	15	26	40	29
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	99	144	126	93	75	113
クリ属	*Castanea*	-	-	-	1	-	-
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	4	7	9	6	-	6
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	1	2	5	6	8	6
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	1	-	-	-	1	3
ユズリハ属	*Daphniphyllum*	-	-	3	1	1	-
モチノキ属	*Ilex*	-	1	-	1	-	-
カエデ属	*Acer*	-	1	-	-	-	-
トチノキ属	*Aesculus*	-	-	-	1	-	-
ブドウ属	*Vitis*	-	-	-	1	-	-
グミ属	*Elaeagnus*	-	-	-	-	-	1
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	-	1	-
ツツジ科	Ericaceae	-	-	1	-	-	1
エゴノキ属	*Styrax*	-	-	-	1	-	-
草本							
ガマ属	*Typha*	1	-	-	2	3	-
サジオモダカ属	*Alisma*	-	1	1	1	5	-
オモダカ属	*Sagittaria*	6	5	8	20	18	7
イネ科	Gramineae	131	138	231	304	251	274
カヤツリグサ科	Cyperaceae	16	19	11	47	58	15
イボクサ属	*Aneilema*	-	1	-	-	-	-
ミズアオイ属	*Monochoria*	1	1	-	4	2	-
クワ科	Moraceae	1	-	-	-	-	1
ギシギシ属	*Rumex*	-	1	1	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	1	1	1	3	2	1
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	-	-	-	-	-	1
他のタデ属	other Polygonum	-	1	-	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	1	2	1	-	1
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	1	3	-	-	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	-	-	-	1	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	3	1	4	1	1	4
アブラナ科	Cruciferae	2	1	1	-	-	1
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	-	-	1	-	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	1	-	1	-	-	-
キカシグサ属	*Rotala*	1	1	1	-	-	-
ミズユキノシタ属	*Ludwigia*	-	-	-	1	-	-
アリノトウグサ属	*Haloragis*	1	-	-	1	1	1
セリ科	Umbelliferae	2	4	1	1	1	2
キュウリ属	*Cucumis*	-	1	-	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	23	27	23	39	37	51
他のキク亜科	other Tubuliflorae	2	1	10	6	1	2
タンポポ亜科	Liguliflorae	4	5	1	2	1	1
シダ植物							
単条型胞子	Monolete spore	3	-	-	-	1	1
三条型胞子	Trilete spore	1	1	-	1	1	1
黄緑色藻類							
	Botryococcus braunii Kutzing	1	1	-	1	2	1
樹木花粉	Arboreal pollen	220	223	221	222	204	241
草本花粉	Nonarboreal pollen	196	211	301	433	382	362
シダ植物胞子	Spores	4	1	0	1	2	2
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	420	435	522	656	588	605
不明花粉	Unknown pollen	14	22	16	26	9	14

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す



第100図　境目・下西原遺跡地点３の主要花粉化石分布図

（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

樹林が優勢であった。また、コナラ亜属を中心にクマシデ属－アサダ属・ニレ属－ケヤキ属などの落葉広葉樹林も分布を広げていた。その他、スギ・ツガ属・ヒノキ類・コウヤマキ属といった温帯針葉樹類も照葉樹林や落葉広葉樹林に交じって生育していた。なお、プラント・オパール分析からこれら森林植生とともに一部にはネザサ節型のササ類（コキダケ・ミヤコネザサなど）やウシクサ属（ススキ・チガヤなど）が生育する草地も存在していた。

なお、先に報告した居石遺跡（伏石町所在）の中世～近世においてはニヨウマツ類が優占しており、それ以前では温帯針葉樹類を交えた照葉樹林が優勢であった（鈴木1995）。こうしたことから、13世紀における当遺跡周辺の照葉樹林を主体とした植生は、以後にみられるであろうニヨウマツ類の増加直前の植生を示していると推測される。また、居石遺跡にみられるニヨウマツ類優占期は14世紀以降と考えられよう。

一方、低地部においては水田遺構の検出とプラント・オパール分析結果から支持されるように、水田稲作が営まれていたと推測され、こうした水田域には水生植物のサジオモダカ属・オモダカ属・ミズアオイ属・キカシグサ属といった水田雑草類が生育していた。その他、カヤグリグサ科・アカザ科－ヒユ科・キンポウゲ科・セリ科・ヨモギ属・キク亜科・タンポポ亜科なども水田域や畦などに生育していた。また、プラント・オパール分析からヨシ属やシバ属もみられたと推測される。

以上のように、13世紀の境目・下西原遺跡周辺の古植生について、丘陵部や微高地ではアカガシ亜属を主体とした照葉樹林が優勢であり、コナラ亜属を中心とした落葉広葉樹林も分布を広げていた。また、ツガ属・スギ・ヒノキ類などの温帯針葉樹類もこれらに交じるように生育しており、一部にはネザサ節型のササ類やウシクサ属などが生育する草地も存在していた。一方、低地部では水田稲作が行われており、こうした水田にはオモダカ属やミズアオイ属などの水田雑草類が生育していた。また、カヤツリグサ科・キンポウゲ科・セリ科・キク科・ヨシ属・シバ属などが水田域や畦などにみられた。

引用文献

鈴木　茂（1995）居石遺跡の花粉化石．高松市埋蔵文化財調査報告第30集　一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第７冊　居石遺跡、高松市教育委員会・建設省四国地方建設局、p．193-210.

第５章　調査の成果と問題点

第１節　香川県における水田遺構

１．はじめに

1988年に刊行された『水田遺構集成』[1]に収録されている香川県の水田遺構は、下川津遺跡の１例のみであり、四国四県でも高知県・徳島県に１遺跡づつあるだけである。四国で３遺跡という数は、当時全国で200余りの水田遺構が検出されているのに比較すると、非常に少ないと言える。四国は水田遺構の空白地域であった。この状況はその後も変わらなかった。しかし、四国横断自動車や関連する道路、区画整理、さらに民間開発に伴う大規模な発掘調査の急激な増加によって、水田の検出例も少しづつ増えてきた。その結果、現在香川県における水田遺構は本遺跡を含めて19遺跡を数える。時代は弥生時代前期から近世までの長期間にわたっている。ここでは、県内の水田遺構を時代別に集成し、水田区画の特徴や変遷について若干まとめてみたい。

２．水田の概要

弥生時代

川津下樋遺跡[2]　坂出市川津町

水田は大・中・小畦畔によって方各状に区格された不定形小区画水田であり、微高地のわずかな凹地に立地する。平面形は南北にやや長い長方形を呈し、一辺は南北2.50～4.40m、東西2.55～3.45mを測り、平均面積は10m^{2}である。時期は縄文時代晩期から弥生時代中期である。

弘福寺領山田郡田図比定地域[3]　高松市林町

昭和63年度と平成元年度調査区において後背湿地に立地する２面の不定形小区画水田が検出された。上面の水田は畦畔によって長方形ないし多角形に区画され、調査面積が狭いため水田の規模は不明である。時期は弥生時代後期以前である。下面の水田は南北と東西の畦畔によって規則的な方各状に区画される。その規模は２×４mの長方形である。時期は弥生時代中期前半以前である。

上西原遺跡[4]　高松市木太町

旧河道の斜面上に立地する水田が検出された。水田は南北・東西の畦畔によって整然とした方格状に区画された部分と畦畔のない部分がある。前者は５×10mを測る不定形小区画水田である。遺物の出土が非常に少なく、時期は不詳であるが弥生時代中期前半以前と推定される。

浴・長池Ⅱ遺跡[5]　高松市林町

微高地上のわずかな凹みに立地する水田が県内最大の約2000m^{2}の範囲で検出された。水田は畦畔により整然とした方格状に区画された不定形小区画水田であり、総計315区画を確認する。規模は２×４mの長方形を呈し、面積は1.3～19m^{2}を測り、平均5.76m^{2}である。大畦畔を境に水田区画の方向が若干異なる。時期は弥生時代中期前半以前である。

浴・長池遺跡[6]　高松市林町

微高地上のわずかな凹みに立地する水田が24区画検出された。水田は南北・東西の畦畔により整然と方格状に区画された不定形小区画水田である。規模は２～３×４～７mを測る長方形であり、面積は６～10.9m^2、平均9.96m^{2}である。時期は弥生時代前期末以前である。

下川津遺跡[7] 坂出市川津町

微高地間の低地帯（旧河道）に検出された水田は、畦畔により区画された不定形小区画水田である。総計24区画を確認する。平面形は長方形・三角形・扇形を呈し、平均面積は46.1m²を測り、やや面積が広い。時期は弥生時代後期後葉である。

古墳時代

飯野・東二瓦礫遺跡[8] 丸亀市飯野町

微高地上のわずかな凹みに立地する水田が検出された。水田は畦畔により区画されて不定形小区画水田であり、16区画を確認する。平面形は長方形を呈し、規模のわかる水田はないが長軸４～７ｍを測る。時代は古墳時代である。

国分寺・下日名代遺跡[9] 綾歌郡国分寺町

旧河道が埋没してできた凹みにおいて、人工的に整地した部分が確認され、多数の足跡が検出された。何らかの土地利用がなされたと考えられる。時期は古墳時代～平安時代である。

浴・松ノ木遺跡[10] 高松市林町

旧河道が埋没してできた凹みに水田が検出された。水田は南北・東西の畦畔により方格状に区画された不定形小区画水田で、総計58区画を数える。平面形は南北に長軸を持つ長方形を呈し、0.87～2.40×2.10～6.70ｍを測り、平均面積は４m²台である。時期は５世紀末～６世紀初である。

川津中塚遺跡[11] 坂出市川津町

調査区南壁に畦畔状の高まりを確認した。幅1.34ｍ、高さ17cmを測る。

古代

下川津遺跡

低地帯（旧河道）に検出された２面の水田は、畦畔により方格状に区画された不定形小区画水田である。１面の水田は18区画を検出し、平面形は比較的整った方形を呈し、平均面積は108.50m²である。畦畔は条里地割と同方向を示し、条里制との関連が考えられる。時期は奈良時代前半である。別の水田は19区画を検出し、長方形を呈する。規模は2.00～14.00×2.40～17.50ｍを測る。時期は８世紀後半～11世紀前半である。

川津一ノ又遺跡[12]

旧河道の埋没した凹みに検出された水田は、畦畔によって方形ないし長方形に区画される不定形小区画水田である。規模は5.50×7.00ｍで、木樋も検出される。時期は奈良時代である。

兀塚遺跡[13] 高松市檀紙町

旧河道の埋没した凹みに検出された。水田は大小の畦畔によって区画された不定形小区画水田であり、総計15区画が確認された。面積は25～47m²である。時期は古代前半頃である。

空港跡地遺跡[14] 高松市林町

旧河道の埋没した凹みにおいて２面の水田が検出された。上面の水田は畦畔によって長方形に区画され、総計８区画が確認された。短辺は７～８ｍ、長辺は約30ｍを測る。水田は旧河道の方向に規制されている。時期は10～13世紀頃である。下面の水田は短辺約８ｍを測る。時期は10世紀以前である。

浴・長池遺跡

旧河道の埋没した凹みに検出された。水田は畦畔によって方形区画された不定形小区画水田である。総計で36区画が確認され、面積は1.60～22.7m²を測り、平均9.37m²である。地形の傾斜に応じた区画である。時期は９世紀である。

中世～近世

川津一ノ又遺跡

旧河道の埋没した凹みの上層において検出された。用水路沿いに畦畔が部分的に検出したのみであり、水口を確認した。時期は中世である。

兀塚遺跡

旧河道の埋没した凹みの上面に検出された。水田は畦畔によって区画され、４区画が確認された。面積等は不明。時期は13～14世紀を下限とする。

百相坂遺跡[15]　高松市仏生山町

旧河道の埋没した凹みの上面において水田面及び畦畔・水口を検出した。畦畔は長さ13.3ｍを測り、版築状構造をなす。水田の検出面積は67㎡以上である。時期は中世である。

東山崎・水田遺跡[16]　高松市東山崎町

旧河道の埋没した凹みに検出された。水田は南北・東西方向の直線的な畦畔によって方形に区画される。調査区が狭いため面積は不明である。時期は中世あるいは近世である。

浴・長池遺跡

旧河道の埋没した凹みに２面の水田が検出された。両面の水田とも南北・東西の畦畔によって方格状に区画された不定形小区画水田であり、上面で28区画、下面で70区画が確認される。上面水田の面積は5.10～24.90㎡、下面は4.10～20.50㎡である。時期は12世紀末～13世紀初である。

浴・松ノ木遺跡

旧河道の埋没した凹みに２面の水田が検出された。両面の水田とも南北・東西の畦畔によって方格状に区画された不定形小区画水田であり、上面は95区画確認され、面積は1.70～18.60㎡である。下面は126区画で、面積は2.50～28.40㎡である。時期は、共に12世紀末～13世紀初である。

松縄下所遺跡[17]　高松市松縄町

調査区北西部の微高地上に検出された。水田は南北・東西の畦畔によって方格状に区画された不定形小区画水田である。時期は中世である。

蛙股遺跡[18]　高松市太田下町・伏石町

旧河道の埋没した凹みの上面に検出された。不規則な２本の畦畔が検出され、土層断面に４～５ｍ間隔の畦畔状遺構が確認された。時期は12世紀中頃である。この水田の上にほぼ同時期の水田面があり、哺乳類の足跡が検出された。

弘福寺領山田郡田図比定地域

後背湿地の埋没した凹みの上面に検出された。畦畔は検出されなかったが、南北・東西の方向の溝がほぼ９ｍ間隔で検出され、人間や哺乳類の足跡・犂跡が確認された。長期間安定した地表面であったと考えられ、13世紀初を下限とする。

宮尻上遺跡[19]　高松市多肥下町

水田畦畔が検出された。幅は１ｍ強でほぼ南北に延びる。調査区南側の微高地縁辺では南東方向に畦畔が分岐する。時期は不詳だが、近世と推定される。

３　各時代の水田の特徴

弥生時代の水田形態は、畦畔によって区画された不定形小区画水田であり、平面形は長方形を呈し、規模は一様に小さい。等高線と平行に基準となる畦畔を設定し、その後直交する畦畔を適時に設定する。配水方式としては、数カ所の水口もあるが基本的には畦畔掛け流し方式であり、水田面は僅かな

高低差を持つ。弥生時代の水田は土地の制約を強く受けている。県内の水田で注目すべき点は大部分の水田が20m²未満の面積であるのに対して、下川津遺跡では約40m²を測る広い水田であることである。また、水田の立地する場所は、旧河道と微高地上の凹みに大きく分かれており、旧河道に水田が検出されたのは下川津遺跡のみである。このように下川津遺跡の水田は、規模・立地に関して特異な存在である。他の遺跡はすべて微高地上の凹みに検出され、その形態を詳細に検討すると２種類に細分される。すなわち、浴・長池Ⅱ遺跡のように広い範囲に水田が検出される場合と浴・長池遺跡のように狭い凹みに検出される場合である。前述した２遺跡の水田は旧河道を挟んで近接する位置関係にあるが、その形態は異なっている。この違いは水田の造営基盤となる集落の大きさに起因すると考えられる。しかし、高松平野では水田と母体の集落を結びつけることができる遺跡は、現在まで明らかになっていない。特に、浴・長池Ⅱ遺構の水田は約2000m²以上という広大な面積であり、この水田の造営だけでなく潅漑施設、さらに農作業を含めた米作りには大きな労力が必要であっただろうし、それを指導する中心人物（支配者）の存在も必須であったと考えられる。今後、これらの水田の周辺部で集落の検出が求められる。

古墳時代の水田で明確な区画が分かるのは、飯野・東二瓦礫遺跡と浴・松ノ木遺跡のみであり、全時代の中で最も件数が少ない。水田は畦畔によって方格状に区画された不定形小区画水田であるが、立地は微高地上の僅かな凹みと旧河道の埋没した凹みに分かれる。浴・松ノ木遺跡では検出面積は狭いが水田土壌層が微高地上にも確認されており、本来の水田はもっと広範囲に広がっていたと考えられる。しかし、水田の区画は土地の傾斜に基づいた小区画である。弥生時代と比較して弱くなっているとは言え、依然として土地条件の制約を受けている。古墳時代の経済的基盤は稲作であると考えられているにもかかわらず、全国的に水田の検出は非常に少ない。高松平野では多数の古墳はあるが、住居址（集落）はほとんど見つかっていない。

古代の水田形態はほとんど一様である。旧河道の埋没してできた凹みにおいて検出され、畦畔によって方格状に区画された不定形小区画水田である。しかし、詳細に見ると区画にわずかな違いを見いだせる。高松平野で近接する空港跡地遺跡と浴・長池遺跡を比較すると、水田の平面形や規模に相違点がある。前者は短辺７～８ｍ×長辺30ｍを測り、整然とした長方形を呈する。長地型に近い水田である。後者は基本的には方格状に区画されるが、畦畔が曲がっていたり平面形の不整備な水田もある。その面積は1.60～22.70m² を測り、最大面積でも前者の約1/10である。弥生時代の不定形小区画水田に近い形態である。両遺跡とも旧河道の方向に規制されているが、後者の方がより強く土地の規制を受けていると言える。

当該時期の水田に関して最も重要な問題は、条里制である。現在までに高松平野において、空港跡地遺跡や高松東道路建設に伴う発掘調査、都市計画道に伴う発掘調査等によって条里地割に比定される溝状遺構が多数検出されている。さらに、高松市が実施している弘福寺領讃岐国山田郡図比定地域事業により条里地割の復原が行なわれており、高松平野の条里地割の概要は次第に明らかになってきた。しかし、条里制施行の時期に関しては不明な部分がある。この問題を考える上で重要な遺跡が、松縄下所遺跡と小山・南谷遺跡、新田・本村遺跡である。松縄下所遺跡では、幅２ｍ間隔の平行溝が南北方向に約200ｍ以上検出され、直交する溝や規則的に配置された掘立柱建物群もある。この溝は復原条里坪界線とは若干ずれているが、計画的な幹線道路であると考えられる。７世紀中頃～８世紀後半に比定される土器が出土しており、高松平野の条里施行時期がこの時期まで溯ることができる。小山・南谷遺跡[20]と新田・本村遺跡では、南海道基準の山田郡条里地割りとは方向が異なる条里坪界線の溝とそれに伴う集落、条里施行時の整地面の下で建物群・井戸・溝が検出された。井戸や溝の整

地層から７世紀末～８世紀初頭に比定される土器が出土した。空港跡地遺跡においては、８世紀末～９世紀初頭と考えられる溝が復原条里地割と同方向で検出されている。これらの実例が示すように高松平野では７世紀中頃～８世紀初頭には条里制が施行されていたと考えられる。

中世の水田は本遺跡を含めて最も多い11遺跡を数える。検出されたのは旧河道の埋没してできた凹みの上面のみであるが、浴・長池遺跡や浴・松ノ木遺跡では微高地上にも土壌層が検出されており、畦畔等は後世の削平で消滅しているが本来の水田は条里制に基づいて広範囲に広がっていたと思われる。しかし、検出された水田の大部分は畦畔で区画された不定形小区画水田であり、基盤地形による区画の乱れが一部見られるが全体としては正方位で方格状の地割となっている。これは大規模な条里型水田と異なる様相を呈しているが、小区画が長方形地割りを細分したものであると考えるとこの小区画水田は条里方地割りに基づいた区画である。一方、本遺跡の水田は４ｍないし６ｍ間隔を測る南北方向の畦畔によって長方形に区画されている。調査面積が限られているため水田の長辺の長さは不明であり、水田の規模は分からないが、畦畔の方向が山田郡・香川郡の郡界線に比定されている水路と同じであり、その間隔も条里制の基準によるものである。明らかに条里地割りの水田であると考えられる。このように、中世の水田遺構の形態には、小規模な区画の水田と規則的な長方形の区画の水田の２種類がある。

註

1）奈良国立文化財研究所編『水田遺構集成』 1988年

2）片桐孝浩『川津下樋遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1996年

3）高松市教育委員会『弘福寺領讃岐国山田郡図比定地域発掘調査概報Ⅱ』 1989年
『弘福寺領讃岐国山田郡図比定地域発掘調査概報Ⅲ』 1990年
『讃岐国弘福寺領の調査』 1992年

4）山本英之「上西原遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成７年度』香川県教育委員会 1996年

5）山本英之・山元敏裕『浴・長池Ⅱ遺跡』高松市教育委員会・建設省四国地方建設局 1994年

6）山本英之・山元敏裕・中西克也『浴・長池遺跡』高松市教育委員会・建設省四国地方建設局 1993年

7）藤好史郎・西村尋文・大久保徹也『下川津遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1990年

8）山下平重『飯野・東二瓦礫遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1996年

9）渡辺茂智・古野徳久「国分寺下日名代遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成元年度』(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1990年

10）山本英之・山元敏裕・中西克也『浴・松ノ木遺跡』高松市教育委員会・建設省四国地方建設局 1994年

11）真鍋昌宏・西岡達哉・山下平重『川津中塚遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1994年

12）山下平重『川津一ノ又遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1997年

13）蔵本晋司他『冗塚遺跡』『香川県埋蔵文化財調査年報 平成７年度』香川県教育委員会 1996年

14）廣瀬常雄・西村尋文『空港跡地遺跡発掘調査概報 平成３年度』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1992年
大山真充他『空港跡地遺跡発掘調査概報 平成４年度』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1993年

15）片桐孝治『百相坂遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1997年

16）森下友子・蔵本晋司『東山崎・水田遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局 1992年

17）山本英之「松縄下所遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成4年度』香川県教育委員会 1993年
「松縄下所遺跡」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会 1992年

18）山元敏裕・中西克也『蛙股遺跡』高松市教育委員会・建設省四国地方建設局 1995年

19）山本英之「宮尻上遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成７年度』香川県教育委員会 1996年

20）片桐孝浩『小山・南谷遺跡Ⅰ』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局 1997年

第６章　おわりに

境目・下西原遺跡では、第３章で詳しく述べたように弥生時代～近世に至るまでの多くの遺構を検出することができた。その主な遺構としては、掘立柱建物・溝・土坑・水田・ピット・旧河道である。旧河道は厳密には遺構の範疇に入らないが、微地形復原に関する新たな資料を提供した。本遺跡の性格をまとめると、「生産遺跡」であると言える。

弥生時代の遺構は、２工区の旧河道と３工区の溝である。16条の溝は、幅７～９ｍを測るＳＤ308のような大規模な溝とＳＤ313、314のような小規模な溝の２種類がある。全ての溝は南から北方向に流れているが、その間隔や方向に規則性はない。その時期は弥生時代後期であるが、ＳＤ308出土の土器の中には後期終末ないし古墳時代初頭に比定されるものがある。

古代の遺構は、１工区の水田と旧河道、４工区の溝のみである。水田は局地的な不定形小区画水田であり、規模・平面形は調査面積が狭いため不明である。水田の一筆には不規則に人間の足跡や稲株痕が多数検出された。旧河道は水田と同時期であり、その堆積土中並びに河床から多量の土器片が出土し、同時に加工木や哺乳類と思われる顎骨・歯も出土した。

中世の水田は、旧河道が埋没してできた凹みの上面に３面検出された。Ⅱ期・Ⅲ期の水田は４ｍないし６ｍの規則的な間隔の畦畔によって長方形に区画されている。畦畔がほぼ同位置に重複してつくられていることは、これらの水田が10年とか20年の単位の間を置かず、連続して機能していたことを示している。水田面に13世紀初めと考えられる瓦器椀が出土しており、水田の時期の下限を示す。また、水田面には小ピットが直線的に並んでいるのが検出され、「稲架」である可能性が考えられる。今後のデータの増加によるさらなる検討が期待される。

近世の遺構は、１工区を除く全ての調査区において検出されている。遺構としては掘立柱建物・溝・土坑・柱穴であり、最も検出数の多い土坑は「肥溜め」であるとおもわれる。

第５章調査の成果と問題点では、香川県内の弥生時代から近世に至るまでの水田遺構を集成し、時代別にその区画の特徴や変遷に関して若干のまとめを行った。その結果、本遺跡の水田を含める13世紀初頭の水田は、浴・長池遺跡や浴・松ノ木遺跡のような方格状だが不定形小区画の水田と本遺跡のような短辺４ｍないし６ｍを測る長方形区画の水田の２形態あることが判明した。これらの水田は条里制の範疇内で異なる区画の水田であると考えられる。

現在までの水田遺構は高松平野から西讃地域にかけてのみ検出されているが、発掘調査の急増している東讃地域においても水田の検出が予想される。今後の水田遺構に関する研究課題としては、次の点が挙げられる。

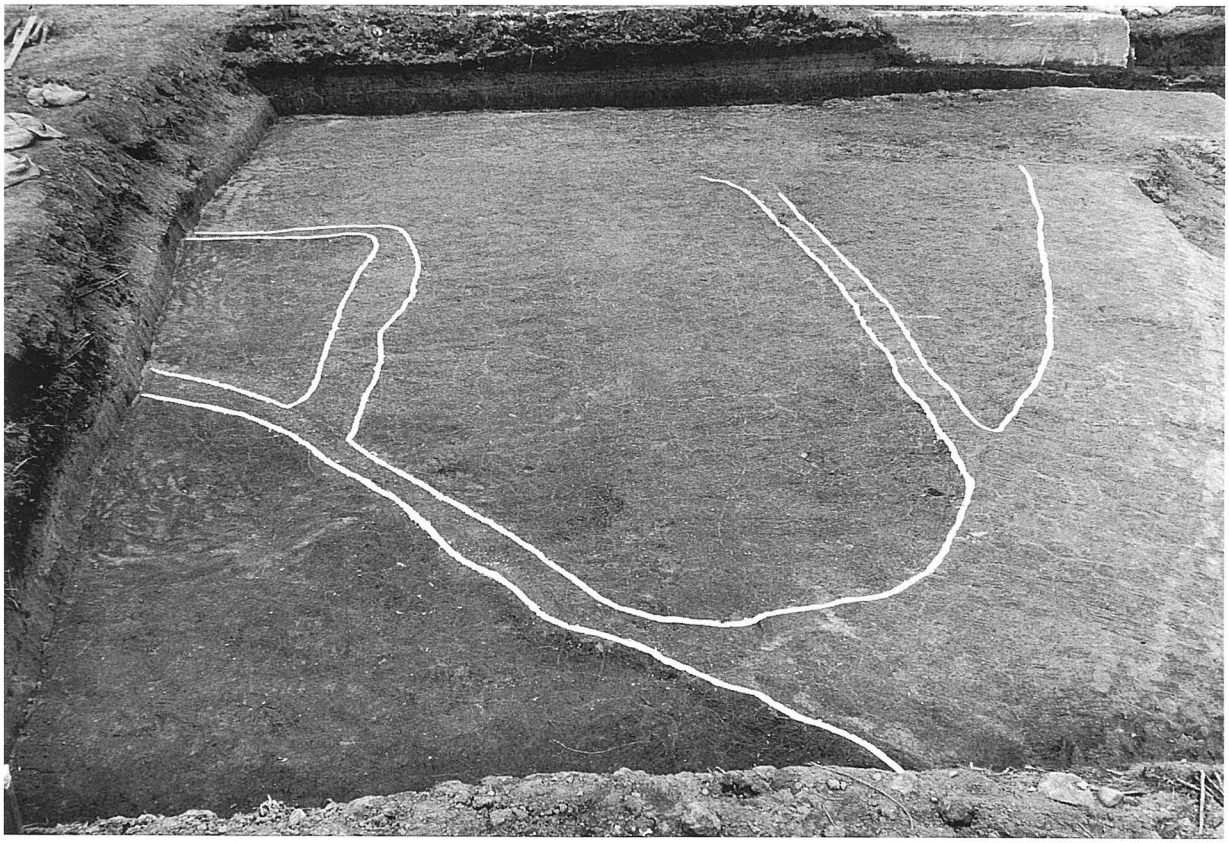
①稲作農耕伝播時の水田の検出
②母体となるべき集落の検出
③用水路や井堰等の灌漑施設

発掘調査を実施してから既に３年以上がすぎてやっと報告書が刊行されることとなった。これは太田第２土地区画整理事業に伴う報告書の第１冊である。日々の調査に追われ、調査員の記憶も薄れかけ、報告書として充実した内容を保っているか不安であるが、境目・下西原遺跡の調査によって当地域についていくつかの新知見を含む貴重な資料が得られ、大きな成果を挙げることができた。

図　　版

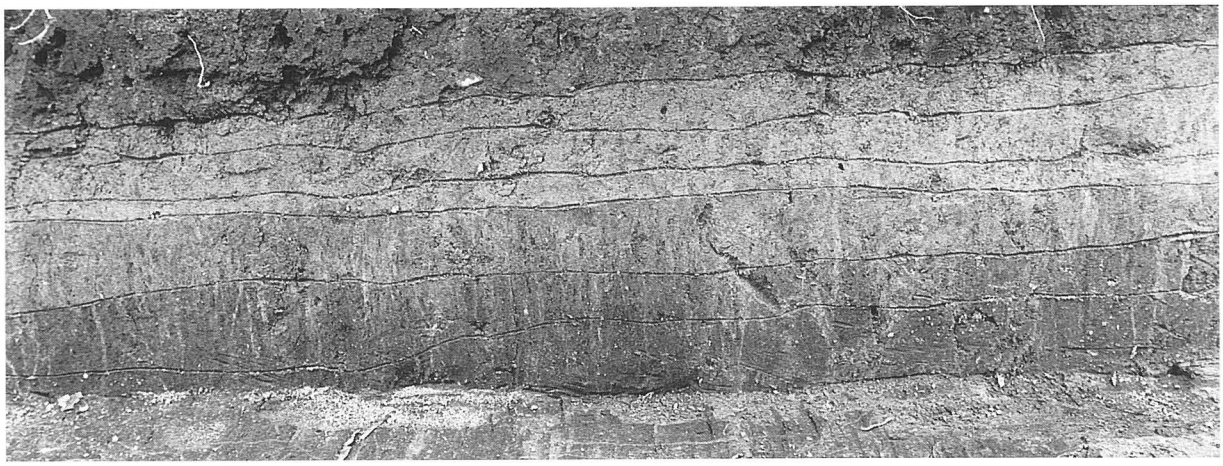
1．１工区完掘（西より）

2．１工区完掘（東より）



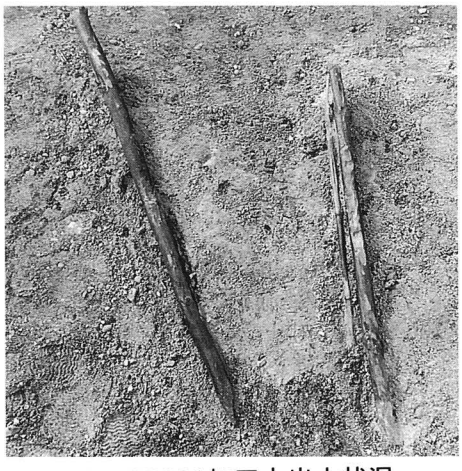
3．１工区水田

図版2

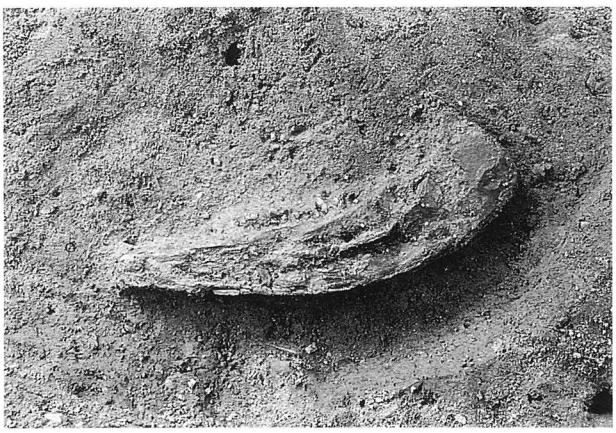


1．1工区土層断面

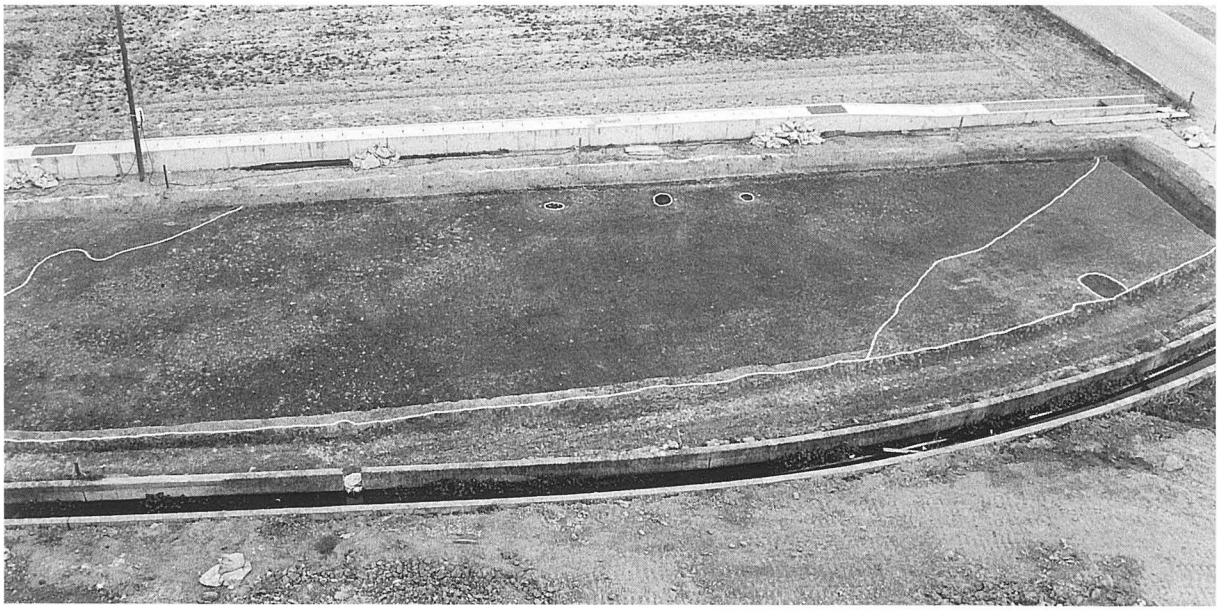
2．SR101



3．SR101加工木出土状況



4．SR101動物遺体出土状況

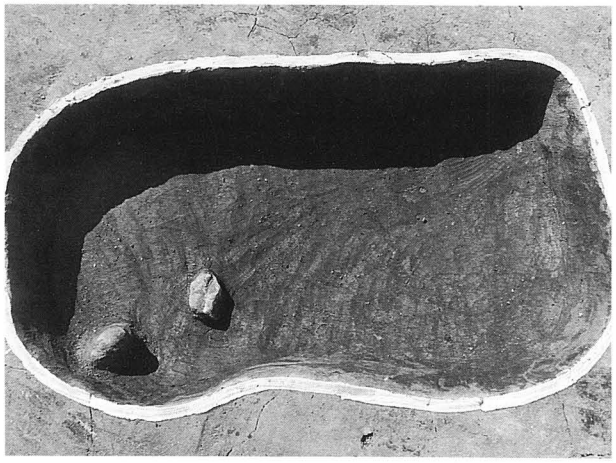


1．2工区（北側）完掘

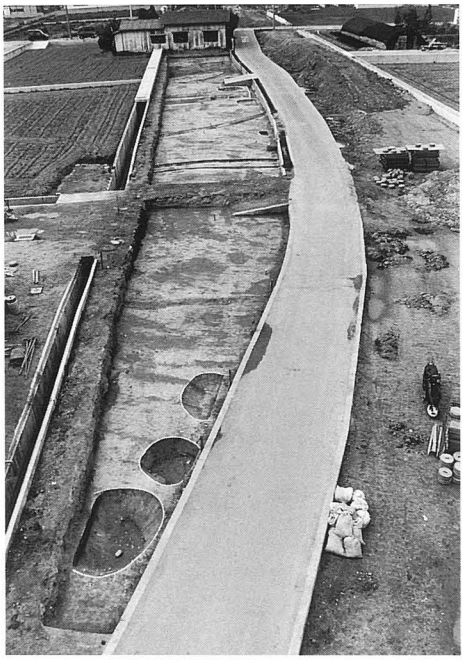
2．SB201

3．SK201

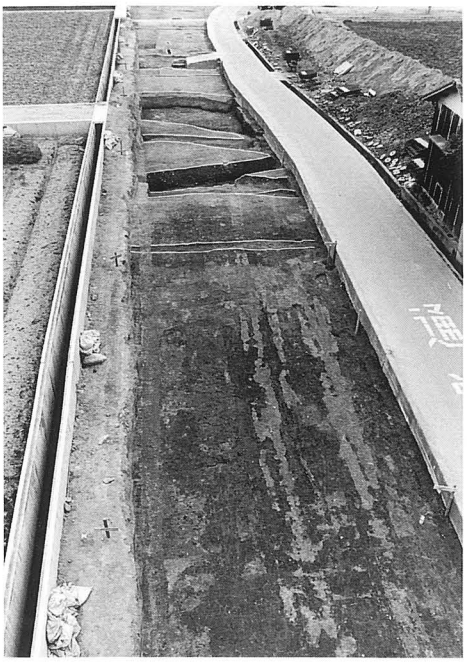
4．SK203



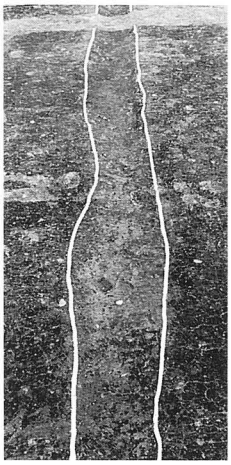
5．SK204



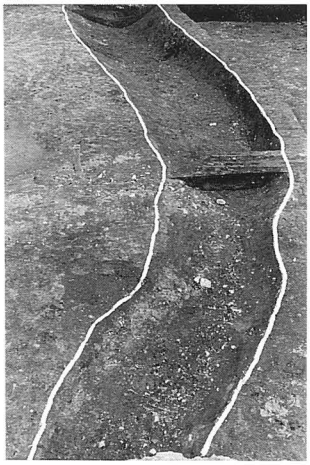
1．３工区（南側）完掘（東より）



2．３工区（北側）完掘（西より）

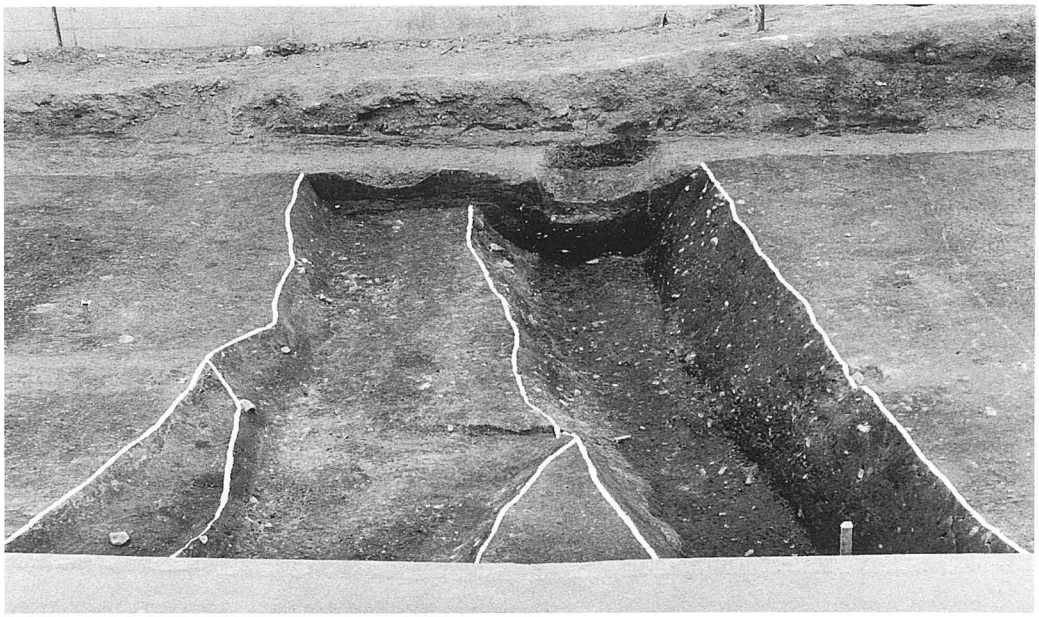


3．SD302



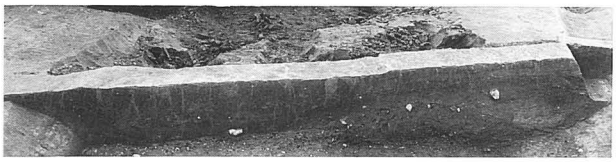
4．SD306

5．SD303,304,306

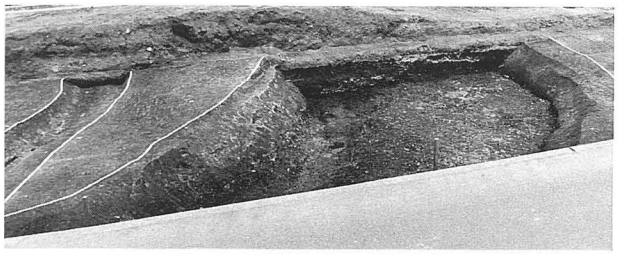


6．SD303、304、305

1．SD307,308（南側）



2．SD308断面

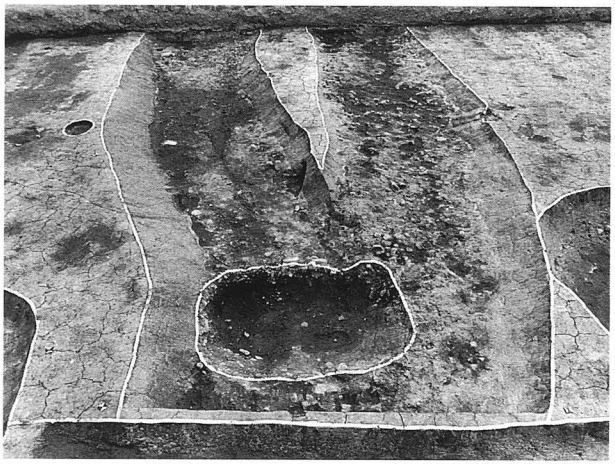


3．SD308（北側）

4．SD308遺物

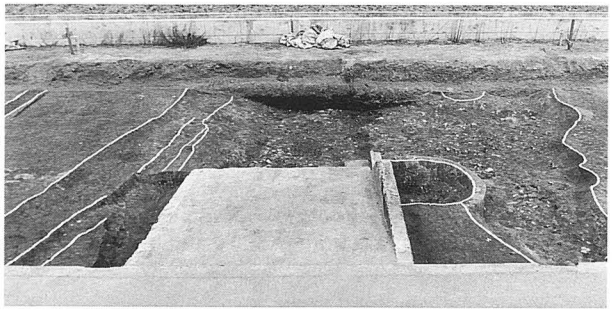
5．SD308遺物

6．SD308遺物



7．SD311（南側）

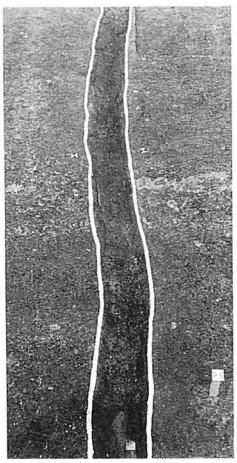
9．SD311遺物



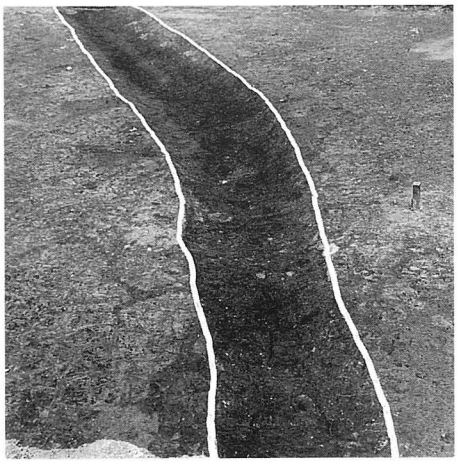
8．SD311（北側）

10．SD311遺物

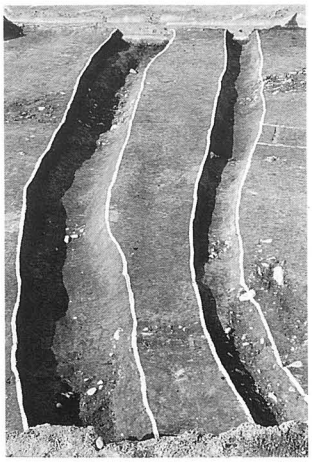
図版6



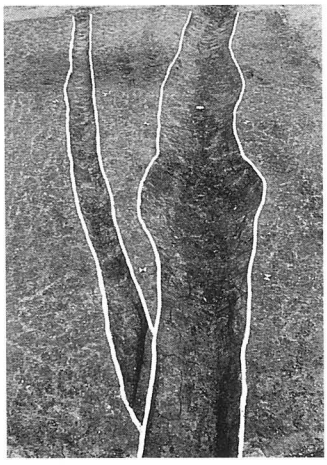
1．SD310



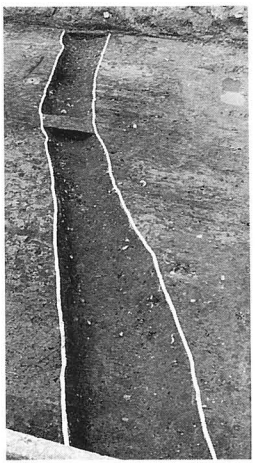
2．SD312



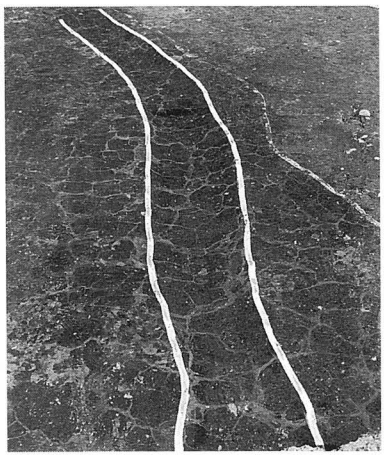
3．SD313、314（南側）



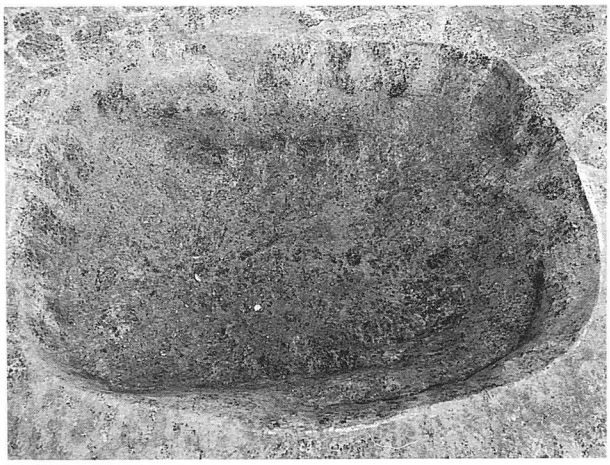
4．SD313、314（北側）



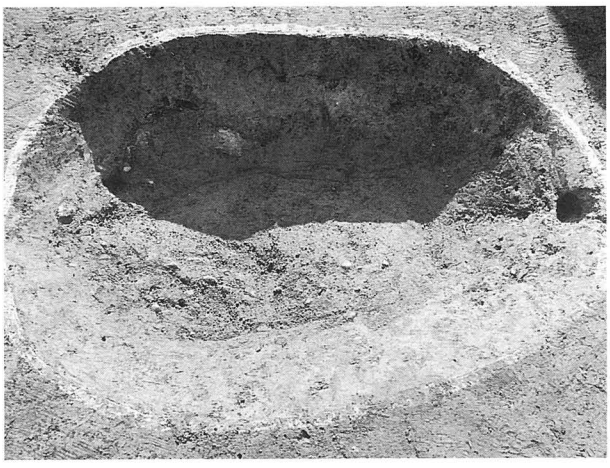
5．SD315



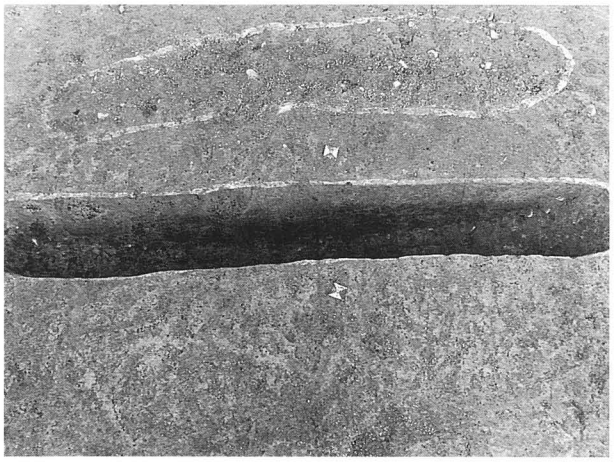
6．SD316



7．SK301

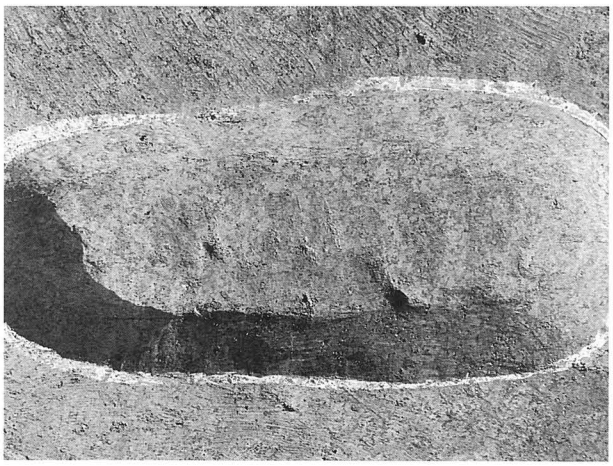


8．SK302



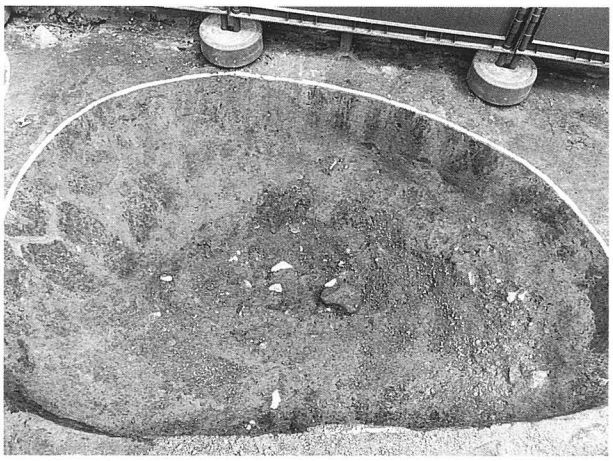
1．SK303

2．SK304



3．SK305

4．SK306

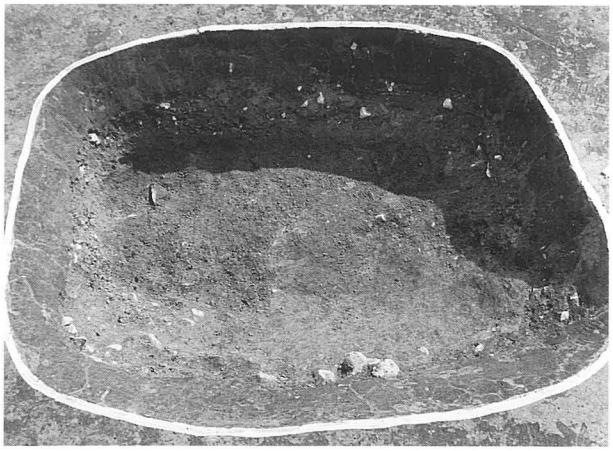


5．SK307

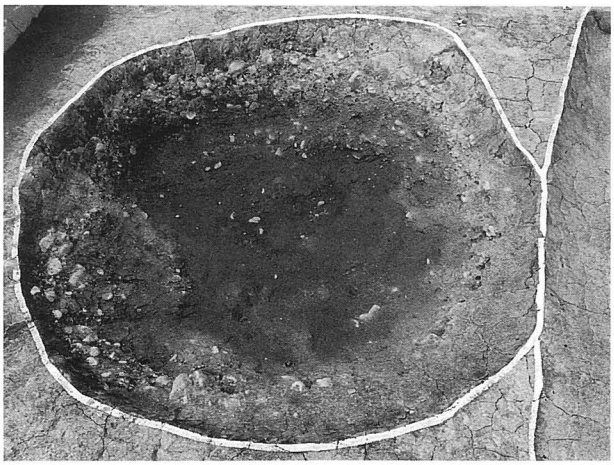
6．SK308

図版8

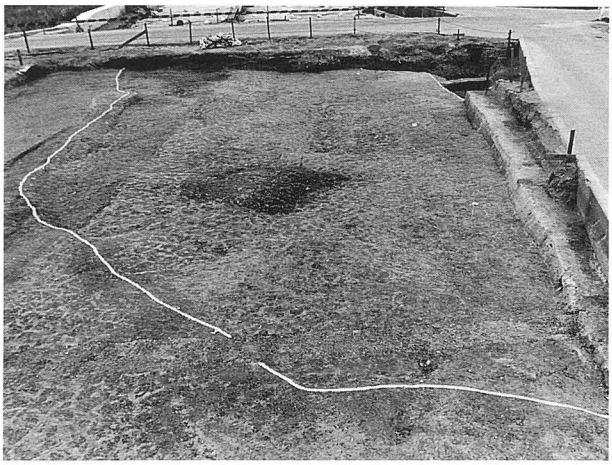
1．SK310



2．SK312



3．SK313



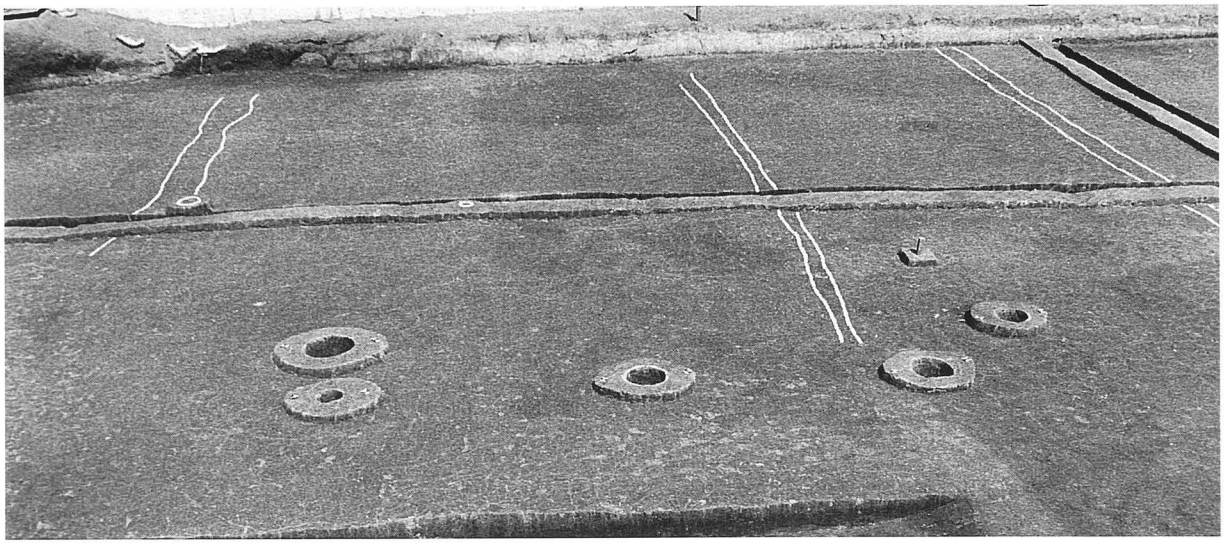
4．SX301

5．調査以前（4工区）

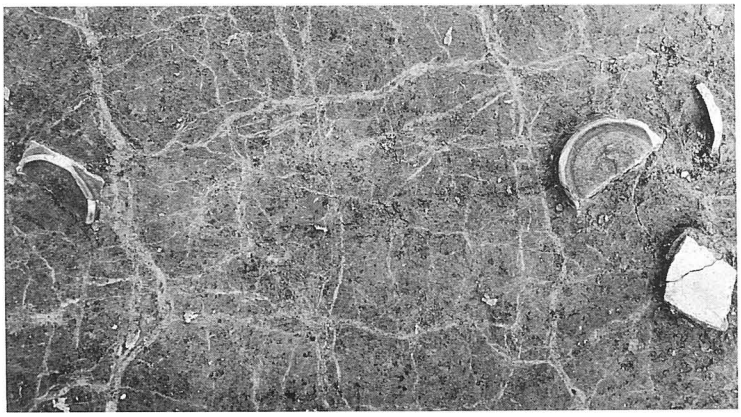
1．Ⅰ期水田（東より）

2．Ⅰ期水田（西より）

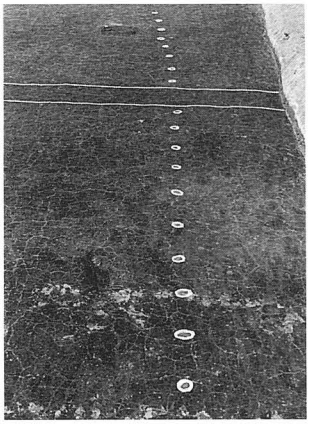
1．Ⅱ期水田（西より）



2．Ⅱ期水田

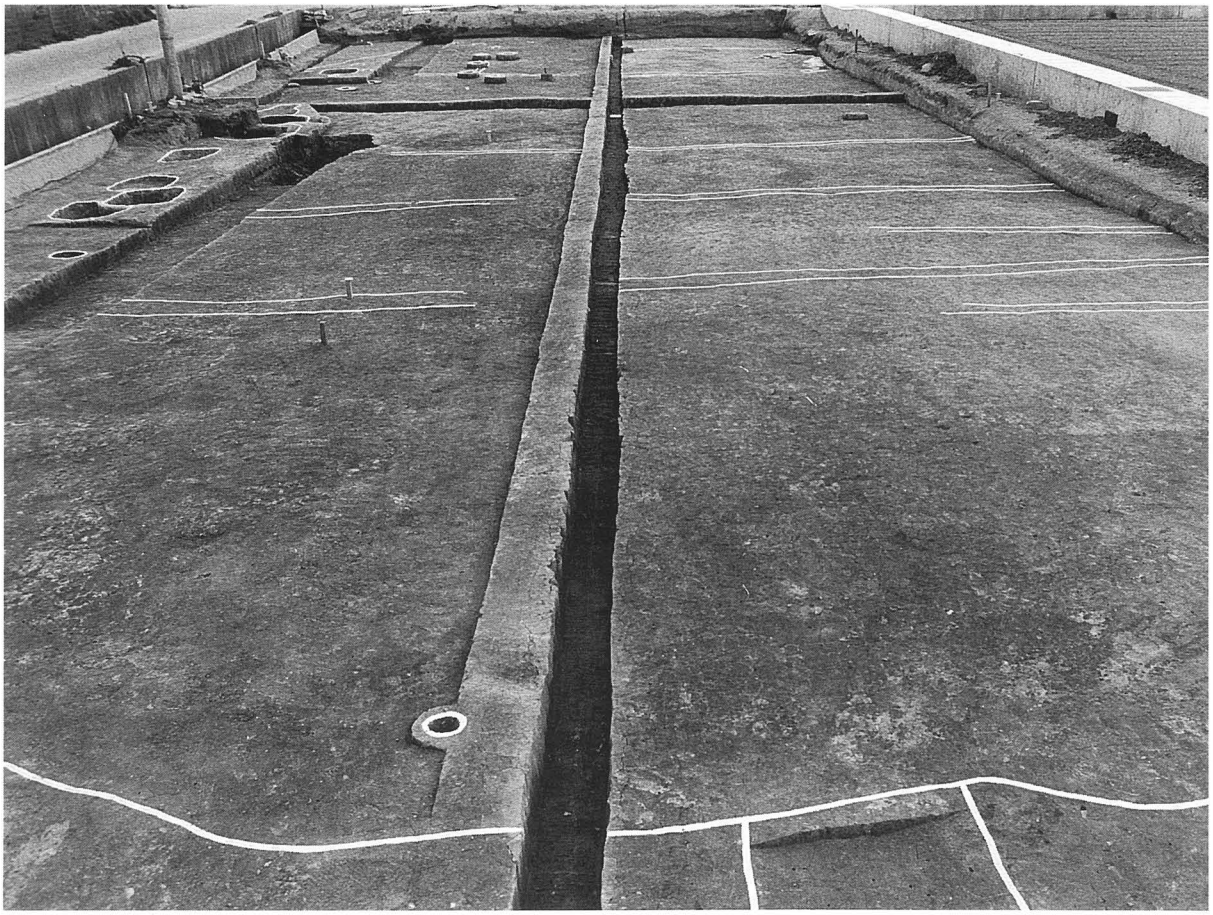


3．Ⅱ期水田遺物



4．Ⅱ期水田

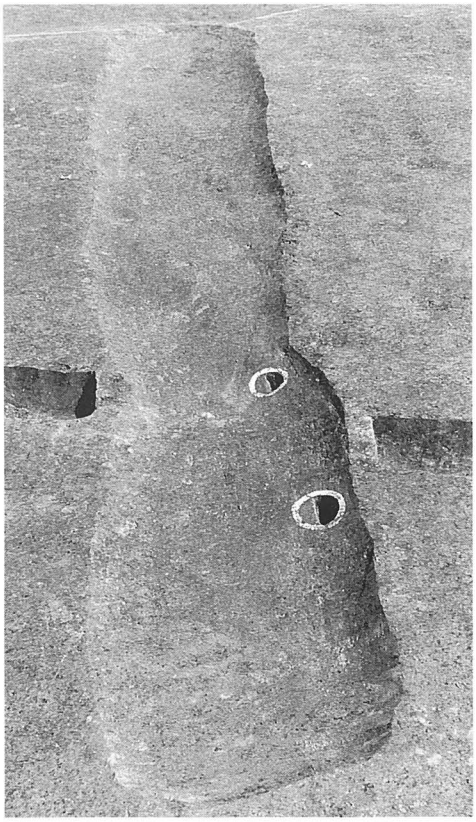
1．Ⅲ期水田（西より）



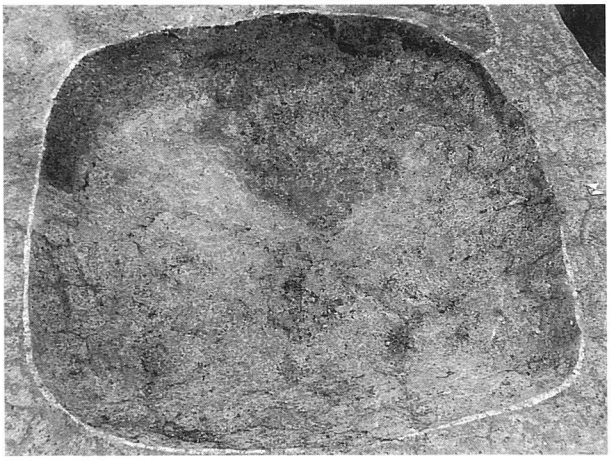
2．Ⅲ期水田（東より）

1．SB401

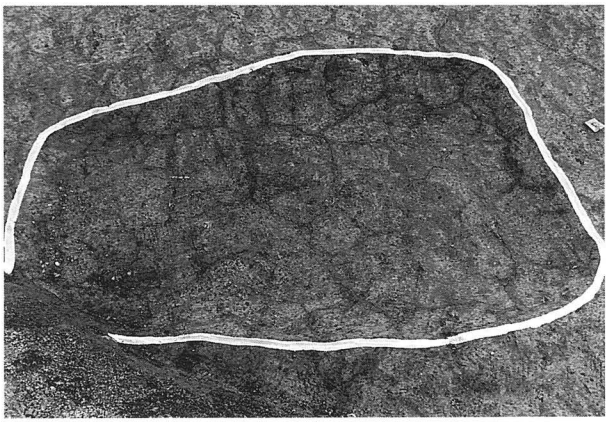
2．SD401



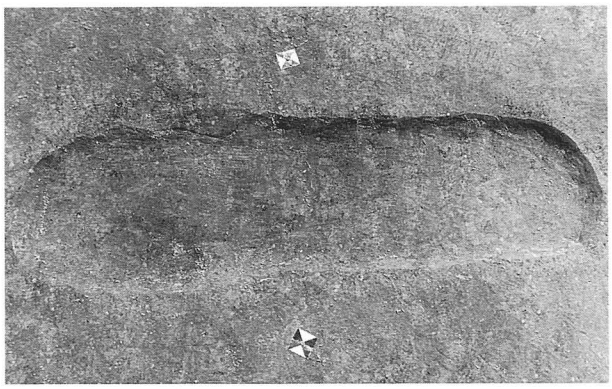
3．SD402



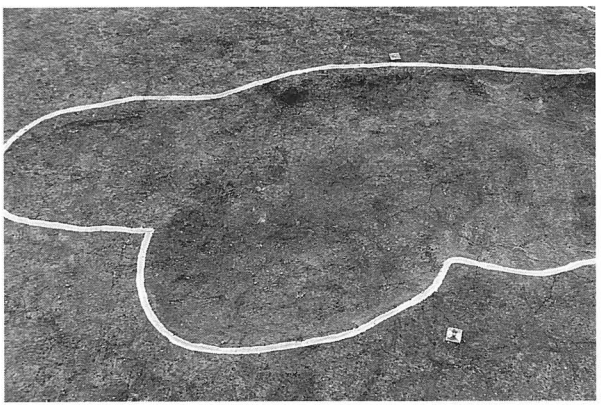
4．SK401



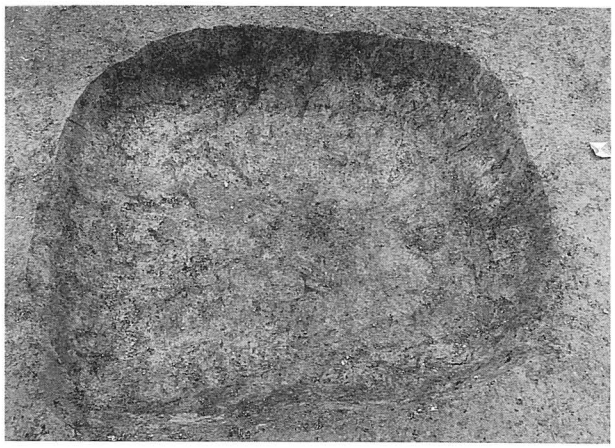
5．SK404



6．SK405

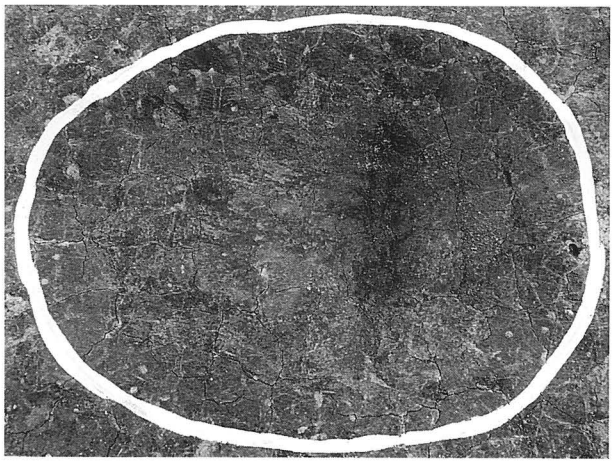


7．SK406



1．SK407

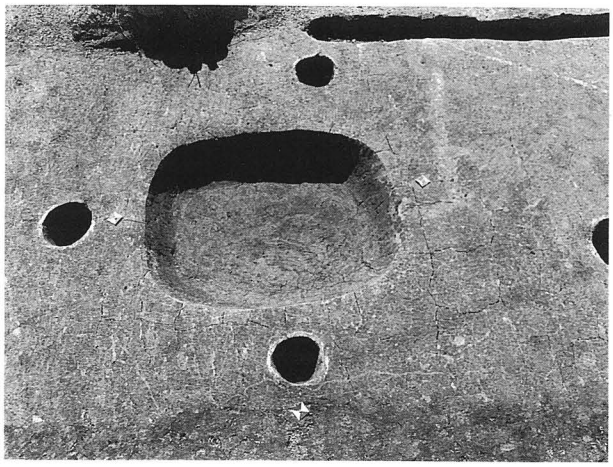
2．SK409



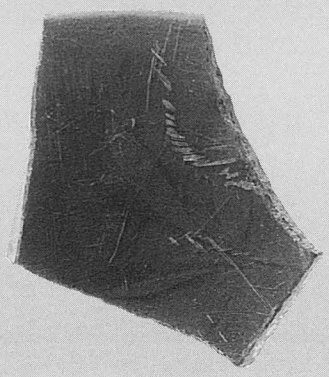
3．SK410

4．SK411～413

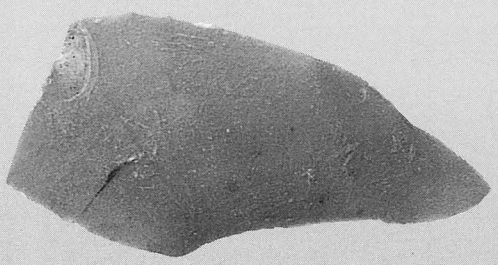
5．SK414



6．SK418

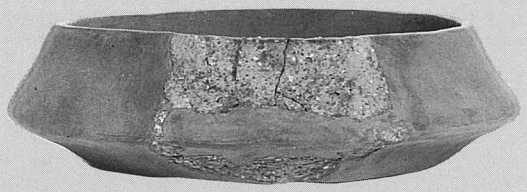


12—29



12—30

11—12



18—9

31—4

13—34

13—35